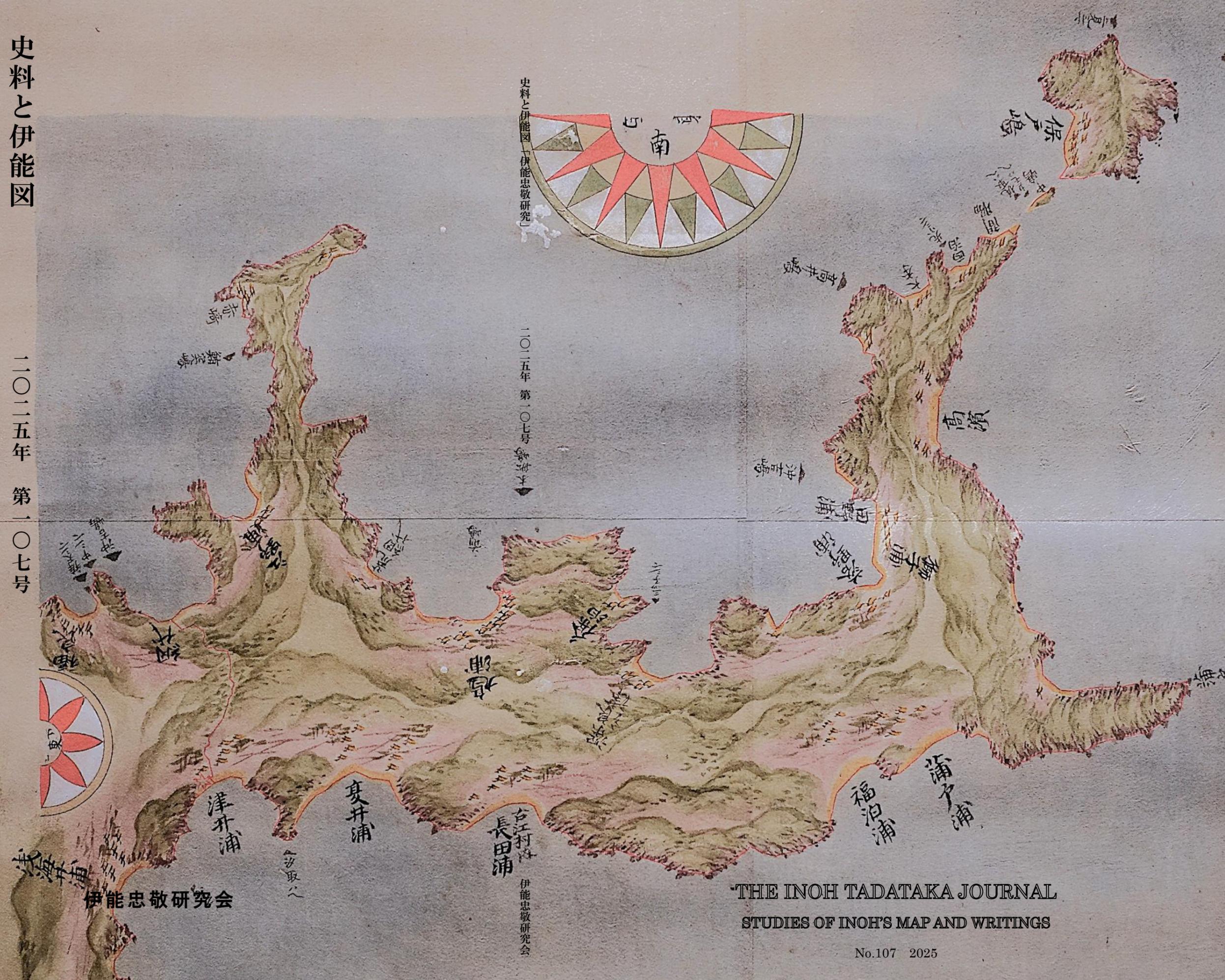


伊能忠敬

研究

史料と伊能図

二〇二五年 第一〇七号



史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇二五年 第一〇七号

伊能忠敬研究会

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.107 2025

東京国立博物館所蔵の大図
「九州沿海図 第5 佐伯」から

表紙は国の重要文化財である「九州沿海図 第5 佐伯」から四浦半島附近を拡大したものである。縮尺三万六千分の一の大図で、縦一三五cm、横七八cmで軸装されている。表紙は大図の北端部分であり、「九州沿海図 第4 臼杵」の南端と接合するコンパースローズが描かれている。下の図は両図を重ねてみたものである。

原図の範囲は豊後国南部の四浦半島から、佐伯城下、鶴見半島をへて豊後と日向の国境までであり、大分県南部の豊後水道沿岸のリアス式海岸を描く。この地域を測量したのは第七次（第一次九州）測量の時、九州東沿岸を南下していた。坂部貞兵衛が延岡から文化七（一一一〇）年四月八日付で高橋景保に送った書状では、「存外手間取候は佐伯領」と記し、二十日くらいと見込んでいたのが三十六日も掛かり、見込よりも半月も延びてしまったと報告している。その理由として浦々の人家が間遠く、宿泊できる場所も限られているため、一箇所に三、四日ほど逗留して、最寄りの海岸を毎日四、五里測っていると報告している。

津久見湾と佐伯湾を分ける四浦半島の測量は二月二十七日から三月三日まで、手分測量を行った。先端の保土（戸）島は一周を測量しようとしたが、風波のため五町ばかり断念した。そのため島の南東側の海岸には測線は引かれていない。

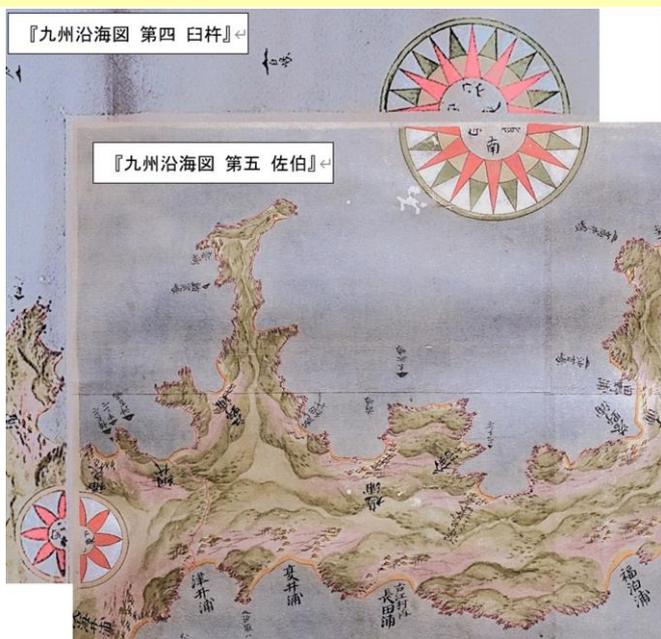
二月三十日は翌日の日食測量の準備のために鳩浦の立法寺に逗留した。『測量日記』には「終日晴天、夜亦同。測量」と記されているようにこの大図にも☆印が確認できる。ところが肝心の三月一日の

日食観測は「初虧（欠け始め）前より黒雲連々と出る。初虧不測。それより雲間に食分を測。食後一面に大曇天」という不満足な観測に終わった。

三月二日は忠敬と坂部が鳩浦に残って残務整理と曆局への書状を作成した。この日の『測量日記』の最後に、供侍成田豊作が「不束なる儀」が有ったため、「此所より長暇遣す」とだけ記し、翌三日にこの件について曆局に追答状を送ったとしている。先程の延岡からの坂部の書状には、去冬以来、御内々申上げてきた成田豊作の件について、「佐伯領にて石場之義、勘解由（忠敬の隠居名）聞き及候由にて」、直ちに暇をだし、此節は至極平和になり、一同安心の次第に御座候とある。忠敬が聞き及んだ「石場之義」とはなんのことか。一体何があったのであろうか。

玉造功

表紙題字は伊能忠敬の筆跡



目次

107号

表紙解説

東京国立博物館所蔵の大図
「九州沿海図 第5 佐伯」から

玉造 功

研究と話題

● 伊能図作図過程に関する新たな論点(1)

星埜 由尚

● 国宝紹介 書状類一六六 伊能忠敬書状

酒井 右二

● 史料紹介「箱田左太夫（良助）書状」と

室山 孝

● 伊能忠敬記念館蔵

加藤 一郎

● 高橋景保自筆書簡について(2)

吉田 正人

● 地球の大きさを測った男たち

資料

● 「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」

渡辺 一郎・井上 辰男

忠敬談話室

● 福山で伊能探訪

室山 孝

会員だより

● 「間重富関係資料」について

玉造 功

各地のニュース

● 戸村茂昭さんを偲んで

田野 圭子

● 豊田市博物館の企画展・

馬場 良平

● ゼンリンミュージアムの企画展・

伊能忠敬記念館の特別展

● 再入会員自己紹介

田中 精夫

お知らせ

事務局

62

6261

6160

5750

46

30

21

15

8

1

下図と作図記録の研究から得た 伊能図作図過程に関する 新たな論点(1)

星埜由尚

1. 大谷亮吉以来の伊能図研究

伊能忠敬が伊能図を世に送り出して以来、200年が経過しました。忠敬の門弟であった渡邊愼の述編による『伊能東河先生流 量地傳習録』(以後『傳習録』と略記。)が忠敬の測量と地図作製に関する当時の唯一の解説書です。約100年後、当時新進の地球物理学者であった大谷亮吉氏が長岡半太郎氏の指示のもとに、伊能家に残されていた史料や地図、測量機器を手がかりに忠敬の測量と地図作製に関する科学技術を研究し、また忠敬の人物像についての史料も渉猟して、忠敬の測量と地図作製の科学技術的手法を解説するとともに忠敬の伝記ともなった大著『伊能忠敬』が岩波書店から大正6(1917)年に上梓されました。『伊能忠敬』は、伊能忠敬研究の嚆矢となり、その後の伊能忠敬研究のバイブル的存在として大きな影響を及ぼしたのは周知の通りです。伊能忠敬とその業績に関して述べている文献には、大谷亮吉編著『伊能忠敬』が引用されないものは皆無と云ってよいでしょう。

その後、戦前戦後を通じ、伊能図についての研究は皆無に等しかったのはご承知の通りですが、保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』が昭和49(1974)年にまとめられ、その中で東京大学名誉教授で埼玉大学教授の広瀬秀雄氏は、『伊能忠敬の全国測量と経度問題』との表題の論文を著し、

伊能図の地図投影法に関する大谷亮吉氏の「サンソン、フラムステッド式」の誤解を指摘しました。また、広瀬(Gotze)は伊能図の作図過程における主要測点間の東西・南北成分距離のデータなどから図上の経度を求め、現代の経度と比較して伊能図の経度の精度を検討しています。また、最近、東京都立大学名誉教授の野上道男氏は、伊能測量における緯度観測値に基づき、大図模写図、中図などの画像における測点の座標値と地理院地図の緯度値との比較を行い、伊能図は、天文測量の行われた測点の緯度観測値によりその骨格が作られ、導線法による測点の位置は、その骨格に基づく細部の測量の結果であると述べておられます(野上2019)。そして、伊能図の測点の位置は、測量の結果から測点間の東西・南北成分距離を算出することにより求められたものであり、伊能図は図解的に作図されたものではなく、測点の座標値の計算による代数的手法により作製されたものであるとされています。また、中図や小図も大図から図解的に縮図されたのではなく、座標値を縮尺に基づき除することにより作図されたとしています。

野上道男氏は、緯度1度の距離即ち度数について、その数値は、第二次と第三次の測量の成果により算出されているが、その算出過程は明確でなく、第四次以降はその数値、即ち緯度1度 $\parallel 28.2$ 里に基づいて測量と地図作製が行われているところから、これは定義値であり、度数の精度についての議論は意味がないとの結論を得られております。これは、卓見であり、伊能測量と地図作製の本質を衝いているものです。一方、測点間の距離については、大図縮尺(1/36000)図上で厘まで記した記録があり、図上での計測は不可能であると

の理由から、代数的手法が採られたと述べておられます。この点については、忠敬が残した下図や作図の記録などを分析すると誤解であり、代数的手法は、測量結果から最初に図化する段階では『傳習録』に述べられている通りですが、その後の段階では代数的手法は放棄され、図解的に作図されていることが明らかです。

伊能図の経緯度について、緯度は天文測量により求め、その精度は良い(悪くない?)というのが大方の常識となっています。大谷亮吉氏も『伊能忠敬』543頁において「沿海實測録上の緯度は其單位の範囲内に於て多くは皆正當なる數値を與ふるものと云ふべし。」と述べています。野上道男氏は、大図、中図における測点の緯度計算値と地理院地図による対応点の緯度値との較差から測量値の補正の過程について述べておられ、『実測録』に記録されている星測緯度測量(天文測量)の精度は良好であると言われています(野上2019a)。

伊能図には、その作図過程において下図と称する原稿図の存在することが大著『伊能忠敬』の中でも述べられています。その解説は、『傳習録』に基づいており、その中では測量成果からまず図化される下絵図と下絵図を接合した寄図についての解説が記されています。大谷(Gotze)は渡邊愼の言う下絵図を下図と称していますが、筆者は、下図を完成図にいたる作図段階における原稿図と捉え、それらの原稿図を下図と総称し、下図を下絵図、寄図、中図下図、小図下図に分類しました(星埜2024)。

一方、作図記録については、天文測量を行った主要測点間の東西・南北成分距離と四国上陸地岡崎村と江戸深川からの東西・南北成分距離及び緯

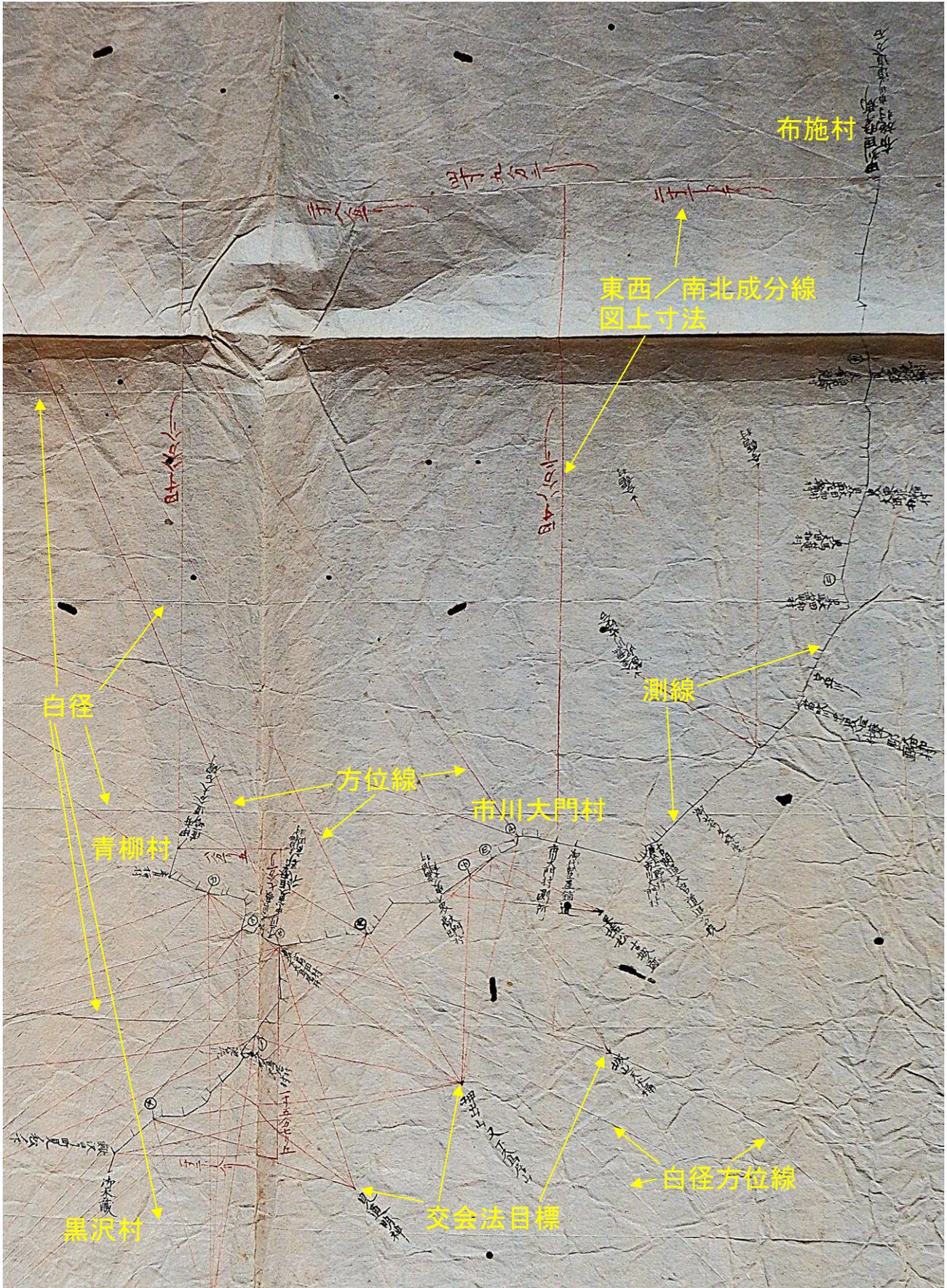


図1 下絵図（一日ごとの測量成果を図化した小区域下図） 「自甲斐国巨摩郡布施村至甲斐国八代郡黒沢村下図」

国宝：地図・絵図類 179 に加筆、伊能忠敬記念館所蔵、無断流用禁止

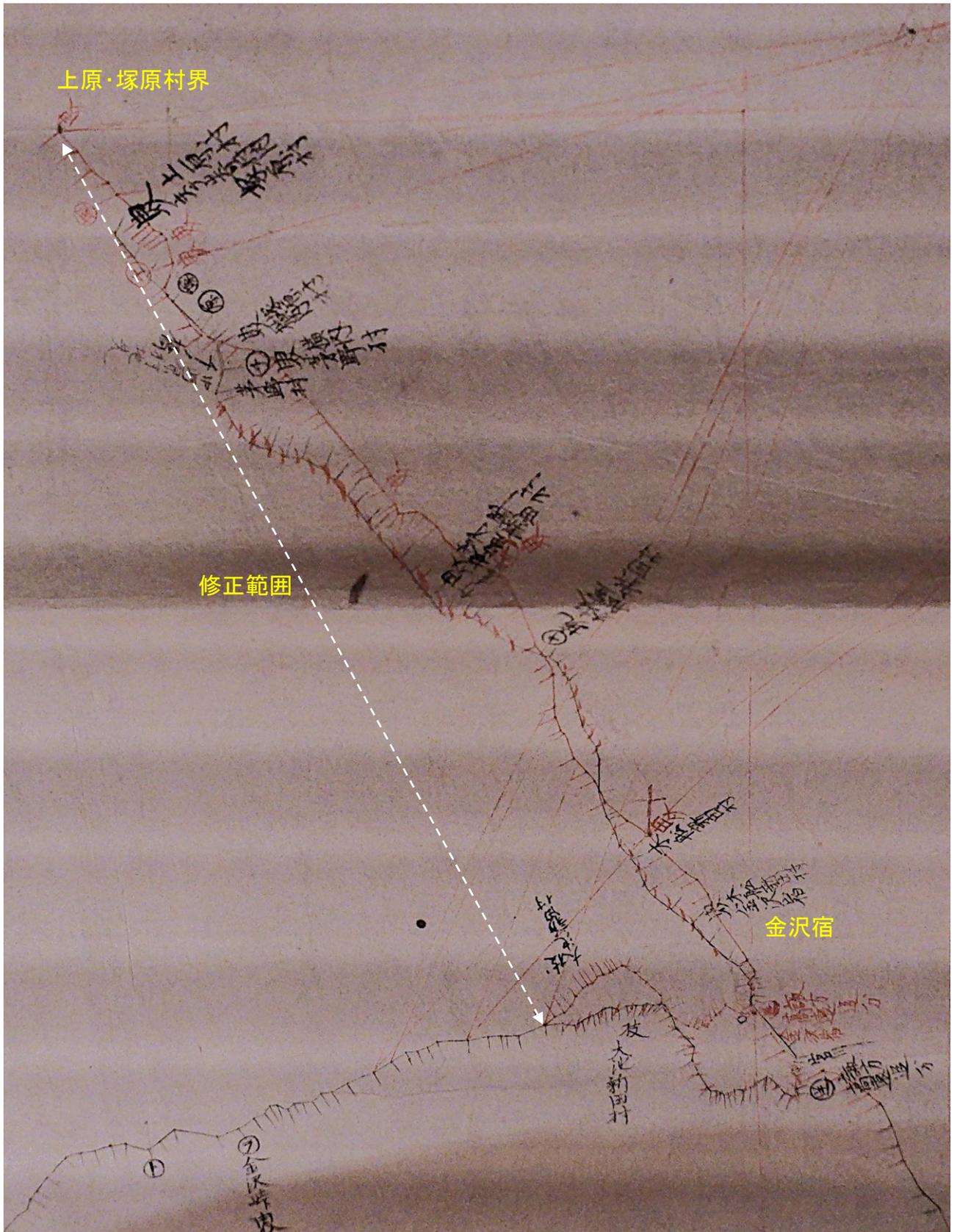


図2 寄図（数日にわたる測量の成果を図化した広域下図）

「自信濃国伊奈郡石曾根村至信濃国諏訪郡駒沢村下図」（国宝 地図・絵図類 270）の部分に加筆
伊能忠敬記念館所蔵、無断流用禁止

度差を記録した『諸国測量地図北極高度并東西度』(以後『北極高度并東西度』と略記。)及び『文化五年四国及大和地測量文化七年九州之一部測量東西及南北距離記』(以後『東西及南北距離記』と略記。)との表題のある2冊の資料集が伊能忠敬記念館に所蔵されています。これらの作図記録には、主要測点間及び阿波岡崎村、江戸深川からの東西、南北成分距離と江戸深川との間の緯度差が記録されています。下図及び作図記録は、伊能図の作図過程を明らかにする上で重要な資料であり、大谷亮吉氏、広瀬秀雄氏、野上道男氏もこれらの資料に触れてはいますが、細部にわたり検討されることはこれまでにありませんでした。

2. 下図(1)について

下図の存在については、『伊能忠敬』においても詳しく述べられており、大谷亮吉氏は、渡辺愼による下絵図を下図と呼び、下絵図を接合した下図を寄図と呼んでいます。保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』の中で保柳睦美氏が解説している「伊能東河先生流量地伝習録(渡辺愼述、編)」には、下絵図と寄図の作図について簡単にその手法が述べられています。それによると、導線法により方位と距離を測量された測量始終点間の各測点間の東西、南北成分距離を測量データから計算により求め、その和を測量始終点間の東西、南北距離として図紙上に展開します。そして、測量始終点間の各測点を図解的に展開し、終点の主要測点と整合すれば良しとし、整合しない場合は、計算の誤り、測量の誤りがあるので修正するとしています。測量始終点間の東西、南北成分距離は、最後

に図上計測してその数値を下絵図に記録して下絵図は完成します。下絵図を接合して寄図を作図しますが、その過程について『傳習録』に具体的な説明はありません。

その後、秋岡武次郎氏が昭和51(1976)年に『地学雑誌』76-6に寄稿した論文「伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するもの若干」の中で東京大学総合図書館所蔵の下図⁹³枚と神戸市立美術館(現神戸市立博物館)所蔵の水沢付近の軸装した下図の存在を報告しています。また、近年渡辺一郎氏が平成15(2003)年に本誌上(『伊能忠敬研究』³²)において「東大総合図書館蔵伊能忠敬測地原図」との表題で東京大学総合図書館所蔵の下図を報告し、その一覧表を掲載して三康図書館に所蔵されている下図との関係についても触れています。平成17(2005)年には、伊能忠敬記念館から『伊能忠敬関係資料目録一下図』が発行されています。

このように伊能忠敬記念館、東京大学総合図書館、三康図書館及び神戸市立博物館に所蔵される下図については、その存在は古くから知られていました。また、それらの下図を対象として行った研究は、管見の限り最近まで皆無であったと言えます。大谷亮吉氏も下絵図と寄図については言及していますが、中図下図及び小図下図のことは触れていないようです。東京大学総合図書館と三康図書館に中図下図と小図下図が収蔵された経緯から見て、大谷亮吉氏は中図下図と小図下図の存在は認識していなかったと思われる。そのような中で、伊能忠敬研究会会員の鈴木純子氏、玉造功氏、菱山剛秀氏、前田幸子氏と筆者を中心にこれらの下図に関する閲覧・調査を行い、その結果について

は、日本地図学会誌『地図』において報告しています(文献参照)。本誌上においても、その概要を掲載させて頂きました。

3. 下図作図過程の記録について

(1) 下図作図過程の資料集

その後、下図についてあれこれ考えていくうちに、伊能忠敬記念館所蔵で公益法人東京地学協会のウェブ図書室において公開されている下図作図過程の資料集の存在に気がつきました。この資料集は、『北極高度并東西度』及び『東西及南北距離記』であり、第六次測量の成果に基づく四国の下図図化過程の記録が都合3度にわたって収録されています。『北極高度并東西度』には、主要測点(下絵図に図化されている測線の始終点間の東西、南北成分距離と四国上陸点の阿波岡崎村と江戸深川からの東西、南北成分積算距離が2箇所)にわたって異なった数値で記録され、『東西及南北距離記』には、別個の主要測点間の東西、南北成分距離と四国上陸点の阿波岡崎村と江戸深川からの積算東西、南北成分距離が記録されています。

これらの資料集の記録は、大谷(1911)においても紹介され、広瀬(1954)は、資料集に記録されている主要測点の東西成分距離から経度に換算し、国土地理院の20万分1地勢図の読図による経度値と比較して経度補正値を求めています。また、野上(2002)は、これらの記録集の数値の桁数から見て測点座標値の計測による読定は不可能であるとして主要測点間の東西、南北成分距離は、測量データからの計算値であるとし、その計算値に基づき測点を図紙に展開して作図したと考えておられます。また、資料集に記載されている主要測点に

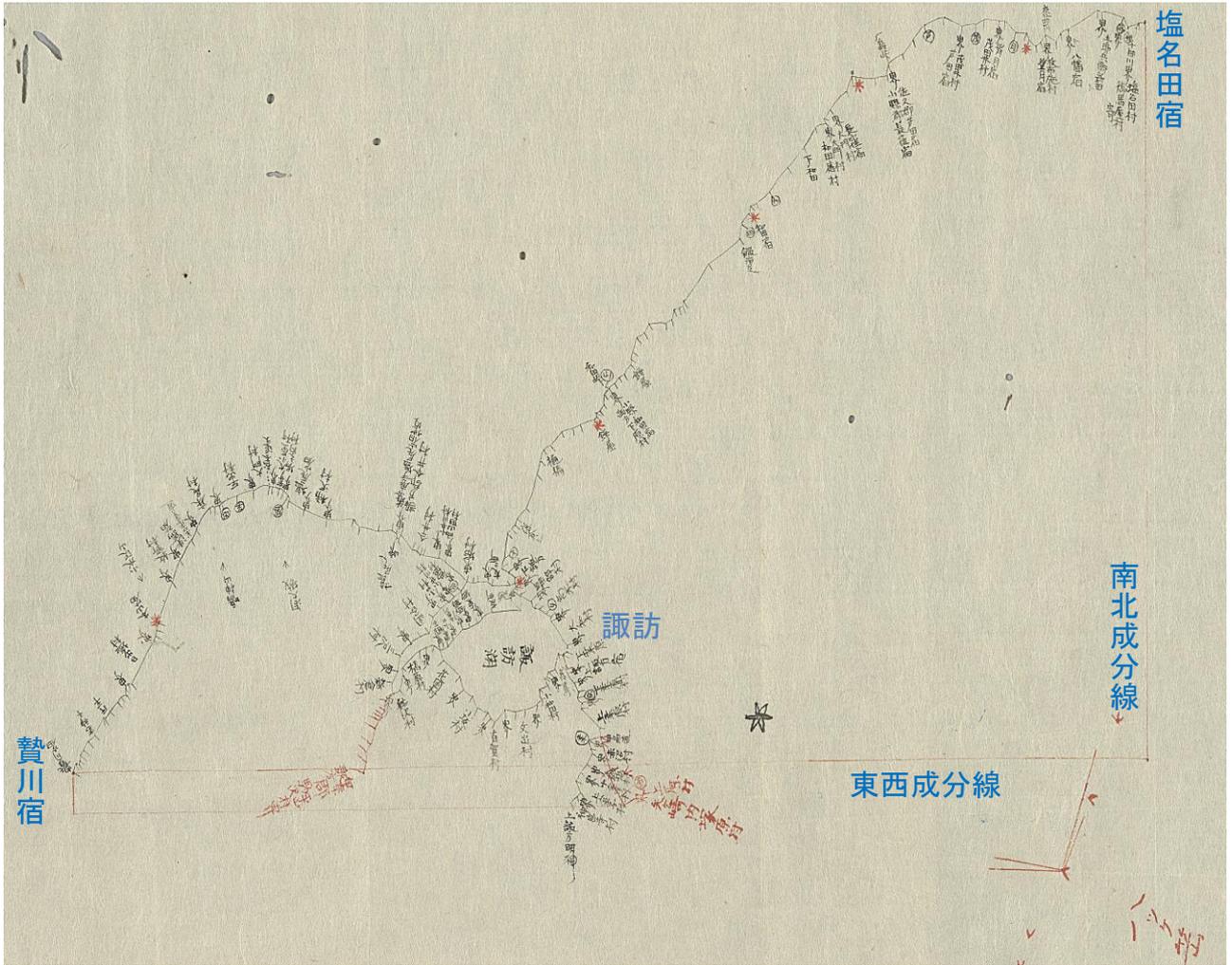


图3 中图下图「中山道六分原图四」(东京大学総合図書館所蔵に加筆)

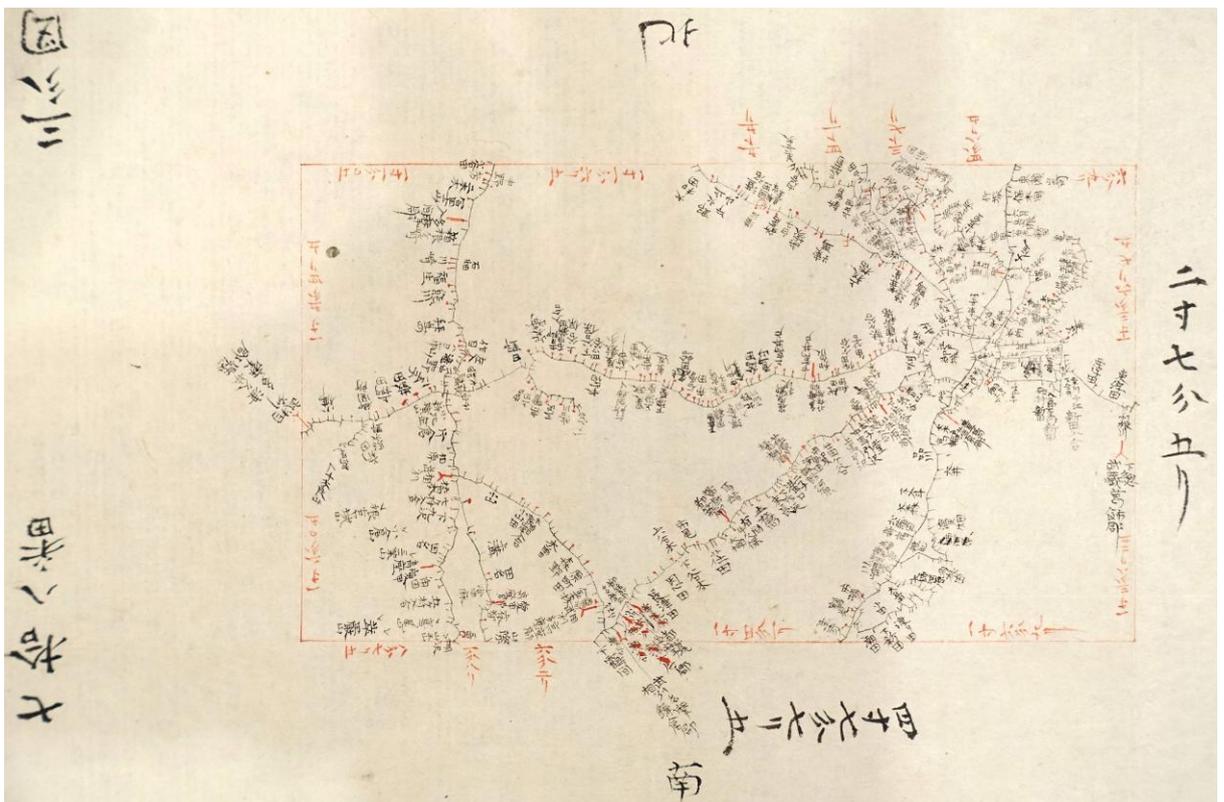


图4 小图下图 及川家文書9「七拾八番三分图(武蔵国各街道下图)」
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

おける江戸深川との緯度差について、緯度差は天文測量により得られた緯度差であり、緯度差に1度 \parallel 28.2里の度法を乗じて江戸深川からの南北成分距離を計算して求めたとされています。

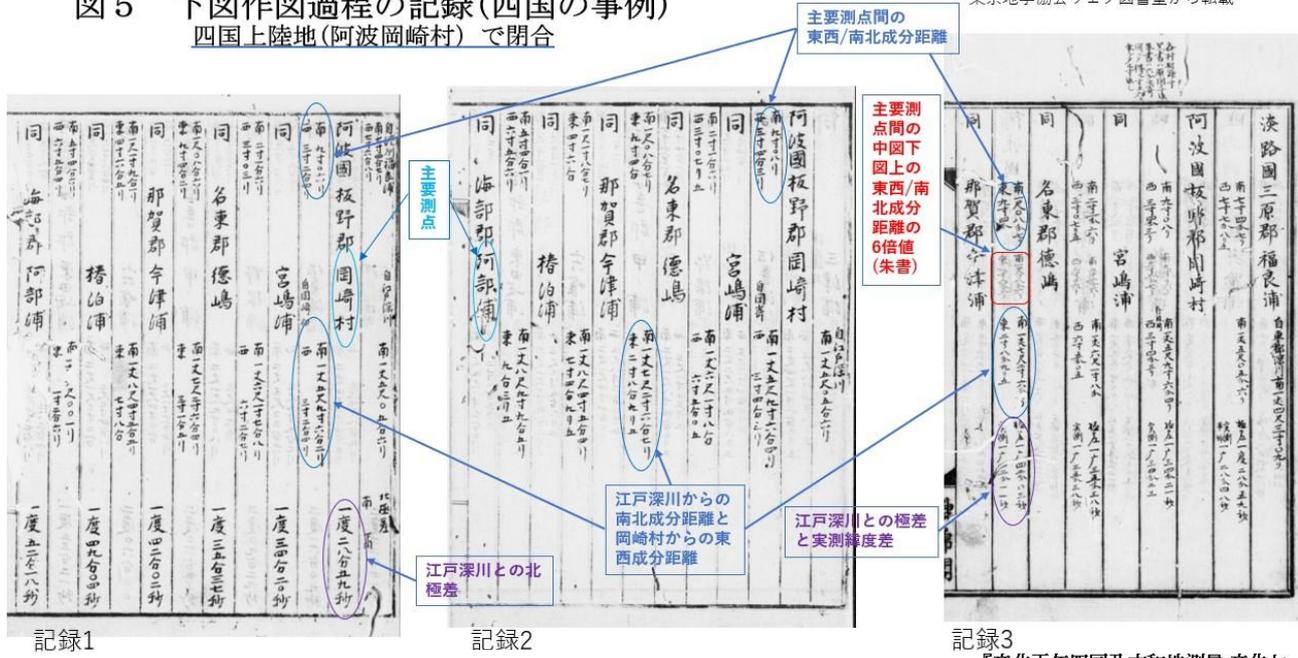
これらの資料集に収録されている記録は、第六次測量の四国測量における記録が大半であり、大坂から松坂までの大和路と浜松から御油までの氣賀街道の記録が含まれます。『東西及南北距離記』には、第七次測量における九州第一次測量のうち、赤間関から府内(大分)、日向、鹿児島、熊本、阿蘇と巡り府内に戻る測線での記録が記載されています。

(2) 主要測点間の東西\南北成分距離と四国測量の閉合せ

筆者は、これらの資料集に記載されている東西\南北成分距離に関して『北極高度并東西度』の2箇所の記録のうち、先に記載されている記録を「記録1」、後に記載されている記録を「記録2」とし、『東西及南北距離記』に記載されている記録を「記録3」として記録の持つ意味を考えてみました。記録1から3までそれぞれ別の記録であり、主要測点間の東西\南北成分距離と江戸深川と四国上陸点阿波国岡崎村からの東西\南北積算距離が記載されており、記録1から3までの順序で記載されています。まず陥りやすいのは、これらの資料集の記載の順序による先入観で記録の先後関係を決めてしまうことです。『北極高度并東西度』における記録1と記録2の掲載の順序から記録1、2の順序で記録の数値は得られたと先入観を持つ可能性があります。そこで、これらの記録に付記されている注記と江戸深川と四国上陸点阿波国岡

・伊能忠敬記念館所蔵に加筆、無断流用禁止
・東京地学協会ウェブ図書室から転載

図5 下図作図過程の記録(四国の事例)
四国上陸地(阿波岡崎村)で閉合



『諸国測量地図北極高度并東西度』

『文化五年四国及大和地測量 文化七年九州之一部測量 東西及南北距離記』

崎村からの東西\南北成分積算距離を分析し、四国を時計回りに測量し、四国上陸点の岡崎村に戻ったときの測線の閉合せを検討しました。

閉合せの検討の結果、下図作図過程における記録1から3に示される主要測点間の東西\南北成分距離と江戸深川と四国上陸点阿波国岡崎村からの東西\南北成分積算距離は、記録2・記録3・記録1の順序で得られたものであることが判明し、その順序で寄図段階の測点位置の補正・調整が行われたと考えられるに至りました。また、下図に記載されている東西\南北成分距離は、図上で計測した数値であることを筆者は昨年地学雑誌に投稿した論文(星埜 2024)の中で述べていましたが、記録に付記されている注記からも、そのことが補強されました。

(3) 江戸深川と主要測点間の緯度差

これらの資料集には、主要測点の江戸深川との緯度差が記録されています。但し、記録1に付随して「北極差」、記録3に付随して「実測」、「極差」が記録されており、記録2には緯度差は付随していません。「北極差」と「極差」は、いずれも北極高度角差の意味であり、江戸深川からの南北成分距離を1度 \parallel 101.52寸(大図縮尺の場合)の度法で除した数値です。一方「実測」は、天文測量により求めた緯度差であり、秒の単位まで記述しています。1秒までの記述は、野上(2024)によれば、大気補正により秒の単

位まで記したのであろうとされています。

「実測」、「北極差」及び「極差」の相互の較差などを検討すると忠敬の天文測量についての認識を改めるべきことに気がつきました。忠敬は、天文測量を重視し、天文測量によって導線法の測量結果を補正したと言われています。大著『伊能忠敬』以来、忠敬の天文測量の意義については、細部はともかく衆目の一致を見ていたものと思われる。

大谷亮吉氏の解説によると、忠敬の用いた象限儀は、角度の読み取りは対角線尺により、1分まで目盛りによる読定が可能であり、10秒または5秒まで目測が可能であるとされています。大雑把に言って緯度1秒は、約30mです。10秒は300mであり、仮に10秒の誤差があれば、大図縮尺では図上約8mmの誤差となり、前述した測線の閉合差と比べても無視できるほど小さいとは言えません。忠敬の天文測量は、万全の測器設置準備が行われたわけではなく、10秒以内の誤差で観測されたとは言えないでしょう。伊能測量隊による主要地点の緯度は、『大日本沿海輿地全圖』とともに幕府に提出された『輿地實測録』に記録されていますが、その緯度値(30秒単位)と「実測」、「北極差」とを比較すると、『輿地實測録』の緯度値は、必ずしも実測によるものではないとの疑問が生じました。

4. 伊能図作図過程の検討

以上述べたことを中心に据え、これまでの必ずしも十分とは言えないが、筆者なりに力を注いできた伊能図に関する科学技術的観点からの研究をまとめてみようという気持ちが芽生え、これまで

諸先学が積み重ねてきた伊能図の科学技術的側面に関する業績を踏まえ、これまでの研究に対する批判的観点も持ちながら、伊能図作図過程について、遺された資料を分析・検討することにより拙論をまとめることとしました。さらに、その点から伊能図の地図史上の意義について、浅学非才を顧みず愚説を述べてみました。それらは、論文の形に既にまとめておりましたが、その内容について、次号から本誌に掲載したいと思っております。

このような報告に至ることができたのは、下図の閲覧をともにした当会会員の鈴木純子氏、玉造功氏、菱山剛秀氏、前田幸子氏のほか、野上道男先生、石原あえか先生、伊能忠敬記念館、東京大学総合図書館、三康図書館での閲覧の際に便宜を頂いた方々のおかげです。この場を借りて感謝申し上げます。

文献

- 秋岡武次郎(1967)『伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するもの若干』地学雑誌 76-6. 39-47.
 大谷亮吉(1917)『伊能忠敬』岩波書店.
 野上道男(2019)伊能大図の計測から見た導線位置の精度と補正—第6.7.8次測量までの例—. 地図 57-4. 1-12
 野上道男(2021)伊能忠敬の測量成果の地図化法. 地理学評論 94. 427-449.
 野上道男(2024)伊能忠敬の恒星観測と緯度. 地学雑誌 133. 49-61.
 広瀬秀雄(1974)伊能忠敬の全国測量と経度問題. 保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』. 139-160.
 保柳睦美編著(1974)『伊能忠敬の科学的業績』.

古今書院:

- 星埜由尚(2022) 東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」に関する若干の考察. 地図 60-2. 27-33.
 星埜由尚・石原あえか・鈴木純子・玉造 功・野上道男・菱山剛秀・前田幸子(2022a) 東京大学総合図書館所蔵「測地原圖」について. 地図 60-2. 34-42.
 星埜由尚・鈴木純子・玉造 功・菱山剛秀・前田幸子(2022b) 三康図書館所蔵「伊能忠敬實測原圖」について. 地図 60-3. 19-22.
 星埜由尚・鈴木純子・玉造 功・菱山剛秀・前田幸子(2024) 伊能忠敬記念館所蔵の下図について. 地図 62-2. 11-18.
 星埜由尚(2024) 伊能図下図から見る伊能図の作図過程. 地学雑誌 133. 465-484.
 渡辺一郎(2003) 東京大学総合図書館蔵伊能忠敬測地原圖. 伊能忠敬研究 32. 30-33.



国宝：地図・絵図類 120
 「伊豆国附御蔵島沿海地図」のコンパスローズ

伊能忠敬書状

—江戸店支配人(盛右衛門)を糾弾—

佐原古文書学習会代表 酒井 右二

はじめに

佐原古文書学習会では、この間、伊能忠敬記念館に収蔵される未翻刻の国宝書状類を解説している。その過程で解説した国宝書状類一六四は、伊能図が徳島藩蜂須賀家へ提供される経緯を記したもので、これまで所在不明とされていた書状であることが判明した。このことについて、玉造功氏がその成果を本誌第一〇五号において報告し、さらに史料の背景や研究上の意義を発表されている。本稿もそれに続いて、当学習会で解説した伊能忠敬書状のなかで、注目された国宝書状類一六六を、史料紹介するものである。

この書状下書は下図に示されるように、一紙もので、軸装されていない。伊能忠敬関係資料が国宝に指定される前、国重要文化財段階からの書状は、卷子状となっていた。また世田谷伊能家に旧蔵されていた多くの書状は、『世田谷伊能家保管未公開 伊能忠敬文書目録』に列挙されているが、それにも収録されていない。したがって元々この書状は、旧伊能忠敬記念館または旧宅の文庫蔵の一角にあつたと思われる。しかし国重文でもなく、小笠原長和氏らによる『伊能忠敬書状 千葉縣史料近世篇文化史料一』にも取り上げられなかった。明らかに忠敬の筆跡ではあるが、差出人も宛名もない下書の書状であるため、狭間で見落とされていたと思われる。まずは、この書状の翻刻と解釈文を示していこう。

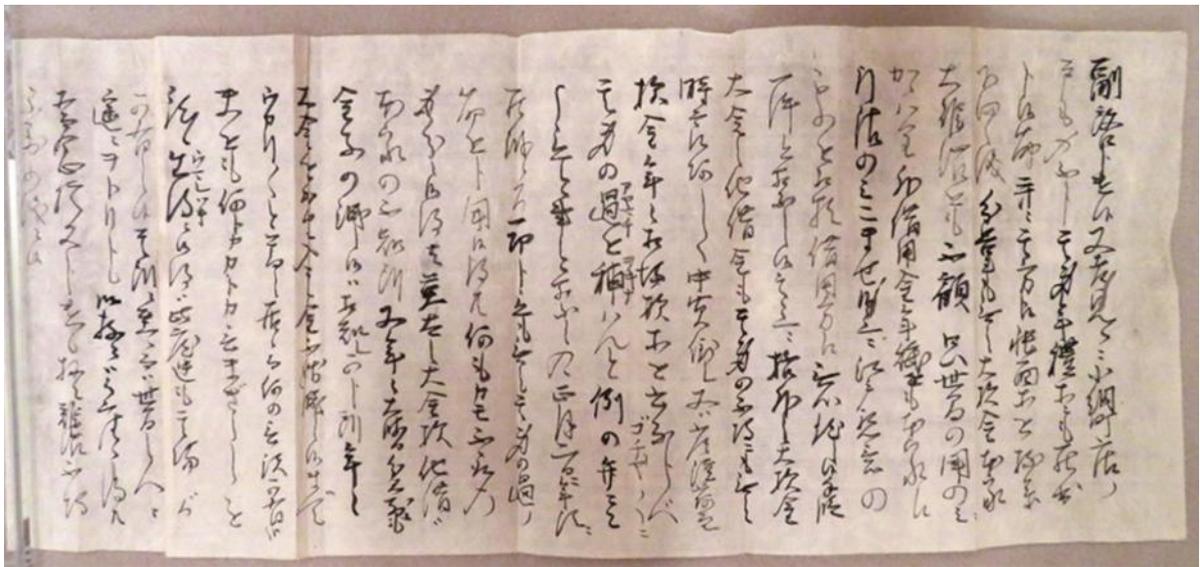


図1 伊能忠敬書状(国宝 書状類166) 伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

翻刻

副啓申遣候、又考見候二、小網町店ノ戸もメ不申、其身年礼等二も罷出申候筋、并二其方江帳面等を持参下向之儀、分量も無之、大損金、本家大難渋とも不顧、只世間の聞のミカ、ハリ、外借用金年賦をも本家江引請のミこませ候上二、江戸懇意のものを相頼、借用方江無心致し候手段一件と察し候之上二、格外之大損金、大金之他借金も其身の不埒二も無之、時節あしく、中買倒レ、又ハ常陸荷主損金、年々相場損等を書ならべ、
其身の^{アヤマチ}過^{ヲギナ}を補ハんと、例の弁二て申立候事と察し入候、正月二日二年頭二罷越候間、一切申立も無之、其身の過ノ筋を申聞候得共、何もカモ不取メノ身分二候得者、莫大之大金損、他借ハ本家の不知所、又年々大晦日盆前二も、金子の減し候ハ相知レ可申所、年々大金をかり入、其金不残減し候までウカリ〜と暮し居候而、何の言訳可有哉、夫をも何トカカトカ云まざらしを
致候、^{ウマレツキ}生得^ニ二候得ハ、此度逆も其場^{ニ而カ}可有之候、其所二至候而ハ、世間之人二遙ニヲトリ申候、御存二ハ御座候得共為念猶又申遣候、扱々難渋不埒千万の儀二候

翻刻文中の「」は、学習会で確定できなかった未詳な文字で（ ）は筆者の私見である。次項の解釈文も筆者の見解であり、文責は筆者にある。

解釈文（ ）は筆者が意味を補った部分である添えて申し遣わす。また考えて見たところ、小網町店（伊能家の江戸出店）を戸締め（閉鎖）しないで、自身は年頭の挨拶に、臆面もなく人前に出ているとのこと。あなたの方（佐原）へは（弁解に）帳簿を持参して下向すること。身の程も弁えず大損金を出し、本家（伊能家本店）が大いに難渋していることも顧みないで、ただ世間への外間のみ気に掛け、外部から借用した返済金の年賦払いも本家の方へ付け回して引き受けさせた。そのうえまた、江戸で懇意の者に頼んで借用をねだるやり口は、大事件だと思われる。さらに、並はずれた大きな損金や巨額の借用金は、自身の不行届によるものではなく、時節柄の悪さや仲買人の倒産、または常陸の荷主の損金、年々の相場の損金など、ゴチャゴチャな（理由を）書き立て、自身の過ちを埋め合わせようとして、いつものように弁解を申し立てることは十分に察せられる。正月二日、年頭挨拶に（こちらに江戸の忠敬隠居宅に）やって来たが、一切何も申し立てなかった。そこで当人の過ちの事由を説論したが、何もかも取り締まれない無能な身の程なので、莫大な損金を出し、本家も知らないところで外から借金もしている。また、毎年盆前、大晦日（の店御）には、有金が減少していることは判明するはずだが、有金が残らなくなるまで、ウカウカとやり過ぎしている。そのようなことでは、何の言い訳ができればよいか。それを何トカ、カ（ン）トカ言い紛らわし

ている。これは、生まれつきの性分なので、今度の場合でも、その場には（見かけはなんとか繕って）座している。けれども、（実際に物事を処理する）場面に至っては、世間の人と比べても遙かに才は劣っている。（本家でも）よく分かっていることとは思いますが、念のためこのようにまた通知するのである。さてもさても、たいへん難渋なことで、まったく不届きな事柄である。

この書状の発信人と宛先

前述したように、この書状の発信人は記されていないが、特徴ある筆跡から見ても伊能忠敬であることは明らかである。また後述するが、小網町店というのは伊能家の江戸出店であることも、これまでの小島一仁氏、安藤由紀子氏らの研究から明らかである。

次に、この書状の文脈と記述内容を検討している。文脈からこのとき発信した忠敬は、江戸にいたことがわかる。したがって隠居後の寛政七（一七九五）年五月以降の書状ということになる。

ここでは、忠敬がすでに本家当主と連絡を取って、小網町江戸出店の営業を停止することが決定されているようである。文中では、江戸店支配人は営業を停止しておらず、年頭挨拶にあつかましく人前に出ているという。正月二日忠敬は、江戸出店支配人が年頭挨拶にやって来た際、当人の不行跡を説論したが聞き入れられなかった。

江戸出店支配人は忠敬の意向を無視して佐原本家へ帳簿を持参し、自己の保身を図ろうとする動きを示す。忠敬はそれを阻止するため、江戸出店支配人の不行跡を厳しく非難し、佐原の本家へそれを受け入れないように、念のため再度通告しよ

うと、この書状を発信したものである。このとき、佐原本家の当主は、嫡男の景敬であり、したがってこの書状の宛先は、景敬ということになる。

それでは、非難されている小網町の伊能家江戸出店の支配人は誰であったのだろうか。この書状に記載された経緯をみていくと、江戸店支配人が忠敬から説論をされても、経営責任をみとめず言訳をし、その意向に従っていない点が注目される。これは、忠敬の権限が隠居して当主でなくなっていることに起因していると思われるが、前当主の忠敬の意向に反して、**佐原の本家当主に自身の意向を通じられる可能性をもつ人物**であることを考慮していかなければならない。そうすると、この人物は特殊な立場をもつ支配人となる。それを確定していく必要があるが、まず前提として、伊能家の江戸出店の状況を見ていこう。

伊能家の江戸出店

世田谷伊能家文書を詳細に研究された安藤由紀子・伊能陽子両氏による『世田谷伊能家保管未公開 伊能忠敬文書目録』解説によれば、**伊能家の江戸出店は加納屋と称して二店あり、一つは大川新兵衛・同治兵衛が担当する店で、もう一つが同じく「三郎治」と称される出店とされる**。そして忠敬の娘稲の婿で盛右衛門については、江戸店の経営者で寛政七（一七九五）年頃に勘当され、稲生三郎治・加納屋三郎治などと称したと解説している。しかしその根拠まで示されていないので、江戸出店とそれにまつわる盛右衛門について、史料上の記載から検証してみたい。

伊能家文書「家牒」（伊能淳家文書）の長由の項では、江戸小網町二丁目二地廻り米穀井二酒問屋二

業ヲ開キ三郎兵衛ト称ス、右地廻リ米穀問屋、長由、兄ノ家ヲ継シ後モ支配人持ニテ立置、昌雄死後永沢征俊ニユヅル」とある。忠敬の先代当主長由は、小網町二丁目（現中央区日本橋小網町）に地廻りの米穀酒問屋を開き、兄の昌雄から家督を譲られた後も支配人に経営させ、昌雄の没後は永沢征俊に譲ったとされている。永沢征俊とは永澤治郎右衛門家当主で、昌雄は寛保三（一七四三）年六月に死去しているので、これ以降小網町二丁目の江戸出店は永澤家に移動したことになる。

江戸店の店御帳は、延享元（一七四四）年七月の店御帳（伊能忠敬記念館蔵G1-16）が唯一残されている。これは佐原本家へ宛てたもので、差出人の記載は「同（伊能）三郎兵衛」とみえるが、黒印と重なって末尾の文字が判読できない。前述の「家牒」の記載から「三郎兵衛」の蓋然性は高いと思われる。黒印の文字は「小網町貳丁目伊能」とあり、商標は「叶」（かの）である。おそらくこの伊能家江戸店の屋号は「叶屋」で、後の「加納屋」に通じるものである。またこの店御帳が残されていたのは、永澤家へ江戸店を譲渡するに当たって作成されたものだったためかもしれない。忠敬が当主となつてからの江戸店をみていくと、伊能豊秋日記の明和七（一七六八）八月十三日に「三郎右衛門殿（伊能忠敬）江戸表へ真木問屋去年相立候処、十一日深川八幡鳥居近所にて火事出三郎右衛門店も焼申候由、飛脚参申候、真木枝七万駄余焼申候由」とあり、深川周辺に薪問屋を明和六年から開店、翌年には焼失したことがわかる。

盛右衛門と江戸出店

盛右衛門の生没年については、佐久間達夫「稲

は忠敬に勘当されたか」（伊能忠敬研究 第38号二〇〇四年）で所収された平山藤右衛門家過去帳に、「文化七（一八一〇）年四月五十五歳没」と記されている。逆算すると宝暦六（一七五六）年の出生となる。

伊能家の家政記録「旌門金鏡類録」（伊能淳家文書）には、安永七（一七七八）年六月佐原村が旗本津田氏に支配替えとなり、知行所支配の役人が佐原に下向したとき「三郎右衛門儀奥州松嶋一覽二罷越し留主にて、智養子盛右衛門罷出候」とある。忠敬が松島旅行に出ており、盛右衛門が代理として応接した。このときすでに盛右衛門は稲の婿養子で、佐原の本家にいた。ちなみに盛右衛門は二三歳（数え年 年齢表記以下同様）である。

天明年間（一七八一〜一八九）の動向は、忠敬が少年期から昵懇であった飯高惣兵衛の記録から示される。飯高家は九十九里粟生村の豪家である。古川力氏は『九十九里浦と伊能忠敬』（備書房一九七九年）で、惣兵衛が甥の盛右衛門を忠敬の養子とする縁組みを仲介したことなど、三者の密接な関係を示した。そこでとりあげられた「惣兵衛第十御用留」天明二年五月の条には、惣兵衛が「鎌倉河岸 盛右衛門」へ書状を出す。盛右衛門はこのとき二七歳、鎌倉河岸（現千代田区内神田）にいたことがわかる。

また、「旌門金鏡類録」には、一同（天明四）年冬より（伊能）三郎右衛門出店鎌倉河岸加納屋新兵衛、（永澤）治郎右衛門出店小網町貳丁目小堀三右衛門、御知行御納米御蔵元仰付られ」とあり、伊能・永澤両家の江戸出店が旗本の領主米を取り扱う「蔵元」に下命された。永澤家の江戸出店は小網町二丁目であり、これは前述の伊能家

から譲られた出店だったかもしれない。天明四年においては、伊能家の江戸出店が鎌倉河岸にあつて、加納屋新兵衛が支配人であった。そしてこの頃、前述の飯高惣兵衛の記録からは、鎌倉河岸に盛右衛門が居住しており、加納屋新兵衛のもとにいた蓋然性が高い。

寛政年間（一七八九〜一八〇一）に入ると、「旌門金鏡類録」寛政五年二月に忠敬が伊勢詣りに出かけたとき江戸の宿泊先は「小網町老丁目加納三郎治」とある。但し翌年以降の記事のように、三郎治が盛右衛門という注記はない。そして、寛政六年の記事に、「閏十一月下旬より小網町老丁目智養子三郎治^{盛右衛門}を以、追願書差出し」とある。旗本領主へ忠敬隠居の承認を求める訴願を展開していたときのものである。ここでは、小網町一丁目に三郎治があり、婿養子盛右衛門だと明確に記している。このとき盛右衛門三九歳。そして寛政七年にも、二月廿二日御地頭所より三郎右衛門代として盛右衛門^{三郎治}召され候二付」とある。盛右衛門が、江戸において伊能家当主の代わりとして旗本屋敷に入入りし、盛右衛門が三郎治を名乗っていると明示している。

それより時期が前後するが、伊能忠敬研究会編『伊能忠敬未公開書簡集』（X-1-13）には、佐原にいた忠敬が、「加納三郎次」「伊能盛右衛門」の両名に宛てた五月二十三日付けの書状がある。ここでは、酒の江戸積み出しを通知したり、加納屋新兵衛店の動向を記したりしている。このことから、伊能家の江戸出店が加納屋新兵衛店と、加納三郎次・伊能盛右衛門の店が、二店同時にあつたことが判明する。また、息子の景敬に当たる「直右衛門」（家督前の嫡子の名）も登場していることから

も、忠敬が隠居する寛政六年以前の書状とみられる。また宛名が連名で、盛右衛門とは別に「加納三郎次」があり、盛右衛門が加納三郎次店の支配人ではない点も判明する。

これまでの史料上の記載から盛右衛門の江戸出店の軌跡をみると、天明年間には鎌倉河岸の加納屋新兵衛の店におり、その後加納屋三郎次の出店に移った。そして、遅くも寛政六年閏十一月頃までには、小網町一丁目で加納三郎治を名乗り、江戸出店加納屋三郎次を後継して支配人となっていたといえよう。

「旌門金鏡類録」には、前述の寛政七年二月二十二日の記事をもって、盛右衛門または三郎治が登場しなくなる。そして、江戸出店に関することは、寛政九年三月に至って記述がある。伊能三郎右衛門(景敬)が、親類の永澤家の一行と伊勢詣りに行く記事で、「同十三日江戸着我等は伊勢町加納屋新兵衛」とある。前述したように、寛政五年忠敬の江戸の宿泊先は、小網町一丁目加納三郎治であった。それに対して寛政九年三月の景敬の宿泊先は、鎌倉河岸から伊勢町(現日本橋本町一・二丁目、日本橋室町二丁目)へ移転していた加納屋新兵衛の処で、加納三郎治ではなくなっていた。このように「旌門金鏡類録」の記載の推移からみると、加納屋三郎治(盛右衛門)の江戸店は、寛政七年二月から同九年三月までの間に、引き払われたことが暗示される。

本稿で史料紹介した書状は、前述したように寛政七年五月以降、深川黒江町に隠居した忠敬が小網町出店支配人を糾弾しているものだったが、以上の史料上の検討から、その支配人は婿養子の盛右衛門であったと断定してよいだろう。

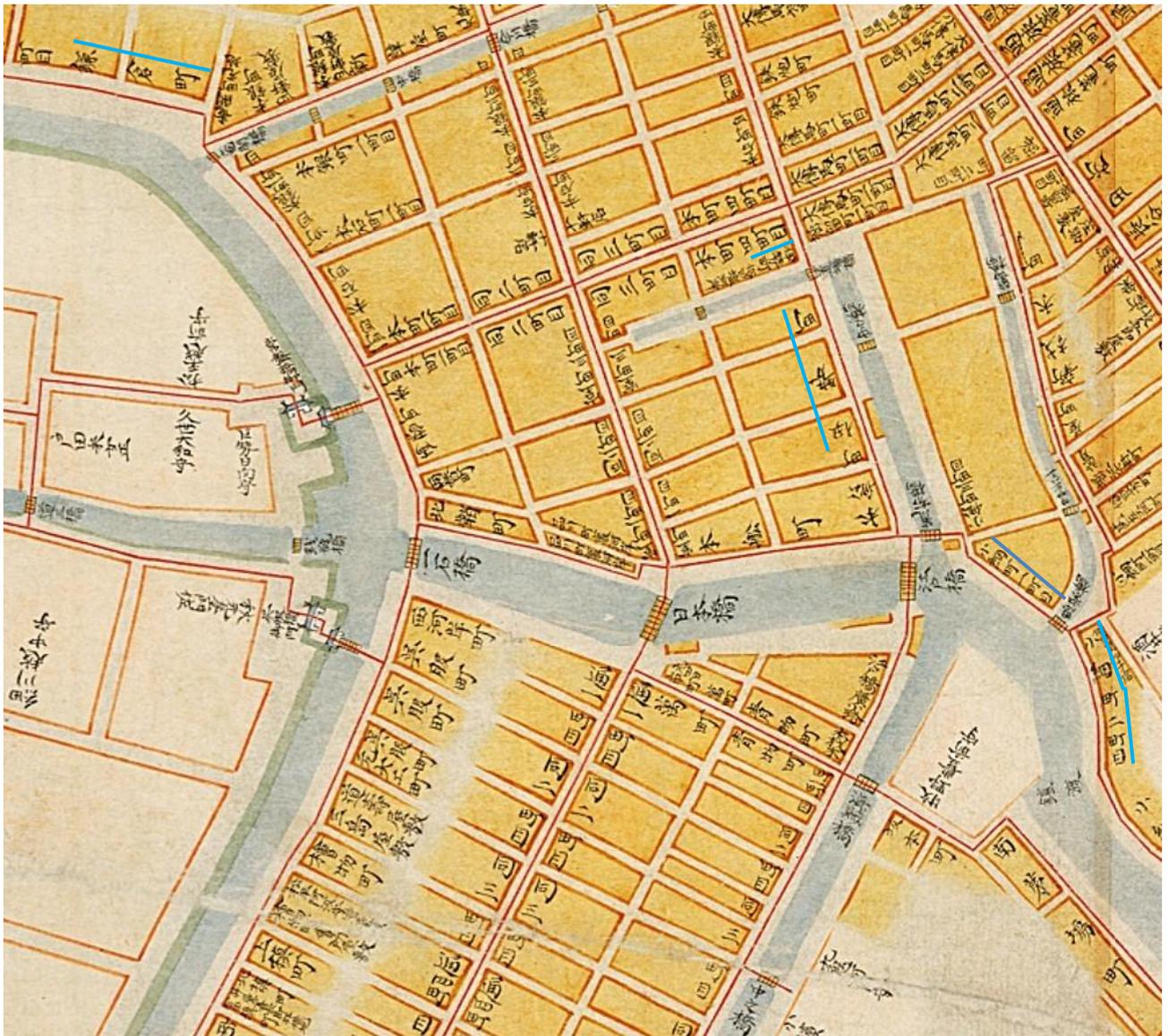


図2 伊能家江戸出店の位置 (青の傍線は筆者 『江戸実測図(南)』より 国土地理院ウェブサイト、古地図コレクションの都市図所収)

盛右衛門江戸店不埒一件

盛右衛門と稲の離別・勘当については、古川力前掲書、佐久間達夫前掲論稿のほか、小島一仁「伊能忠敬の家族たち(二)―イネと盛右衛門―」(香取民衆史9・2003年)がある。小島氏は、古川力前掲書に掲載された飯高惣兵衛の「惣兵衛日記」の記述から、寛政八年四月十二日に盛右衛門が実家の片貝村布留川家に戻ったこと、同年八月十六日に佐原(伊能)平右衛門が布留川家で「盛右衛門一件」を対談したことに注目した。また、飯高惣兵衛が盛右衛門と稲の離別・勘当を忠敬に諫言した書状を再検証し、忠敬隠居後の寛政七年以降のものとし、「盛右衛門江戸店不埒一件」が離別の理由であると解釈した。そして、それらの史料の記述を整合させて、盛右衛門と稲の離別・勘当の一件は、盛右衛門の商売上の失敗が原因で、時期は寛政八(一七九六)年と論証した。しかしその実情については「盛右衛門はよほど大きな失敗をしたのであろう。商売上のことであつたらしいが、残念ながら具体的なことはわからない。」として課題が残されていた。ちなみにこのとき盛右衛門は四一歳となる。

- 本稿で紹介した書状は、小島氏の研究成果を前提にして、書状中の記載内容を考え合わせれば、寛政八年正月頃に発信されたものとなる。そしてまた小島氏が課題とされていたが、離別の事由となった商売上の問題の具体相も判明してくる。前記解釈文と重複するが、その要点を箇条書きに示して確認しておこう。
- i 盛右衛門が江戸店で、身の程を知らない大損金や巨額の借出金を出した。
 - ii 江戸店の借出金を、難渋している佐原の本

家の方に付け回した。

- iii さらにその上に、本家の知らないところで江戸の懇意の者に借金をねだっている。
- iv 盛右衛門は、損金・借金を出した理由を、自分の責任としないで、時節柄の悪さ・仲買人の倒産・荷主の損金・相場の値崩れなど、自分の失態を埋め合わせる言訳を並べ立てて弁解する性格である。
- v 忠敬が経営の失策を説諭しても、取り締まる力量がなく、身の程を知らず負債を拡大させた。

vi 盆前・大晦日の店卸で有金が減少しているのは明白なのに、何の対処もせず、皆無となるまで放置している。見かけだけは繕っている。でも、経営能力は人並みよりも劣っている。

忠敬は、江戸出店閉鎖の経営方針を無視して本店のコントロールから外れ、独自に動いて借財を重ねる盛右衛門に、計り知れない危機を感じ、本店も共倒れとなり兼ねない経営危機を意識していたと思われる。ここでは盛右衛門離別のこととは述べていないが、見栄を張っても、経営的的確な判断に欠け、その対応能力、そして責任意識にも劣ると、評価を下しているのである。

ここで忠敬が糾弾する盛右衛門の行状と照応して、前出の飯高惣兵衛書状の記載内容には、密接な関係がありそうである。次にその関係性に注目して検討していこう。

飯高惣兵衛の忠敬宛書状との関係

この書状は、前述のように古川力前掲書に掲載され、飯高惣兵衛が忠敬に対して、盛右衛門・稲の離別・勘当を諫めたものである。この年代を古

川氏は天明六年とし、佐久間氏は前掲論稿で、寛政六年と修正した。さらに小島氏は前述のように、盛右衛門の離別、片貝村退転の原因を「江戸店不埒一件」とし、寛政八年前後とみなしていた。

原本は所在が明らかにされず、古川前掲書に掲載される翻刻文でしか判読できない。翻字と解釈に異見があるが、大意は読み取れるので、それを検討していこう。古川氏は、書状内の箇条書きに①②③④の番号を付している。ここでは、盛右衛門の行状、稲の妊娠に関する条項を取り上げて、その大意を示していこう。

- ① 飯高惣兵衛は、盛右衛門の江戸店不埒一件が早くに決着すると思っていたが、江戸に出たときに忠敬からの伝言を聞いて驚いた。
- ② このたび盛右衛門と面談して厳しく申し聞かせたが、神妙で一言も言訳をしなかった。
- ③ 忠敬の憤りは尤もだが、夫婦の縁があり、稲も妊娠しているので盛右衛門の離別を勘弁してほしい。
- ④ 稲の産後に、私(飯高惣兵衛)が江戸に出て盛右衛門へ離縁の説得をするよう要請されたが、一日も早く和解して、めでたく出産を待ちたい。
- ⑤ 盛右衛門の不埒の件は、悪心をもって謀計したものでもなく、酒食や博打に溺れたわけでもない。商いで大損を出したことは問題だが経営上では、やむを得ないこともある。
- ⑥ 二〇年余り(安永五(一七七六)以前)父子の契りを結び、姑へも慈しみ深かった。
- ⑦ 盛右衛門の性質は愚にみえるが、愚に悪を兼ねた性質ともみえない。幼年から教育が不足していたのではないかとという人もいる。

この書状は①④にあるように、飯高惣兵衛は忠敬から盛右衛門を糾弾する内容を知らされ、盛右衛門離別の説得を依頼され、それに対して返信したものである。忠敬の言い分は前述の盛右衛門の行状を糾弾したi・viと共通しており、それらに対応して問題を引き取り、慰撫し、忠敬の厳格すぎる処置に対して諫言していた。盛右衛門には、経営の失敗はあつても、悪心はなく、家族を慈しむ面を評価して離別を思い止まらせようとしているのである。

またもう一つ関連史料として、盛右衛門の江戸店経営の行状を示す書状に注目したい。

盛右衛門宛て加納新兵衛・伊能平右衛門書状

『世田谷伊能家保管未公開 伊能忠敬文書目録』

（書簡の部〇二七一）で紹介されたもので、十一月二十四日付けの加納新兵衛と伊能平右衛門が連名して、加納三郎治に宛てた書状である。これを安藤由紀子・伊能陽子両氏は、根拠を記述していないが、年代を寛政六年とし、短く書状の趣旨を解説している。

筆者もこの書状（図3）を実見したが、下書きか或いは控で二通が貼り合わされており、差出人が本家当主に残したものとされる。また二通は、同じ日付で発信され、責付^{せつづ}いているようにみえる。

それらの要旨を摘記していくと、盛右衛門の加納三郎治店では、妻の稲は病気で、当主の盛右衛門は実家の母（片貝村布留川家）の見舞いで三〇日余も長く店を空け、差出人の加納新兵衛・伊能平右衛門が留守中の代行をしていた。両人は「盛右衛門が」ご在宿にこれなく候ては決定仕らざる事ばかりにて何とも難渋仕り候」と述べ、店の経

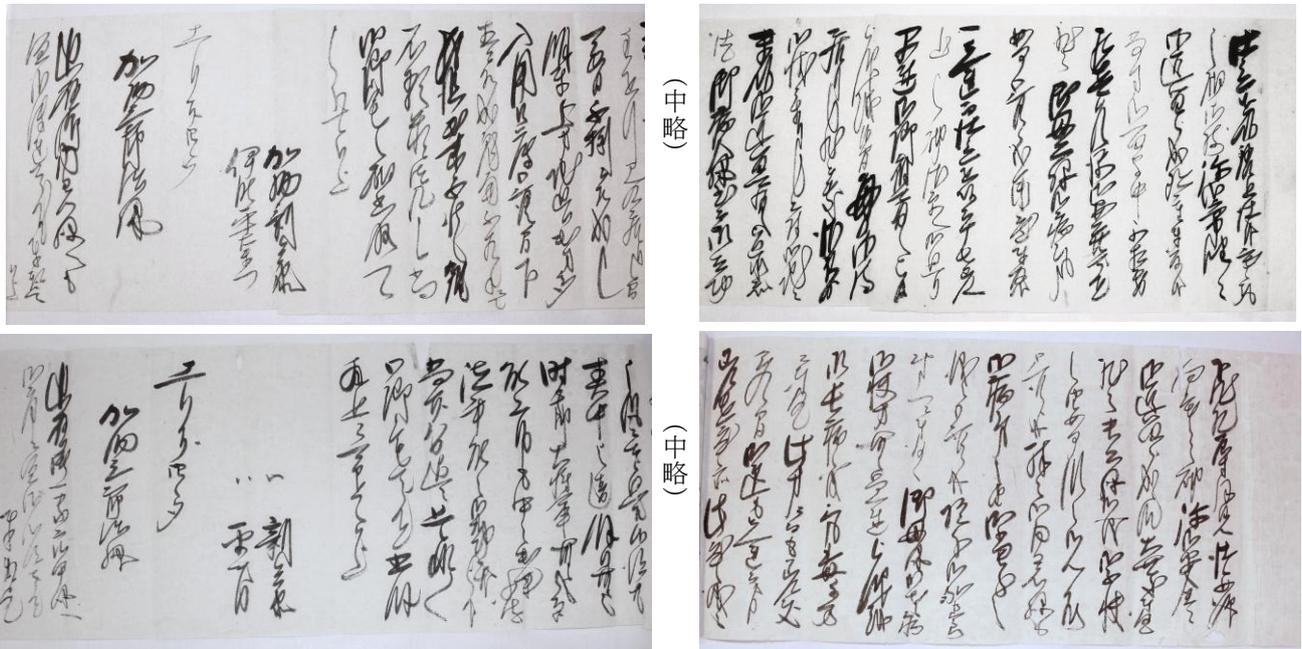


図3 盛右衛門宛て加納新兵衛・伊能平右衛門書状（世田谷伊能家書簡の部〇二七一）

伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

営に困難な事態が生じていることを訴えている。

またこの書状より前にも、江戸店へ早く戻るように出先へ使者を送り、その返事では佐原を回って早速帰着するとのことだったので、毎日待っていた。けれども未だに現地に逗留しているので、商売に極めて支障が出ており、二十八日までには是非帰宅を、と訴えている。口先ばかりで実動しない盛右衛門に業を煮やしている様子もみえる。

実母の看病のために店を長期にわたって空ける盛右衛門には、親族に対する心優しい側面がみえる。飯高惣兵衛書状にあったように経営上の失敗はあつても、酒食や博打に溺れず、家庭人としての盛右衛門の性格の良さは表れている。けれども店経営の責任者としては、長期にわたって職場を留守にし、周辺の人々に迷惑をかけている。また体裁の良いことを言っても実動が伴わず信用を失墜している様子もみえる。このような経営者としての難点は、忠敬が糾弾していた点と共通している面が認められる。

この書状の年代については、寛政六年とされているが、なお検討の余地を残していると思われる。「旌門金鏡類録」の記載では前述のように、寛政六年十一月に盛右衛門は江戸に居て、忠敬の隠居願いで活動していた。この書状でいう稲の病気が妊娠によるものであったとすれば、先の飯高惣兵衛書状で述べられていた

妊娠と近接することになり、寛政七年十一月とみることが出来る。

そして、寛政八年正月には、本稿で史料紹介した書状でみたように、盛右衛門の小網町江戸出店閉鎖が決まっている。この書状の年代を寛政七年十一月とみるならば、江戸出店閉鎖直前の前提的な状況を示していると考えられ、時系列の推移を整合的に理解することが出来る。

おわりに―盛右衛門をめぐる諸課題―

以上、本稿では盛右衛門「江戸店不埒一件」に關係する三つの書状を概略検討したが、この一件の具体相がかなり明らかになってきたのではないかと思う。けれども、まだ検証すべき課題が残っている。おわりに、そのいくつかを例示しておきたい。

一つは、この盛右衛門不埒一件の推移と決着のしかたである。前出の飯高惣兵衛の日記にあるように、盛右衛門が寛政八年四月に実家に戻ったが、八月に至っても、店の管理人と目される佐原の伊能平右衛門が、盛右衛門の実家でこの一件について交渉していた。離縁の問題ばかりでなく、負債処理の問題もあつたのではないか。

前出の「旌門金鏡類録」の記事にもあつたが、寛政九年三月伊能景敬は、伊勢詣りに出かけた。その旅行記である「伊勢太々御神楽旅行記」(伊能忠敬記念館蔵J38)にも、この盛右衛門一件の記事がある(玉造功氏の示教による)。ここでは、「小網町加納三郎次一件も未だ行なりも相分ならず打ち続き、時節柄も宜しからざる折なれども、(寛政九年)二月下旬出府の節、黒江町隠居父勘解由えも

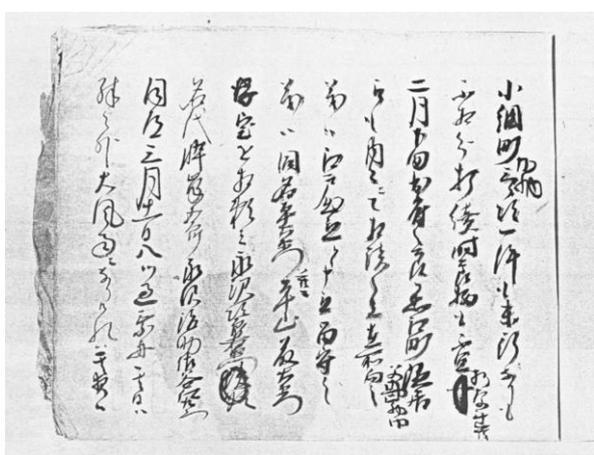
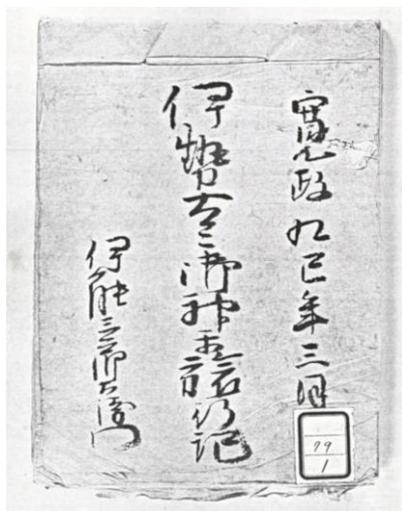


図4 伊勢太々御神楽旅行記(J38)
伊能忠敬記念館所蔵 無断流用禁止

(伊勢詣で店を空けることを)内々に相談の上……留守の儀は同名(伊能)平右衛門、並びに平山藤右衛門後室を相頼み」とある。盛右衛門の一件は年を越して寛政九年になつても決着せず、景敬は成り行きも分からないといっている。

一件処理の長期化の問題と関連して、盛右衛門が実家に戻っても、屋号は加納屋をそのまま名乗り、伊能から稲生と文字を変えても、姓を戻していない。それらの意味を追究する必要がある。

次に、盛右衛門が忠敬と養子縁組を結んだ時期の問題である。古川力氏は前掲書で、盛右衛門が忠敬の養子となつたのは、宝暦十二(一七六三)年、八歳のときとされた。その史料の根拠を示していないが、前出の飯高惣兵衛書状の⑥との間に齟齬がある。⑥で忠敬と盛右衛門の養父子の關係を述べて、「二十余年の父子の契を結」とあつたが、この書状を寛政八(二七九六)年とみて逆算すると、安永五(二七七六)年より前、二一歳よりやや若い時期のことになる。この養子縁組は、娘婿として迎える前提として、行われたようにみえる。古川氏は幼少期から養子となつて佐原の伊能家に居たとするが、その言説を確実にするには、少なくとも傍証する史料がほしい。

このほかにも、さまざまな論点が派生されていくであろう。多くの方々の手によつて、広い視点から追究されることを期待していきたい。

〈付記〉

玉造功氏には有益な資料、ならびにその所在情報を提供を受けた。記して謝意を表したい。
なお本年は、伊能忠敬生誕二八〇年に当たる。それにちなんで、千葉原文書館では中級古文書講座において、「伊能忠敬の人物像をめぐって」と題し、十月二十二日から三回にわたって開催する。本稿で史料紹介した国宝の書状も、第二回でとりあげる。

史料紹介

「箱田左太夫（良助）書状」と
『史林』掲載「伊能忠敬書状」

室山 孝

はじめに

箱田左太夫（良助）とは伊能忠敬の内弟子で、第七次（九州第一次）から第十次まで伊能測量隊に参加し、地図作成にも従事した人物である。

良助は、寛政二年（一七九〇）、備後国箱田村（現、広島県福山市箱田町）の庄屋細川園右衛門の次男として生まれた。名（通称）をのち左太夫、また源三郎に改めている。文化四年（一八〇七）六月、十七歳で江戸に出て、伊能忠敬に入門し測量術を学ぶ。文政元年（一八一八）忠敬の没後、同四年「大日本沿海輿地全図」が幕府に上呈された翌五年頃、御家人榎本家の株を購入して同家を継ぎ、榎本円兵衛武規を名乗った。円兵衛は弘化元年（一八四四）幕府勘定方となり、万延元年（一八六〇）七十一歳で亡くなっている。幕末期に幕府軍艦を率いて箱館戦争で官軍と戦い、維新後明治政府に仕えた榎本武揚はその実子である。

今回紹介の箱田左太夫書状は、「菅茶山関係資料」（広島県立歴史博物館所蔵、国重要文化財）の中に含まれており、第九次（伊豆諸島）測量中の文化十二年（一八一五）五月二十三日、八丈島で茶山に宛てて書いたものである。資料目録では「書状類576」とある。

菅太仲（号茶山）は、良助の出身地に近く近い、山陽道筋の宿駅である備後国神辺（広島県福山市神辺町）に私塾「黄葉夕陽村舎」を開いた文人儒

学者であり、おそらく箱田良助にとって最初の学問の師であった。



図1 菅茶山肖像（部分）
広島県立歴史博物館所蔵
重要文化財「菅茶山関係資料」

寛政八年（一七九六）、茶山の申請により、私塾は福山藩（阿部家）の郷校（「廉塾」）と称されることとなり、茶山は同藩に仕える儒臣となった。頼山陽・北条霞亭などが塾頭を務め、塾生は神辺・福山のみならず西日本各地から集まり、山陽道を往来する多くの文人たちも神辺宿の「廉塾」を訪ねたという。

茶山は伊能忠敬測量隊が神辺本陣に宿泊したとき必ず忠敬を訪ね、茶山の江戸上番の際には、忠敬も良助も茶山を福山藩邸に訪ねるなど交流していた（本誌別稿「福山で伊能探訪」参照）。

茶山の日記「黄葉夕陽村舎詩日記」（文化十三年五月十九日条）に、「十九、大雨、晚晴、得伊能勘解由・箱田左太夫書」とあって、この日、茶山のもとに忠敬・左太夫両人からの書状が届いたと記され、その箱田左太夫書状が今回紹介のものと考えられる。この時期、第九次測量が終わって一カ月後くらいである。

一方の忠敬の書状については「菅茶山関係資料」の中に含まれておらず、かなり以前に流出したと考えざるをえない。しかし富士川英郎『菅茶山』（下）によれば、大正九年（一九二〇）刊行の『史林』（第五卷第二号）に、西田直二郎氏が紹介した、「八月二十一日」付としてその一節を引用した忠敬の書簡（広島県の個人所蔵）がこれに当たると推定される。そこで、箱田左太夫書状（写真）の紹介のあと、この『史林』掲載の伊能忠敬書状についても検討してみたい。



図2 国重要文化財「廉塾」の講堂外観（菅波家編刊『菅茶山と廉塾』より転載）

一、箱田左太夫（良助）の書状

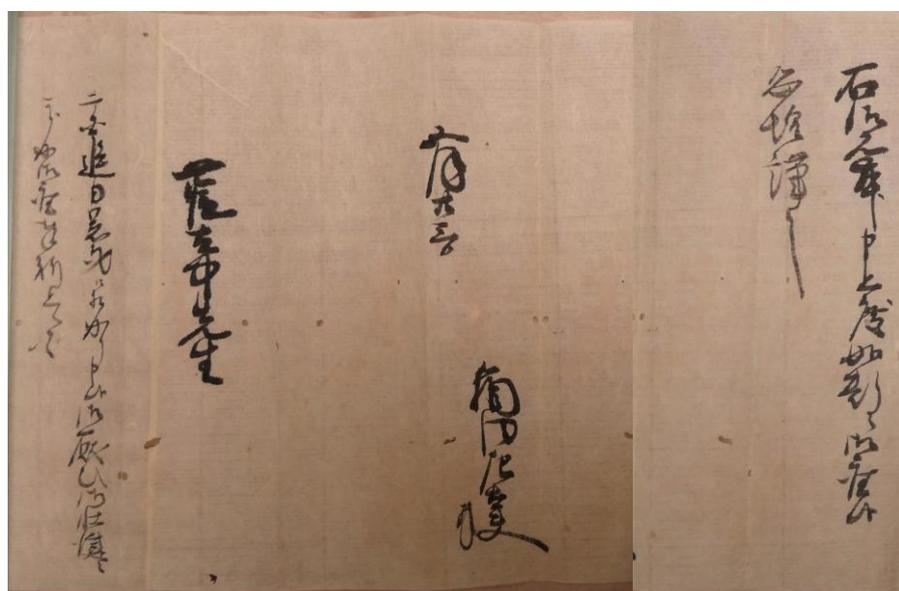
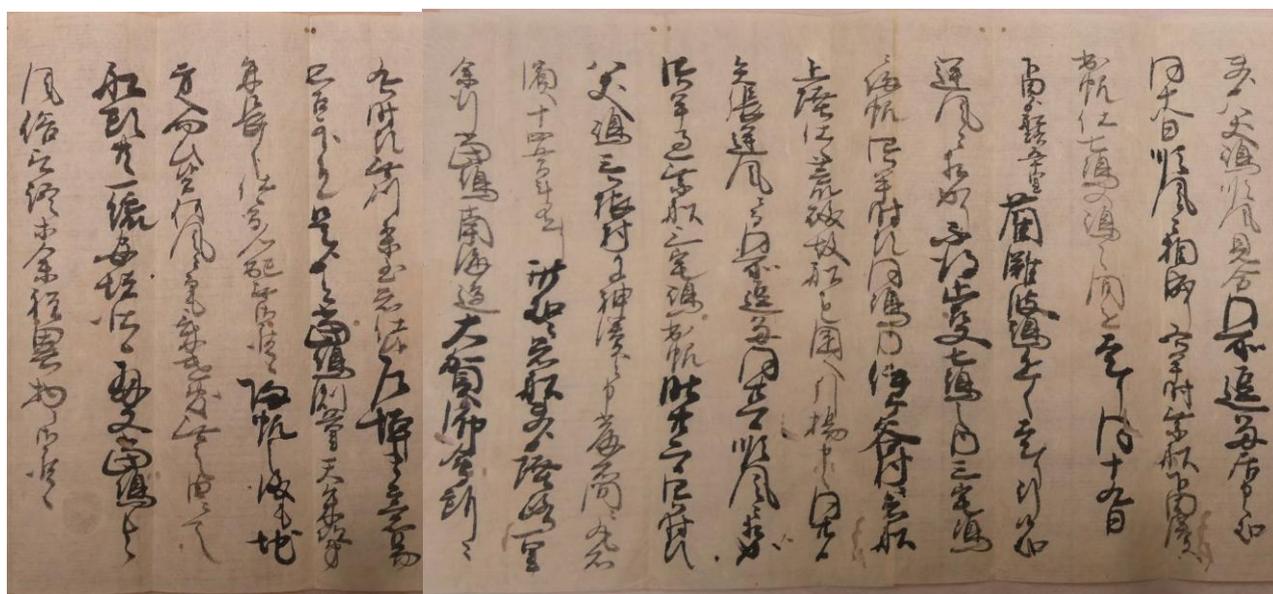
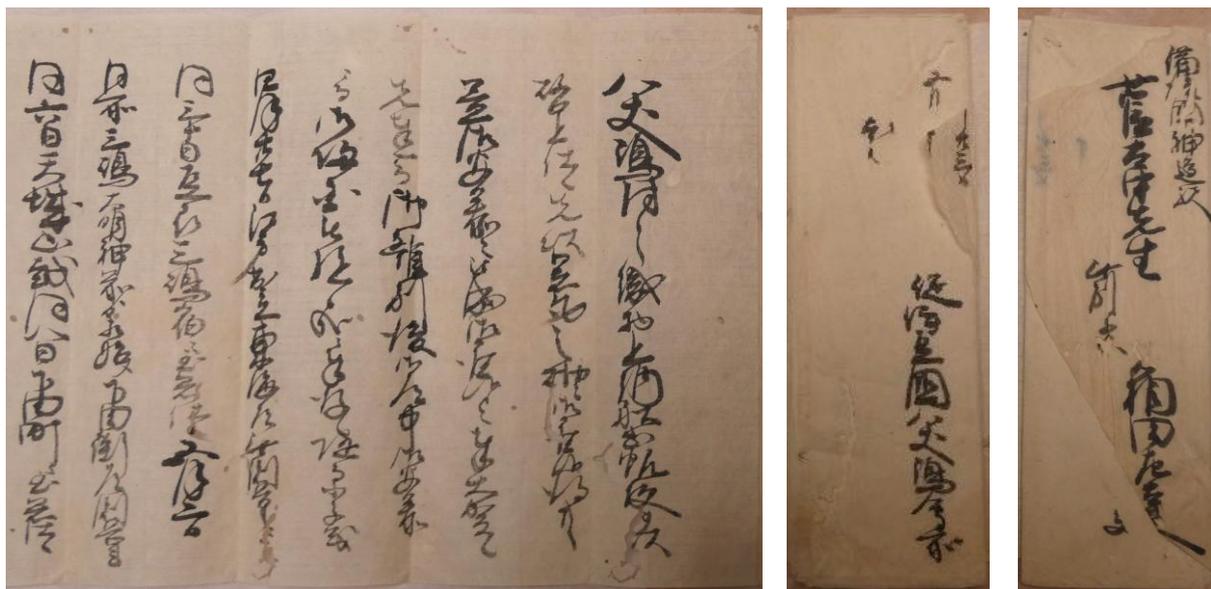


図3 箱田左太夫書状
 広島県立歴史博物館所蔵
 重要文化財「菅茶山関係資料」

【翻刻】（※書状原文の改行通り）

〔封紙裏〕 「備後神辺駅」

菅太仲先生 箱田左太夫

無別条

〔封紙裏〕 「五月廿三日 從伊豆国八丈嶋会所」

封

八丈嶋村之織物上納船出帆便ヲ以、

啓上仕候、先頃暑氣之砌ニ御座候得共、

益御安泰ニ被成御座候与奉大賀候、

先達御離別後、御道中御安泰

ニ而御帰国被遊候哉ニ奉存候、随而小子義

四月廿七日、江戸出立、東海道無測量ニ□、

同三十日、豆州三嶋宿ニ至着仕候、五月二日、

同所三嶋大明神前方相始メ、下田街道測量、

同六日、天城山越、同八日、下田町ニ至着仕候、

夫方八丈嶋順風見合、同所逗留居申候処、

同十八日、順風ニ相成り、五ツ半時乗船、下田湊

出帆仕、七嶋の嶋之間を走り、同十九日、

下田方船路五十里、藪灘波嶋近く走り行候処、

逆風ニ相成り、不得止事、七嶋之内三宅嶋

ニ帰帆、四ツ半時頃同嶋内伊ヶ谷村ニ着船、

上陸仕候、荒磯故船を岡へ引揚申候、同廿日、

矢張逆風ニ而、同所逗留、同廿一日、順風ニ相成、

四ツ半過乗船、三宅嶋出帆、時廿二日四ツ時頃、

八丈嶋三ツ根村字神湊と申巖石間ニ、丸石

浜十四五間斗有り、此処ニ着船、夫方陸路一里

余行、当嶋南海辺大賀御会所ニ

九ツ時頃、無別条至着仕候、乍憚其意易

思召可被下候、是方者当嶋測量、天氣次第

氣長く仕候間、心配無御座候、帰帆之儀も地

方へ向ひ候間、何風ニ而も氣遣敷無之由ニて、

船頭共一統安堵仕候、扱又当嶋者

風俗・言語等余程異物ニ御座候、

右、御見舞申上度、如斯ニ御座候、

恐惶謹言、

箱田左太夫

五月廿三日

拝

菅太仲先生

二白、追日暑氣ニ相成り申候、御厭ひ御壯健ニ

可被成御座奉祈上候、以上、

【現代語訳】（用語・ルビを補足）

八丈島の村の織物（「黄八丈」であろう）を上

納する船便をもってお手紙差し上げます。

暑氣の時節となりましたが、ますます御安泰に

お過ごしのこととお慶び申し上げます。先達（江

戸で）お別れのあと、御道中も御安泰に（備後国

神辺へ）帰国されたようにかがっております。

ついでには私の方は四月二十七日、（伊能測量隊

の一員として）江戸を出立し、東海道を無測量で

（行き）、同三十日、伊豆国三嶋宿に到着しまし

た。五月二日、三嶋大明神前から始め、下田街道

を測量しました。同六日、天城山を越え、同八日、

下田町に到着しました。

それより八丈島へ向かうため、順風の頃合いを

待つて同所に逗留していたしましたところ、同十八日、

順風となり、五ツ半時（夏の時期は今の午前八時

前後か）に乗船し、下田湊を出帆しました。伊豆

七島の間を船は進み、同十九日（未明）、下田よ

り船路で五十里にある藪灘波嶋付近を進んでいた

ところ、逆風になってしまい、やむを得ず、七島

のうち三宅島に帆をおさめて戻り、四ツ半時頃（夏

は現在の午前十時〜十一時頃）、同島伊ヶ谷村に着

船し上陸しました。

（波の高い）荒磯のため、船を陸に引き揚げま

した。同二十日、やはり逆風のため同所に逗留し、

同廿一日、順風になりましたので、四ツ半過ぎに

乗船し、三宅島を出帆しました。時に二十二日の

四ツ時ころ（現在の午前十時頃）、八丈島の三ツ

根村字神湊という、岩礁の間に丸石で出来た浜が

十四、五間（二五〜二七ほど）ばかりあつたの

で、ここに船を着けました。それより陸路で一里

（約三・九km）余り行き、島の南の海辺にある大

賀（郷）会所に、九ツ時頃（現在の正午ころ）、

別条なく到着しました。はばかりながら、気持ち

も落ち着きましたのでご安心ください。

これより当島（八丈島）の測量ですが、天気次

第のところがあり、氣長に仕事を進めますので、

心配はありません。

帰りの船旅についても、（島から）陸地へ向か

う航海なので、どのような風でも氣遣わしさはな

いとのこと、船頭らは全員、安堵しています。

さて当島は風俗・言語など、（江戸とは）たい

へん異なっております。

右、（先生に）お見舞い申し上げたく、かくの

如くでございます。恐惶謹言。

五月二十三日

箱田左太夫拝

菅太仲先生

二白（追伸）、日を追って暑さが増しております。

（先生が）御安静に御壯健でございますよう、お

祈り申しております。以上。

【測量日記の記述】

『測量日記』（巻二十七）によると、文化十二年四月二十七日、測量隊は「伊豆国附島々並地方海辺街道」測量御用のため、江戸を出立し、東海道を無測量で三嶋駅を目指した。隊員は手付下役の永井甚左衛門・坂部八百次・門谷清次郎、門人の菅（箱）田左太夫・保木敬蔵、棹取の多田要吉、長持ち宰領の田中吉兵衛、永井下僕新助・坂部下僕万吉・門谷下僕源助に、箱田・保木下僕幸助など、上下十一人であった。

この第九次測量、長距離の渡海もあり、伊能忠敬は老齢（七〇歳）のため、周囲の勧めで参加しておらず、『測量日記』を記録したのは隊長の永井甚左衛門である。

四月晦日（三十日）三嶋宿到着。翌五月朔日は大雨で逗留し、同二日、測量開始。箱田左太夫書状には、同所三嶋大明神前より始めたところがあるが、実際は、まず「江川太郎左衛門代官所三嶋宿制札」から、下田街道を測量し、丑年（文化二年、第五次）の測量と重ねて、三島明神鳥居に繋ぎ、それより神前まで測量していた。そこから街道に戻り、鳥居左柱から天城通りの下田街道の測量を開始している。六日、天城峠を越え、八日、下田町に到着。これより八丈島渡海の風待ちのため、沿海と周辺小島を測量。

用意された船は、三宅島の雇い主新兵衛の船で、三百石積の観音丸、船頭定吉・楫取り長右衛門とある（出帆の時、水主とあわせて六人となる）。

十八日、前夜から北風（順風）となり、六ツ半頃出帆。乗船隊員は、坂部下僕など二人が江戸へ戻り、九人となっていた。船はまず藪灘波嶋（岩礁からなる無人島）を目指し、利島・新島・寺内

島・式根島・神津島・恩馳島・三宅島・三本竹島・御蔵島沖を経て終夜帆走するが、十九日未明、藪灘波嶋付近で逆風となり、三宅島へ引き返す。伊ヶ谷村前浜に着岸、湊がないため船を陸揚げし、同村に止宿。二十日、逗留し、同島を測量。

二十一日、順風となり出帆。しかし三倉島を左、藪灘波嶋を右に見て三十里計りの所で「黒瀬川」（黒潮）の急流に七、八里押し流されたが、これを取り越え、また順風により終夜帆走して三十里。翌二十二日は朝から大霧で、四ツ時（午前九時半前後か）過ぎに霧が晴れ、はるかに八丈島が見えたため五里ほど帆走して、合図の狼煙をあげ、またほら貝を吹いて島の人々に知らせ、迎への引き船を来させ、湊に入ったとある。上陸したのは三ツ根村湊宇神浦であったが、この浦には船掛はなく、険しい岩場が多いため、平場となった場所に船を陸揚げしている。中食後、徒歩で大賀郷陣屋へ行き、一同止宿した。

二十三日から二十五日までずっと雨天続きで、同所に滞留、測量が始まったのは二十六日から、終わったのは翌六月二十五日であった。

なお、八丈島を含む伊豆諸島測量については、渡邊一郎『幕府天文方 伊能測量隊まかり通る』（第八章）の記述を参照願いたい。

【箱田左太夫書状の内容と性格】

このように、八丈島上陸まで『測量日記』はその航海の困難ぶりを詳述しているが、箱田の書状では、当然ながら概略を述べるに留まり、『測量日記』以上の新たな情報は無い。八丈島測量後、測量隊は帰路にさらに困難な体験をするわけだが、上陸二日目に書かれた書状では、予想もされ

ず、帰路はもつと安全な航海ができるものと樂觀的な感想さえ述べている。

この書状、冒頭に島の織物上納の船に便乗して送るとあるが、茶山方に忠敬の書状とともに届いたのは、翌年の文化十三年五月十九日であり、八丈島から織物上納の船に便乗して、江戸経由で備後国に届けられたとしても、あまりに日時が懸かり過ぎている。次節で紹介する忠敬書状の正確な日付はわからないが、内容から文化十二年十二月十八日以後のものと推定され、これらの二通が同時に届けられた何らかの理由があると思われる。

また文末近くに「当嶋者、風俗・言語等余程異物ニ御座候、」とはあるものの、ここでの具体的な記述はない。茶山と実際に会う機会があったら、自分の経験談を詳しく語ることはできたと思うのだが。実際、茶山の江戸詰のとき、左太夫は九州測量における島々の話を語っていたと、茶山の日記に書かれている。隊員の門谷清次郎は第八次（九州第二次）測量のとき書き残した「薩隅見聞之覚書」の中で、桜島や屋久島などについての詳しい記録を残しているが（会誌97号、平田稔氏紹介文参照）、八丈島ではそうしたものを残さなかったのだろうか。気になるところではある。

結局、箱田左太夫の茶山へのこの書状は、内容的には恩師への見舞状の域を出ていない。

二、『史林』掲載「伊能忠敬書状」について

前述のように、富士川英郎『菅茶山』（下）第161節（文政十三年）では、茶山の日記にある、五月十九日、箱田左太夫書状とともに届いた伊能忠敬書状について、京都帝国大学文学部内史学研究会の研究誌『史林』第五巻第二号（大正九年四月

一日発行)に「雑纂」として掲載された、西田直二郎「茶山片影」の中に本文の一節が紹介された忠敬書状がそれに当たると推定した。その西田氏の忠敬書状に関する部分を画像(国立国会図書館デジタルコレクション)で掲載しておこう。

而して茶山に於ては、是等書状の中から先づ注意を惹くものに伊能忠敬がある。文人詞客の翰墨の多いことはさることであるが、この測量學者の綿密な筆致で書いた書牘が西備の茶山廉塾に來ることは一寸面白いものゝやうに思はれた。而して八月二十一日である書状の一節には、

然ば門人左太夫儀八丈嶋其外六嶋測量無滞相濟舊冬豆州下田港迄歸着ニ付御安心被下候段被仰下御深意忝奉謝候其後伊豆駿河相州之内所々相測當月廿三日一同無難ニ歸府仕候箱田父弟大悦之程察入候將國々測量之儀も右嶋々にて日本沿海ハ相濟候間當時より來年中には地圖皆濟と奉存候所關東諸城下並川々奥羽三越之内相殘候城下街道等有之ニ付此節右之測量御伺ニ相成候若被仰付候得ば當六月頃之出立來三四月歸府に可相成候忠老も當子七十二歳に相成候間地圖全備取急候 扱此之者貴命之通り御面會無覺東候御保愛御長壽新興地圖御一覽被下候様所祈候

とある。伊能勘解由忠敬の手紙として珍らしいと云ふのではないが、文中にもあるやうに忠老も當子七十二と云ふ老測量家が物語としては尊重すべ

き文言を有つてゐる。この書状の時は、忠敬七十二歳、文化十三年の子の年に當りて、其前年には伊豆七嶋の測量を終り、其年また測量の一隊は、箱根蘆の湖、富士裾野、荒川筋などの測量をなした時である。忠敬已にこの古稀の齡を超えて其の畢生事業の輿地圖の全備を急げる状をよく見る事が出来る。それと共に西備の茶山も、已に六十九歳、忠敬は茶山の類齡を憂ひて、保養と長壽を祈りて、新圖の完成を一覽せんことを希うてゐる。而して尙ほ來年の計劃として奥羽三越の測量を起さんとしてゐることがこれによつて窺はれるのであるが、併し忠敬は其翌々年文政元年を以て歿してゐる。其の喪は秘せられ、既定の大日本沿海輿地全圖及輿地實測録は歿後三年に幕府に上つてゐるけれども、其樂として居た所の新圖は遂に忠敬の生前茶山の前に展べることが出来なかつたのである。又文中に見えてゐる箱田父弟の大悦と云ふのは、忠敬の門人箱田真與の父弟を指せるものであることは明かであつて、箱田真與は、後の板本氏でかの板本武揚の父である。この真與は、左大夫と稱して、備後國安那郡箱田村から出た人であるから、箱田氏と茶山との郷貫の近いことや舊誼の狀を考へることが出来る、箱田真與が忠敬の測量に従ひ、九州地方から、こゝに見る八丈島の測量と始終其下にあつて事に従ひ、尙ほ忠敬の歿後全圖の完成まで事に與つてゐたことを思ふと茶山と忠敬とこの箱田氏との關係をこの書状によつて考へることが出来る。

西田氏によれば、広島県の池田奎三郎氏が茶山に關する書簡類數十通を所蔵していることを、友人の医学士池田龍一氏(奎三郎氏の子息か)より聞き、閲覧を願つたところ、(現物か、あるいは写真か)送られて來たとある。西田氏は茶山の交友關係を知る資料として、差出人13名の名を上げており、その中に近藤重蔵・伊能忠敬の名が見える。西田氏が書状本文を引用したのは、伊能忠敬・大槻玄幹・広瀬淡窓の三名のものであるが、残念ながら全文ではなく一節とあり、大槻玄幹書状を除き、日付も省略されている。

西田氏が「八月二十一日」付と説明して引用した忠敬書状(の一節)を、読み下して紹介する。

【読み下し】※(用語補充)

然らば門人(箱田)左太夫儀、八丈嶋そのほか(伊豆の)六嶋の測量滞りなく相濟み、旧冬豆州下田港まで歸着につき、御安心下され候段、御深意仰せ下され、かたじけなく謝し奉り候。その後、伊豆・駿河・相州の内所々を相測り、当月二十三日、一同無難に歸府仕り候。箱田父・弟大悦のほど察し入り候。將に國々測量の儀も、右嶋々にて日本沿海は相濟み候間、当時より來年中には地圖みな濟むと存じ奉り候ところ、關東諸城下並びに川々、奥羽・三越内に相残り候城下・街道等これ有るにつき、この節、右の測量御伺いに相成り候、もし仰せ付けられ候えば、當六月頃の出立、來る三、四月歸府に相成るべく候。忠老も當子(ねの年)七十二歳に相成り候間、地圖の全備に取り急ぎ候。さてこの者、貴命の通り御面會おぼつかなく候。御保愛・御長壽と、新興地圖御一覽下され候様、祈るところに候。

【書状の日付や新たな測量計画について】

「然ば」で始まる文面の前には、おそらく時候の挨拶や互いの安否にかかる記述があったと思われるので、この一節は用件の本題を記述していると考えてよさそうである。

ここではまず、箱田左太夫の加わった測量隊が伊豆諸島測量のあと、伊豆から駿河、相模（実際は武蔵北部まで）と測量し「当月二十三日」江戸に帰ったとある。しかし最後の『測量日記』（巻二十八）は、江戸帰着の四月十二日で終わり、また『忠敬先生日記』（江戸日記）でも、四月十三日、永井甚左衛門・門谷清次郎が着府の挨拶に来た、とあるので、「当月」とは四月と解すべきであるが、「二十三日」とあるのは西田氏の読み間違いか、何かの勘違いではないだろうか。『忠敬先生日記』（江戸日記）によると、「（四月）二十日、今日より地図御用始、永井・坂部・門谷来る」とあるが、二十三日の記述はない。

また西田氏が書状の日付とする「八月二十一日」について、富士川英郎氏が批判を加え、書状の日付は「八月二十一日」ではなく、四月「二十三日」から晦日までの間に認められ、五月十九日に茶山のもとに届けられたのではないかとしている。妥当な考察と思われる。

それよりも、「関東諸城下並びに川々、奥羽・三越内に相残り候城下・街道等これ有るにつき、この節、右の測量御伺いに相成り候、」との記述は、関東の諸城下・諸河川と奥羽（陸奥・出羽）・三越（越前・越中・越後、加賀も含むか？）の城下・街道について、新たな測量計画を幕府に申請していることを意味し、たいへん興味深い。許可が下りたら「当六月頃の出立、来る三、四月帰府

に相成るべく候」と出張期間も想定している。

これについては、本誌前号（106号）で玉造功氏「江戸府内第一次測量補論」が紹介している、文化十二年十二月十八日付け娘妙薫あての「伊能忠敬書状」（国宝・書状類一一一）に「関東城下・川々・沼々等測量之儀」を上申したいとの記述、また同十三年七月二十一日付けで同じく妙薫あての「伊能忠敬書状」（国宝・書状類七五）に「関東・北国測量之儀、六ヶ敷様子」とあつて現状では難しいとの記述と符合している。

これらの書状と内容を照合すると、『史林』掲載の菅茶山あて忠敬書状は、幕府に関東・北国測量の申請をすませ、回答を待っている時期、富士川氏が推測された時期に書かれたと考えるべきであろう。

忠敬の「江戸日記」に、文化十三年「七月二十一日、（中略）今日江戸測量被仰付候」とあつて、同日付けの妙薫あて書状に「関東・北国測量之儀」が現状では難しいとあるのは、この日、江戸府内（第二次）測量を命ぜられたため、これに傾注しなければならぬ事情が生じたからである。

ちなみに、江戸府内第二次測量は、文化十三年閏八月八日に始まり、同年十月二十三日に完了した。その間「江戸日記」にはその日の測量の有無が記され、忠敬の出勤もうかがえる。御府内地図の完成は翌十四年八月十九日で、その日に上納されている。

「江戸日記」は文化十四年十二月二十九日で終わり、翌十五年四月十三日、忠敬は没した。望んでいた伊能測量隊による「関東・北国測量」の機会は永久に失われてしまった。

ところで、福山城博物館の図録『箱田良助と榎本武揚』掲載の箱田良助書状の宛所を見ると、「大江村池田喜惣太・御同能夫太・御同彦四郎」「池田楠五郎」等とある。また岡山県井原市大江町の郷土史『大江誌』に、大江村増屋池田家と備後箱田村庄屋細川家は深い姻戚関係があり、彦四郎（良助の実弟）は細川家から婿養子として池田家に入った、とある。西田直二郎氏が忠敬書状の所蔵者とした「広島県の池田奎三郎氏」と、大江村の池田氏（の子孫）との関係は不明だが、大江町池田家所蔵の箱田良助関係史料も含め、いずれ確認したいと思っている。

【参考文献】

- ・千葉県史編纂審議会編『伊能忠敬書状 千葉県史料 近世篇文化史料一』千葉県、一九七三年
- ・大塚宰平『郷土史談 大江誌』大江史談会、一九八七年
- ・富士川英郎『菅茶山』（上・下）福武書店、一九九〇年（一九八四～八九年初出）
- ・『伊能忠敬の江戸日記』、『江戸の伊能忠敬―伊能忠敬銅像建立報告書―』伊能忠敬研究会、二〇〇二年
- ・『伊能忠敬の内弟子筆頭 箱田良助と榎本武揚』福山城博物館、二〇〇九年
- ・DVD版『国宝伊能忠敬測量日記 原文』伊能忠敬と伊能図の大事典をつくる会、二〇一一年
- ・神辺町菅波家編刊『菅茶山と廉塾』二〇一八年
- ・菅茶山記念館編刊『神辺の文化人』

伊能忠敬記念館蔵
高橋景保自筆書簡について(2)

加藤一郎

(四) A—一七書簡

是れは未だ下つて居る
 候に、暑中御尋書並びに中元御祝書三度の御手状相達し、披
 見。是よりは都度々々に御酬も進ぜず候。就中中元御祝義
 として方金二百疋御惠贈、忝き次第に候。されば用事有る
 ゆへ、俄二具ル酬札そなう二もなと敷、御内推も憚られ候。爰に
 已むを得ざる義出来候ま、御無心申し掛け候。
 先づ去る十八日暴風雨御地如何。御破損の様承り度く候。
 当地大風一同の事にて候。右の日寺島村別荘御聞き及びの
 通り、元来大破の家作の処、右大風にて崩れ候ひて、修覆
 も叶ひ難く候旨職人申すま、何も急に新築致し度き旨立
 卿も申し候処、右抱屋敷某手元金にて万事賄ひ来り候事、
 且つ勝手は伝四郎つたしやう任せ置き候処窮迫の様子、其の中へ右の
 義申し出で難く候ま、是非某手元一分にて取り建て候事
 にて候。固より手元僅かの分給故、如何とも致し方これ無
 く、さればとて今更人に譲り候も遺憾。元来妙薫尼御助力
 にて手に入れ候屋敷の事に候間、僅か一兩年にて他人え渡
 し候も残念にて候。何の方金子恩借に願ひ度く候。尤も愈
 何程と申す事は、積出来致さず候へども、来月節前迄に先
 づ十五金御貸し下さるべく候。
 右の通り認め候処え職人積書持参の処、すべて三十両掛り
 候段申し出で候。然れば立卿兩人にて候間、十五両にて宜
 しく候。尤も少々相増し候所は其の節後々申し入るべく候。
 右の段御勘考の上、加納治兵衛かのちべゑえも御語り、御酬早々待ち
 入り候。尤も返納方は月々少々二て進じ候様致し度く候。

此の節御出府も候様と当夏御物語もこれ有り候間、御已前と存じ、急ぎ此の段御願ひ申し入れ候。委曲は御出府の上万端申し述べべく候。

八月廿五日

草々不乙

景保

い能三郎右衛門様

- ※1 「測合」とは、複数地点における天体観測の数値を照合すること。この「測合記」は浅草暦局の観測と比較するための、佐原での観測記録。
- ※2 「方金」とは、方形の金貨の意で、一分金、二分金、一朱金、二朱金をいう。「二百疋」は二分。
- ※3 「俄ニ」以下一応右の様に読んでみたもののどうであろうか。〈紀要〉は「令御配札候も何と歎」。
- ※4 墨田川の東岸、現墨田区向島五丁目から東向島三丁目まであたり。当時は別荘が多くあった。
- ※5 杉田立卿（一七八六〜一八四五）。杉田玄白の子。蘭方医。蘭学者。小浜藩医。一八二二（文政五）年非常勤で暦局に入り、蛮書和解御用を勤めた。
- ※6 世田谷伊能家に、辻伝四郎より伊能三郎右衛門宛の書簡（差出年次不明）が所蔵されている。内容は無尽の掛金払込みにかゝるもの。この辻伝四郎であろう。
- ※7 忠敬の長女イネ（二七六三〜一八二二）。一八一〇（文化七）年夫盛右衛門没、それにより仏門に入り、妙薫と称す。
- ※8 加納屋治兵衛。香取郡津宮村在住。伊能家の帳元締。
- ※9 「少々にて」と読み、「も」字の脱と考えたがいかな。〈紀要〉は「少々宛」

大意

測合記・暑中御見舞・中元御挨拶と御祝儀をいたゞきながら御返書を差し上げなかつたのに、本状を差し上げるのは、自分の方で用事ができたものだから、あわてて返書を整えたのだから、現金なことだと勘繰られはしまいかと気がひけます。止むを得ないことが生じたので御無心をお願いする次第です。

去る一八日の暴風雨で、寺島村の別荘が崩壊してしまい、職人は修覆不能と申しています。共有者の立卿もこの際新築しようと申すし、そうしたいのですが、問題は資金です。この別荘については今まで万事私の手元金で賄ってきたし、今度も苦しい勝手から出してくれとは申し兼ねるので、是非手元金で建てたいと思います。と申しても私の手元に入る額は僅かで、どうにもなりません。だからといって、妙薫尼の御助力でせつかく手に入れた屋敷を僅か一兩年で手離すのは残念です。是非金子を拝借致したく存じます。職人持参の見積では合計三〇両、立卿と割勘ですので、一五両で結構です。但し、少しの増額分はその折申し入れるかも知れません。

以上御考え合わせの上、加納屋治兵衛とも御相談なさり、御返事を下さい。御返済は、月々少々ずつでも差し上げたいと存じます。この節御出府の旨、当夏うかゞっていたので、それ以前と存じ、急いで以上の件申し入れました。

差出年次と宛名

日付の「八月廿五日」に、〈紀要〉は「年次を推定するに足るものがない」と註している。だが状中の「去る十八日の暴風」が手掛りになる。八月一日に暴風雨が襲った年をつきとめればよいからである。

荒川秀俊編『日本高潮史料』によると、一八二二（文政六）年八月一七日夜から一八日早暁にかけて東日本一帯を暴風雨が襲い、海岸地帯には高潮が発生した。これは余程ひどいものだったらしく、『続徳川実紀』『甲子夜話』など多くの文献に記されている。

宛名「三郎右衛門」が伊能家累代の当主の通称であることはすでに述べた。本状の差出年次が一八二三年ならば、伊能家当主は、忠敬の孫忠誨である。彼の日記（通称『忠誨日記』）が記念館に所蔵されているが、その一八二三年八月二九日の条に

「高橋侯書状到来。右に付き治兵衛をよぶ」と記されている。これは、本状中の「右の段御勘考の上、加納治兵衛えも御語り、御酬早々待ち入り候」と符合し、「高橋侯書状」とは、まさしく本状である。

以上の通り、日付は一八二二（文政六）年八月二五日であり、宛名は、三郎右衛門忠誨である。〈紀要〉が宛名三郎右衛門に「忠敬の長子」と註したのは誤りである。

忠誨のこれまで

一八〇六（文化三）年伊能景敬の長男として生まれた。母は小川氏りて。幼名三治郎（忠敬の幼名を享ける）。八才の時父と死別。これより先忠敬の親友久保木清淵につき、習字・素読の稽古を始めたが、出来が良く、祖父の期待は大きかった。

全国測量を完了し、亀島町宅に身を落ち着けるようになった忠敬は、三治郎を出府せしめ、膝下に置き、習字・素読を学ばせ、やがて佐藤一斉門に入れた。一八一八（文政元）年祖父・母が相ついで死去するや、伯母妙薫が親代りとなって彼の世話に当る様になり、足立左内・重太郎親子より暦算も学ばせ始めた。

一八二一年一六才で元服、三郎右衛門忠誨を名のる。輿地全図が完成、上呈されると、祖父の功績により五人扶持を給せられ、帯刀を許された。

翌一八二二年一月、見習として暦局に入り、本格的に観測術を修めることになった。兼ねて、江戸にこのまま居て祖父の業を継ぐか、または、佐原にもどり、伊能家当主としてその経営に当り、且つ村政に関わるかの問題に逢着していた。諸般の事情から、結局在所にもどり、家業と村政に携わるかたわら、年に一兩度出府して暦局に出勤し、在所においても設備を設け、観測御用をつとめることにした。八月伯母死去。一月亀島町宅を畳み、佐原に帰住した。

一八二三年、当主として初めて佐原の伊能本家で新年を迎

えた忠誨は、松がとれるや早々に出府、四月中旬まで暦局に勤めて在所に帰り、同二六日、常州高浜村笹目八郎兵衛の女くにを妻に迎えた。

在府時の忠誨から、九月再出府の予定であることを聞いていた景保は、出府前に申し入れをした方がよいと考え、在所の忠誨へ本状を差し出したのであった。

寺島村別荘

『忠誨日記』一八二二（文政五）年閏正月五日の条に、

「予出勤。四ツ半時過ぎ伯母船にて高橋侯へ行く。其の船に高橋御夫妻及び東儀、伯母等乗り御抱屋敷へ行く」

とあり、同一一日の条に、

「高橋侯御抱屋敷へ上り候シヨクタイを買ふ」とある。

本状中に「僅か一兩年にて他人え渡し候も……」とあるから、一八二三年八月の時点より一兩年以前に、この別荘が妙薫の助力によって入手したことになるので、別荘用に贈呈する燭台を買ったこの頃、入手したのかも知れない。

忠敬が百姓隠居の身分から幕臣に取り立てられ、全国測量という偉業を達成しえたのは、ひとえに高橋至時の指導と引き立てがあったからであった。忠敬は終生これを肝に銘じ、物心にわたり高橋家に尽くした。忠敬の没後、妙薫は父の意思を継いで高橋家に接しただけでなく、忠誨の将来を景保に託そうとする意も加わり、一層尽くした。別荘入手に応援したのもそのあらわれであろう。

景保もこれに応え、忠敬の代りとなって、忠誨の修業や勤務に心を配り、身の振り方など重要な問題には、相談にのつた。この様な恩人の要請には、忠誨としても応諾せざるを得なかつたであろう。『忠誨日記』の一八二五（文政八）年三月一日の条に、

「九ツ時高橋侯・同小太郎・□□郎・足立・予・今泉同道下屋敷へ行く。囲碁・酒飯あり」

とある。寺島村別荘は、忠誨の貸金により再建できたことがうかがえる。

誤植の訂正

寺島村別荘に関して『忠誨日記』が引用されているが、日付けについて誤植と思われるので訂正したい。

「閏正月五日の条」は誤りで、「閏正月八日の条」が正しい。

(五) A—六書簡

中元御祝書相達し、披見。仰せの如く其の頃残炎退き兼ね候処、愈御清安の由幸甚。当地拙家一同無異、御休意給はるべく候。中元の御嘉儀として、相変らず魚価二方金御恵投、辱き次第にて候。御酬申し述べ度く。

中元御祝書相達し、披見。仰せの如く其の頃残炎退き兼ね候処、愈御清安の由幸甚。当地拙家一同無異、御休意給はるべく候。中元の御嘉儀として、相変らず魚価二方金御恵投、辱き次第にて候。御酬申し述べ度く。

草々不乙

八月望日

伊能三郎右衛門様

尚々不正の時候に候。折角御自愛專一に候。測量ハ如何。御出精有り度く候。先頃は胡麻油態々御差し送り、御厄介忝く候。右の義林右衛門^{※2}え談じ置き候。以上

※1 「魚価」は、肴を贈るかわりとしての祝儀や謝礼の金

錢の意の「さかなだい(肴代)」の漢語表現。「二方金」は、方金(4)※2)二枚。

すなわち金二分。

※2 下河辺林右衛門。前名政五郎。二丸火之番。景保手付として暦局へ出役。

大意

中元の御祝詞届き、拝見。相変らず中元の御祝儀として金二分をお贈り下され、ありがとうございます。取急ぎ御礼の詞まで。

なお、測量御用の方はいかが。どうぞ精を出して下さい。わざわざゴマ油を発送して下さい、お手数をかけました。この件林右衛門へ話して置きました。

差出年次と宛名

日付の「八月望日」に、〈紀要〉は「年次を推定すべきものがない」と註している。だが端書末尾の「林右衛門え談じ置き候」が手掛りになる。下河辺が政五郎から林右衛門に改名した時期がわかれば、出状の年次がしぼられるからである。記念館に次の二通の書簡が所蔵されている。

(A) 差出人下河辺政五郎。宛名伊能三郎右衛門。日付一二月朔日。

(B) 差出人下河辺林右衛門。宛名伊能三郎右衛門。日付五月一六日。

(A) 状の内容は、控図(上呈本の副本)の表装が出来したの

で、請取人を出府せしめたき旨の要請である。これは『忠誨日記』一八二三（文政六）年二月五日の「江戸より地図出来の趣申し来る」、及び同一八日の「今昼加納屋治兵衛江戸出立。尤も……地図請取り」と合致し、(A)状の日付が文政六年二月五日であることがわかる。

(B)状の内容は、地図に街道筋を入れるので、突手本（針穴のある原稿図）を送ってもらいたき旨の依頼である。これは、『忠誨日記』一八二六（文政九）年六月八日の「日本一分五厘図突手本、下河辺林右衛門へ飛脚に持たせ遣はす」と合致し、(B)状の日付は文政九年五月一六日であることがわかる。

以上(A)・(B)両状の日付を明かにしたことにより、林右衛門改名は文政六年一二月以後、同九年五月以前であることがわかった。となると、本状の差出しは、文政七年八月一五日以後であり、文政六年八月二五日付A―一七書簡より後、即ち一八通中最後となる。

本状の差出しが文政七年八月一五日以後であることは明らかになったが、更に差出年次を特定できないだろうか。忠誨は一八二七（文政一〇）年二月に死亡したので、差出年次は文政七・八・九年のいずれかになる。その内八年は、忠誨八月一五日出府、一七日景保を訪ねているので、可能性は少ない。七年か九年かとなると、確証は今の処無いが、九年のような気がする。

胡麻油と林右衛門

本状は中元祝詞に対する返書である。伊能家より景保へ、

中元祝儀として金二分贈るのが恒例であったことがわかる。因みに、葦山代官江川太郎左衛門英毅は、文通による推歩教授の師忠敬に、時下見舞として方金三塊すなわち金三分を贈っている（忠敬宛江川英毅書簡）。

端書末尾に、胡麻油のことにつき林右衛門へ話して置いたとあるが、どういうことだろうか。下河辺林右衛門は、暦局内の地図仕立役所の主任の地位にあり、その入用についても扱っていた様である。この胡麻油は高橋家の勝手用ではなく役所用で、その支払いに関して話したのかも知れない。

(六) 記念館蔵景保自筆書簡一覧

以上五通につき、解説の中で差出年次について考え、〈紀要〉の推定し得なかつたものを推定し、その誤った推定を正した。その他の一三通の差出年次については、〈紀要〉の推定に誤りはない。ここで一八通を編年的に配列した一覧表を示そうと思う。

一覧表の右側に付記した番号は、各書状に該当する「国宝伊能忠敬関係資料」の書状類番号である。（編集子）

	巻物番号	日付	宛名	主な内容	国宝書状類
1	A-4	1807(文化4)年1月21日	忠敬	絵図物仕立のため門弟門谷清次郎と絵図盤貸与要請。	251
2	A-15	1811(文化8)年12月22日	〃	深川留守宅売却の件掛合に対しての対応報告。	259
3	A-2	〃	〃	測量初参加の今泉又兵衛への配慮要請。	249
4	B-11	1812(文化9)年1月21日	〃	馬場佐十郎の幕臣取立。馬場と足立左内の松前派遣案。	272
5	A-3	〃 年3月19日	〃	大津へ再送付の一包の件。青山牛大夫への貸金の件。不取締なき様留意要請。	250
6	B-8	〃 年12月13日	〃	木星・小星の食の推歩ミス連絡。長崎地方で隊員行動に留意。関東大震災。	269
7	A-7	1813(文化10)年1月30日	〃	木星・小星の食観測要請。景保の淋疾。足立・馬場松前へ出立。流行を題する狂詩。	254
8	B-2	〃 年3月26日	〃	暦局の火災。	263
9	B-3	〃 年5月4日	〃	蛮書和解御用三名増員の沙汰。坂部貞兵衛母死去。長崎での蘭書購入依頼。	264
10	B-5	〃 年5月27日	〃	長崎警備の鍋島・黒田両家への達しの件。火災後の役所の状況。	266
11	A-9	〃 年8月17日	〃	危篤の貞兵衛を案ずる。景敬の大病。役宅建築開始。松前のロシア人送還。	256
12	A-10	〃 年9月30日	〃	貞兵衛の死去にあたっての苦労をねぎらう。役宅11月落成見込。足立・馬場11月帰府予定。米と銭の相場。	257
13	B-4	〃 年閏11月25日	〃	巡路変更許可を知らせる状福知山へ差出す。貞兵衛の従者を帰府せしめる件。馬場為八郎よりの書状につき問い合わせ。	265
14	B-7	1814(文化11)年1月26日	〃	書状不達の事情説明。足立・馬場無事帰府。	268
15	B-6	〃 年2月26日	〃	忠敬の古希を迎えしをたたえる。景保書物奉行天文方兼帯となる。在府中のオランダ人訪問。	267
16	A-8	〃 年4月11日	〃	木津より奈良へ繋測せし機転をたたえる。着府の際の手續助言。馬場佐十郎小普請組仰付けらる。	255
17	A-17	1823(文政6)年8月25日	忠誨	寺島村別荘建直しのため貸金要請。	261
18	A-6	1826(文政9)?年8月15日	〃	中元祝儀への礼状。	253

むすび

私は、景保書簡を、史料として、また読み物として秀れた文献だと考える。

その理由の第一は、私信の多くは当事者以外には記述内容がわからないのに対し、これは関連文献が豊富で、それらを参照することにより、記述内容を明かにし得る場合が多い。

第二は、記述が米俣・俣約令・日露問題など歴史の大状況にかゝったり、間宮林蔵・馬場佐十郎・大槻玄沢など歴史的人物が登場したりして、歴史に直に接する思いがする。

第三は、開放的な人柄の故か、忠敬に心を許しているせい、その秀れた筆力も与って、文中景保の「人間」が躍如としていて、彼の心情に触れることができる。

しかし、本稿は原文の読み下しと解説だけでなく、差出年次追究もからめて二兎を追ったため、対象の選択が右の秀れている点を伝えるには適当でなかったかも知れない。とはいもの、曲りなりにも景保書簡の一端を紹介し得たし、一八通の編年的配列も達成できた。

上原・小野両氏の研究にしばしば批判を加えたが、本稿は所詮その学恩に与ったからこそ成ったのである。A―四書簡を除き一七通は、小島一仁先生御指導の古文書学習会で輪読したことがあり、それが景保書簡に手を染める契機となった。伊能忠敬記念館におかれては、本稿発表にあたりマイクロ写真の掲載を快く許可して下さいました。筆を擱くにあたり、以上の関係の皆様方に感謝の意を表します。

〔叙述中特記しなかった参照史料〕

『通航一覧』

『高橋御用日記』

平山郡蔵宛間重富書簡

〔参考文献〕

大谷亮吉『伊能忠敬』

上原 久『高橋景保の研究』

片桐一男『和蘭陀通詞の研究』

郡山良光『幕末日露関係史研究』

佐原古文書学習会と加藤一郎氏

香取市 及川 敏男

小・中・高校教員を中心に結成された香取歴史教育者協議会は、例会で授業実践や地域の歴史研究を行ってきた。1974年には第2例会として古文書学習を開始した。小島一仁氏が講師となり、伊能家の文書を取り上げ、解説をしてみた。やがて参加者は一般市民が多くなり「市民の古文書学習会」的な場として継続してきた。

毎年の香取歴史教育者協議会総会では小島氏から佐原古文書学習会の様子や充実ぶり、生き生きと学習する姿が報告された。中でも参加会員の一人として、国語、国文学を専攻した加藤一郎氏が加わったことが大変頼もしいと強調されていた。高橋景保書状を取り上げた学習でそのようなお話をされていた。そこで『香取民衆史9』発行の際、有力な佐原古文書学習会会員である加藤一郎氏に強く勧めてこの論考を発表していただいた。

小島一仁氏が2008年5月に逝去され、同7月に「小島先生を偲ぶ会」が開催された。香取歴史教育者協議会、佐原古文書学習会の会員ら20名が参加し、ご遺族の意向と参加者の強い希望で佐原古文書学習会を続けることが決まり、学習会の運営体制と共に講師として学習を牽引する役を加藤一郎氏が引き受けてくださり、学習会を存続させることができ、今日に至っている。昨年は佐原古文書学習会が始まって50年を迎えることになり、お祝いの行事も行った。

高橋景保の書状について補足

編集子

故加藤一郎氏は伊能忠敬記念館所蔵の高橋景保名義の書簡のうち自筆と判断したものの18通を検討の対象とし、自筆書簡一覧(27ページ)を作成した。前号で述べているように、その18通は、文化財保護委員会(現文化庁)が巻物として表装した『高橋景保書簡』中の10通と、1967年に巻物として表装した『高橋景保自筆書簡』中の8通である。

伊能忠敬記念館がHPで公開している国宝伊能忠敬関係資料の『書状類の目録』を検討すると、高橋景保の書状は次の5通を加えて全部で23通が国宝に指定されている。そこで、下役などが代筆したと判断された残りの5通についても、加藤一郎氏の自筆書簡一覧にならって編年的に配列してみた。

○書状類 番号262 「高橋作左衛門書状」

・文化7年9月16日付で伊能忠敬と坂部貞兵衛に宛てた書状。

・文化7年7月25日付の鹿児島県南さつま市の片浦村発書状への返書。

・種子島、屋久島が渡海に適した季節まで肥後路を廻り、来春に屋久島、種子島測量に戻る計画を了解した。堀田正敦も「重ねて差遣わすのも手重、気候見合いで見置くよう」との仰せ。他の島々は渡海せずに遠測で良い

○書状類 番号252 「高橋作左衛門書状」

・文化7年12月11日付で伊能忠敬と坂部貞兵衛に宛てた書状。

・文化7年11月15日付で熊本県の八代から発出された書状への返書。

・若年寄堀田撰津守に伺ったところ、屋久島、種子島測量を延期し、一旦帰府することが認められた。薩州役人からの問合書面については、これを踏まえて早々に返答するように。

○書状類 番号260 「高橋作左衛門書状」

・文化10年8月19日付で伊能忠敬に宛てた書状。
・文化10年7月16日付の長崎県五島列島の福江発書状への返書。

・坂部貞兵衛の病死は残念至極。福江へ埋葬する件を承知。病死届は一両日中に提出する。坂部の召仕2名の帰府について。

○書状類 番号258 「高橋作左衛門書状」

・文化10年11月15日付で伊能忠敬に宛てた書状。
・文化10年10月2日付の福岡県の博多発の書状と、10月12日付の小倉発書状への返書。

・第8次(第2次九州)測量の帰路の中国、近畿中部地方の測量ルートを了解した。京都町奉行へも通知した。坂部貞兵衛の召仕2名の帰府について。焼失してしまった高橋景保の役宅が再建され、引移った。

○書状類 番号273 「高橋作左衛門書状」

・文政9年4月21日付で伊能忠敬に宛てた書状。
・文政9年4月18日佐原発の伊能忠敬書状への返書。

・書状拝見、15日の月食の件承知。届書は役所へ差出した。依頼した水油が到着したので代金を連絡されたし。

地球の大きさを測った男たち

18～19世紀の

ヨーロッパと日本における子午線測量

吉田正人

はじめに

伊能忠敬の地図測量の当初の目的が、子午線1度の距離を測定することであったことは、伝記にも書かれよく知られている(たとえば小島(1998))。第2次測量を終えて、伊能忠敬が出した、「子午線1度の距離は28・2里」という結論に対して、天文学の師の高橋至時はすぐには納得しなかつたが、オランダ語に翻訳された「ララント暦書」¹に書かれていた子午線1度の距離と伊能忠敬の観測による子午線1度の距離がほぼ一致していたことから、師弟で喜び合ったと書かれている。しかし、読者の関心はそこで終わってしまい、「ララント暦書」に書かれている子午線1度の距離は、誰がいつどのような方法で測定したものなのか、その値は現在の天文学的知識からして正しいのかという疑問を持つ人は少ない。

本稿では、18世紀のフランスにおける子午線測量、19世紀の北欧、東欧における子午線測量に焦点をあて、19世紀初頭の伊能忠敬の子午線測量との比較検討を行い、伊能忠敬の地図測量のもう一つの側面である、子午線1度の測量の意義について検討した。

ヨーロッパの子午線測量技術は、たしかに日本に比べ格段に進んでいたものの、伊能忠敬の子午線測量(1800-1816)は、フランスのメシヤン

(Pierre-François Mechain) とドゥランブル(Jean-Baptiste Joseph Delambre)によるダンケルクからバルセロナまでの子午線測量(1792-1798)と、エストニアのシュトルーヴェ(Friedrich Georg Wilhelm von Struve)によるノルウェーから黒海にいたる子午線測量(1816-1855)の中間の時期に位置し、地球の正確な大きさを知る重要なステップの一つとして位置づけられるものであることがわかった(表1)。

18世紀のフランスにおける子午線測量

フランスにおいては、すでに17世紀にフランス科学アカデミーが設立され、設立者であるコルベール(Jean-Baptiste Colbert)が三角測量によって地図を作成する方法を提唱した。

1669年にはピカール神父(L'abbéPicard)が、パリ郊外のマルヴォアージュ(Malvoisine: 北緯48°40')とアミアン(Amiens: 北緯49°50')の間で子午線測量を行った(ちょうど子午線1°の緯度差)。この事業を引き継いだカッシニ(Cassini)父子は、1700年から子午線測量を開始し、1718年にフランス北部のダンケルク(Dunkerque: 北緯51°02')からフランス南部のペルピニヤン(Perpignan: 北緯42°41')までの測量を完了した。パリを通過するこの子午線はパリ子午線(通称:カッシニ子午線)と呼ばれ、1884年に英国のグリニッジを通る子午線が本初子午線とされるまで(フランスでは1911年まで)、パリ子午線が本初子午線とされた。カッシニの測量にもとづくフランス地図は、非常に正確なものであり、地図を作成するための子午線測量であれば問題のないレベルに達していた(図1)。

フランスでは、1789年のバスチーユ監獄襲撃を機にフランス革命が始まったが、1791年までは立憲王政という形が保たれていた。そのさなか、1791年にフランス科学アカデミーは、フランス北部のダンケルクからスペインのバルセロナまでの子午線測量の実施を決定した。この子午線測量は、地球の大きさを基準にして、赤道から北極までの距離の1000万分の1を1メートルと定義し、世界中で使われている度量衡を統一するという意図を持ったものであった。そのため、カッシニ子午線の距離をさらに上回る、ダンケルク(北緯51°02')からバルセロナ(北緯42°21')まで、緯度差1°。近い子午線測量が計画されたのであった。

この仕事は、天文学を家業とするカッシニ(Jean-Dominique de Cassini)が引き受けてしかるべきであったが、フランス革命中でありさまざまな困難が予想されること、5人の幼い子どもがいることを理由にパリにおける後方支援にまわり、実際の測量は、メシヤンとドゥランブルの2人が、それぞれパリの南北の測量を担当することになった。

メシヤンは、1744年フランス北部のラオンに生まれた。数学と物理学に才能を発揮したが、

1 “Astronomie, par M. De La Lande.” がフランス語の原書名であり、直訳すれば「ラ・ランド著・天文学」である。高橋至時は「ララント暦書」と訳したが、ララントと発音するにはLa LandeではなくLa Landeと綴らなくてはならない。オランダ語訳を通じて日本に紹介されたため生じた誤解と思われる。本稿では、ララントで統一した。

表1. 18～19世紀のフランス、日本、北欧・東欧における子午線測量の歴史年表

	世界の情勢	フランス	日本	北欧・東欧
1718		カッシニ父子による測量		
1732		ラランド 生		
1744		メシャン 生		
1745			伊能忠敬生	
1749		ドゥランブル 生		
1771		ラランド “Astronomie par M. de La Lande” 刊行		
1789	フランス革命開始			
1791	立憲王政	科学アカデミー子午線測量決定		
1792	王政廃止、共和政移行	メシャン、ドゥランブル測量開始		
1793	ルイ16世処刑	メシャン、事故に遭遇		シュトルーヴェ生
1794	ロベスピエール処刑	メシャン、ジェノバに避難		
1795	総裁政府	十進法・メートル法採択	伊能忠敬、江戸に移り高橋至時に師事	
1798		メシャン、ドゥランブル、パリへ帰還		
1799	ナポレオン政権掌握	メートル原器製作		
1800			第1次測量（北海道）	
1801			第2次測量、子午線1°を28.2里と算出	
1802			第3次測量（東日本）	
1803		メシャン、バレアレス諸島の測量に出発	第4次測量（中部）、高橋至時「ラランデ暦書管見」を著す	
1804	ナポレオン第一帝政	メシャン、黄熱病で病没	東日本図幕府に上呈、高橋至時 病没	
1805			第5次測量（西日本：紀伊半島～瀬戸内海～琵琶湖）	
1806		ドゥランブル, "Base du système métrique décimal ou Mesure de l'arc du Méridien" 刊行		
1807		ラランド 没	畿内・中国図完成	
1808			第6次測量（四国）	
1809			第7次測量（九州）	
1811			第8次測量（九州）	
1814	ナポレオン退位、王政復古			
1815			第9次測量（伊豆）	
1816			第10次測量（江戸）	シュトルーヴェ測量開始
1818			伊能忠敬 病没	
1821			大日本沿海輿地全図完成	
1822		ドゥランブル 没		
1855				シュトルーヴェ測量完了
1864				シュトルーヴェ没

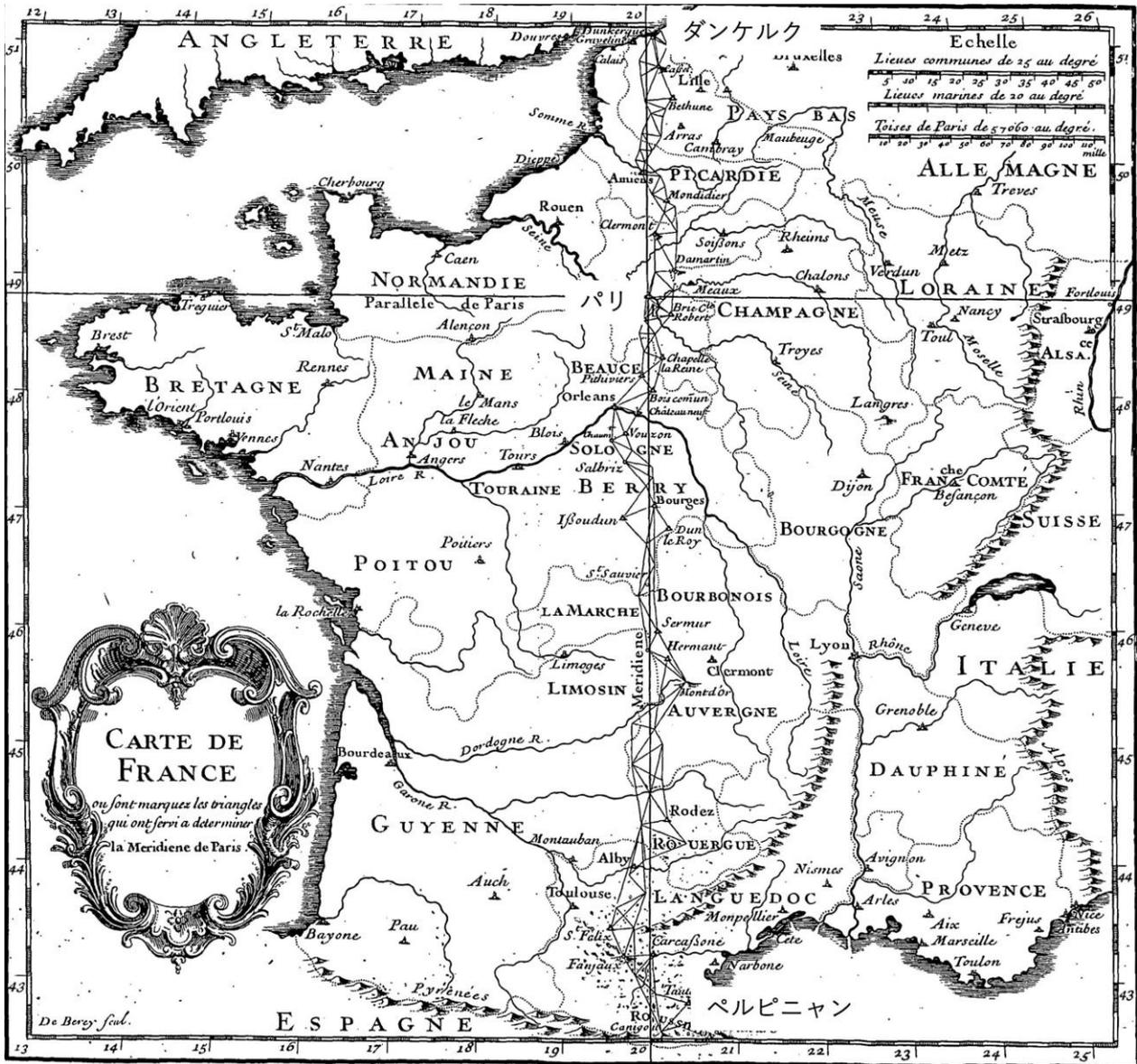


図1. Cassiniによる子午線測量に基づくパリ子午線とフランス地図
(伊能忠敬の大日本沿海輿地全図が完成する100年以上前の1718年に三角測量に基づく地図が作られていた)

資金不足のため学業を諦めざるを得なかった。しかし天文学における彼の才能は、天文学者のラランドの目にとまり、助手として雇われた。ドゥランブルは、1749年パリ北部のアミアンに生まれた。1774年にパリに移り、財務長官ダッシーの息子の家庭教師となり、ダッシーから天文学者ラランドの授業を受けることを許された。つまり、メシヤンとドゥランブルは、ラランドの兄弟子、弟弟子という関係にあったのである。また、伊能忠敬は1745年生まれなので、メシヤン、ドゥランブルとほぼ同世代ということになる。

1792年6月メシヤンとドゥランブルは、パリを出発し南北に分かれて測量を開始した。北に向かったドゥランブルは、フランス革命の混乱をまともに受けることになる。ドゥランブルは、ルイ16世の発行したパスポートを持って測量に出発したが、エソンヌ、サン・ドゥニなど各地で、熱狂的な群衆に囲まれ測量器具を取り上げられたり、監禁されたりした。1792年9月には、国民議会がドゥランブルとメシヤンの測量は、フランス共和国の任務であり、彼らの任務を支援することを求める法令を採択し、ようやく測量を継続することができた。

南に向かったメシヤンは、カッシニ父子が測量した最南端であるペルピニャンを通過し、スペインのバルセロナに入り、スペイン政府が派遣したホセ・ゴンザレス (Jose Gonzales) 中尉が率いる科学者チームと合流して測量を開始した。しかし、フランス革命が王政を廃止するに至り、共和政に移行したフランスといまなお王政を維持する隣国との間に軋轢が生まれ、フランスとスペイン国境のピレネー山脈は、メシヤンが測量を行うには危

除すぎる地帯となった。そのため、メシヤンはまずバルセロナから測量を開始し、1792年10月には最南端のモンジュイック城における観測を終えた。しかし、その後、メシヤンは次々と災難にみまわれる。1793年1月のルイ16世の処刑後、フランス共和国はプロシヤ、オーストリア連合と戦争状態に入る。3月にはフランス共和国がスペインに対して宣戦布告をしたため、国境地帯の測量は困難となった。4月、メシヤンはバルセロナの郊外で、水圧機械に引きずられる医師を助けようとして瀕死の重傷を負い、3日間意識不明となった。バルセロナから出ることができないメシヤンは、12月のクリスマス之夜、モンジュイック城近くの宿で天体観測を行い、最南端の北緯を正確なものにしようとするが、おおくま座北斗七星の ϵ 星(ミザール)を観測した結果、1792年10月の観測結果と3.2秒の誤差があることに気づいた。しかし、スペイン政府はメシヤンらに対してモンジュイック城への立ち入りを禁じており、前回と同じ場所で観測することができない。ダンケルクからバルセロナまでの子午線の距離を求めるとの目的であるにもかかわらず、最南端のモンジュイック城の北緯に誤差があるかもしれないという事実はメシヤンの科学者としての良心を悩ませた。

1794年9月、メシヤンはスペインからイタリアのジェノバに避難した。化学者のラヴォアジエがギロチンで処刑されるなど、親しくしていた科学者が革命の犠牲になることに心を痛めるとともに、自らの運命にも危うさを感じて心を病んでいたといわれる。1795年にはようやくマルセイユを経由してフランスに帰還したが、パリには

戻らず1798年9月にフランス南部の三角測量を完了した。1798年11月、メシヤンとドゥランブルはパリに帰還し、子午線測量の正確さを審査するため招かれた外国人研究者の査読を受けた。ドゥランブルは、その功績でパリ天文台長に就任し、1806年までかけてダンケルク―バルセロナ間の子午線測量の成果を“Base du Systeme Métrique Décimal, ou Mesure de L'arc du Méridien entre Dunkerque et Barcelone (十進法に基づくメートルの基礎：ダンケルクからバルセロナ間の子午線長の測定)”という書籍にまとめた(図2)。一方、メシヤンは、バルセロナ・モンジュイック城での緯度観測結果に納得がゆかず、地中海のバレアルス諸島までの子午線延長測量に参加し、1804年に黄熱病にかかり旅先で死去した。

メシヤンとドゥランブルの測量が終わった1798年は、伊能忠敬が蝦夷地に向かつて子午線1度の測量を開始する2年前。その成果物が出版された1806年は、伊能忠敬が瀬戸内海、山陰海岸、隠岐島などの第5次測量を行っていた頃のことである。

19世紀の北欧・東欧における子午線測量

シュトルーヴェ(Friedrich Georg Wilhelm von Struve)は、ドイツ生まれのロシア人と書かれることが多いがそれは正確ではない。1793年ハンプブルグ北部のホルスタイン(当時はデンマークノルウェー王国)に生まれたが、ナポレオンの侵攻を逃れエストニアに移住。エストニアのドルパット大学(現在はタルトゥ大学)で天文学を学び、卒業後、ドルパット(タルトゥ)天文台に勤

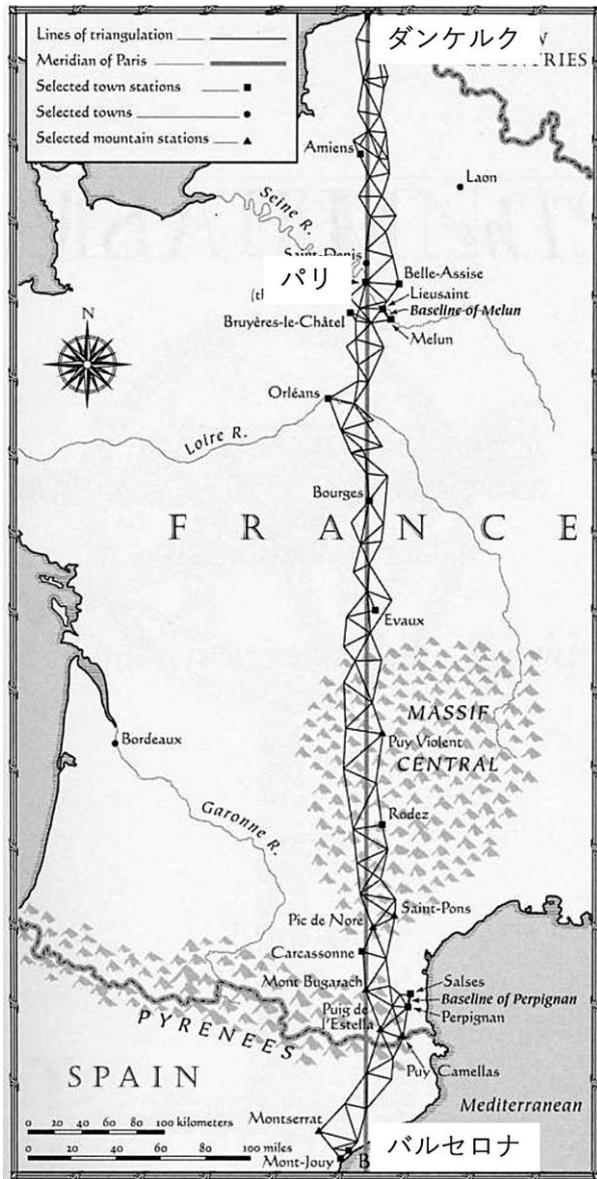


図2. メシヤンとドゥランブルによるダンケルクからバルセロナ間の子午線測量結果 (Delambre 1806)

務し、二重星の観測に熱中した。1839年にサ
ンクト・ペテルブルグのプルコヴォ天文台の設立
にかかわり、1843年によりやくロシア市民権
をえた。

シュトルーヴェが誕生した1793年は、すで
に伊能忠敬は佐原で村方後見として名をなし、隠
居を考えていた頃であり、シュトルーヴェと伊能
忠敬は年齢がひとまわり以上離れている。子午線
測量を開始した1816年は、江戸府内の第10次
測量が完了した年なので、シュトルーヴェは、メ
シヤン、ドゥランブル、伊能忠敬からすれば、次
世代の天文学者といえる。

シュトルーヴェの子午線測量は、エストニアの
ドルパット天文台(タルトゥ旧天文台)を起点に、
北はノルウェーのハンメルフェスト(北緯70°
56′)から南はウクライナのスタラ・ネクラシウ
カ(北緯45°20′)まで、緯度差25°。以上をカバ
ーし、南北2,820 kmにおよぶ大規模なもので
あった(図3)。

メシヤン、ドゥランブルによる、ダンケルク・
バルセロナ間の測量は緯度差10°であり、測量期
間は7年であった。伊能忠敬の測量の最北端は北
海道の新シベツ(北緯43°23′)、最南端は鹿児
島の屋久島(北緯30°18′)、緯度差は13°で
あり、測量期間は17年間であった。シュトルー
ヴェの子午線測量は、緯度差25°、開始から完了ま
での期間40年におよぶ大規模なものであった。

シュトルーヴェの子午線測量の観測点は265
ヶ所に及ぶ。そのうち現在も残る34ヶ所が、地球
の大きさを正確に測量する上で多大な貢献をした
として、2005年にユネスコの世界遺産に登録
された。現在は、ノルウェー、スウェーデン、フィ



図3. シュトルーベの測地弧。タルトゥ天文台を通る子午線は赤線で示されている。
世界遺産に登録された34地点は赤い点で示されている (©CC BY-SA 3.0)。

ンランド、ロシア、エストニア、ラトビア、リ
トニア、ベラルーシ、ウクライナ、モルドバの
10カ国にわたる国境を超えた世界遺産である。ど
うして10カ国にもまたがる測量ができたのかと

いう疑問が湧くが、当時はスウェーデン・ノルウェ
ー王国、ロシア帝国のわずか2カ国でこの範囲を
カバーしていたのである。

測量方法、測量器具の比較

伊能忠敬の測量が、道線法と交会法を合わせた測量法であるのに対して、メシヤン、ドウランブル、シュトルーヴェの測量は、三角測量であることが大きな違いである。道線法では、道線上の2点間の距離を歩測あるいは間棹、間縄、鉄鎖などを用いて測量し、また2点間の角度を彎窠羅鍼などのコンパスを用いて測定しなくてはならないが、三角測量の場合は最初の2点間のベースラインさえ正確に測量すれば、その後は三角測量地点間の角度を地道に測ってゆけばよい(図4)。なだらかな地形が続き、教会の塔などが遠くからでも視認できるヨーロッパでは、この方法のほうがはるかに効率的であった。しかし、三角測量地点間の角度は、秒単位で正確に測定しなければならぬため、望遠鏡のついた測量器具が用いられた。

メシヤン、ドウランブルの測量では、ボルダ(Borda)が開発した反復円盤という装置が用いられた。アメリカの歴史学者ケン・アルダー(Ken Alder)は、メシヤンとドウランブルの測量を著した『The Measure of All Things: The Seven Year Odyssey and Hidden Error that Transformed the

World (フランス語版: Mesurer le Monde: L'incroyable histoire de l'invention du mètre

世界を測る:メートル発明の驚くべき物語)の中で、反復円盤の使い方を以下のように説明している。

反復円盤の上下には、別々にスライドする二つの望遠鏡が備えられています。A B 2点間の角度を測定するには、下の望遠鏡をAに向けネジを締めます。上の望遠鏡をBに向けネジを締めます。ここで2点間の角度を読み取って終わりにすることもできますが、反復円盤では、下の望遠鏡をBに向けネジを締めたら、上の望遠鏡を逆回転させてAに向けてネジを締めます。これで2点間の倍の角度が記録されます。さらに、下の望遠鏡を逆回転させAに向けてネジを止め、上の望遠鏡を回転させてBに向けてネジを止めます。これで2点間の3倍の角度が記録されます。このようにして、観測者は望遠鏡を任意の回数だけ反復して回転させ、それを反復回数で割り算することにより、A B間の角度を秒単位まで正確に読み取ることができるのです(図5)。

World (フランス語版: Mesurer le Monde: L'incroyable histoire de l'invention du mètre 世界を測る:メートル発明の驚くべき物語)の中で、反復円盤の使い方を以下のように説明している。

反復円盤の上下には、別々にスライドする二つの望遠鏡が備えられています。A B 2点間の角度を測定するには、下の望遠鏡をAに向けネジを締めます。上の望遠鏡をBに向けネジを締めます。ここで2点間の角度を読み取って終わりにすることもできますが、反復円盤では、下の望遠鏡をBに向けネジを締めたら、上の望遠鏡を逆回転させてAに向けてネジを締めます。これで2点間の倍の角度が記録されます。さらに、下の望遠鏡を逆回転させAに向けてネジを止め、上の望遠鏡を回転させてBに向けてネジを止めます。これで2点間の3倍の角度が記録されます。これを任意の回数反復し、合計の角度を反復回数で割れば、AB間の角度を秒単位まで正確に測定することができる(Alder 2002, 2005)。

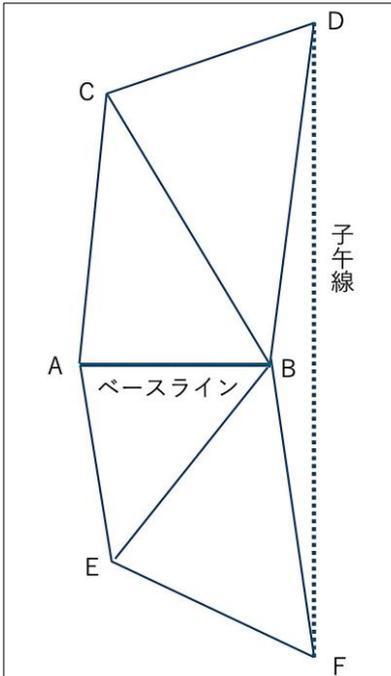


図4. 三角測量の原理

AとBを結ぶベースライン(通常数キロメートル)の距離を正確に測量する。A—Bベースラインを基準にC地点の角度を正確に測定する。次にB地点、C地点からD地点の角度を正確に測定する。これを繰り返して、三角形のネットワークを構築する。同じ子午線上にあるD—F地点間の距離は、直接測量しなくても、A—Bベースラインの距離と各地点からの角度から計算することができる。

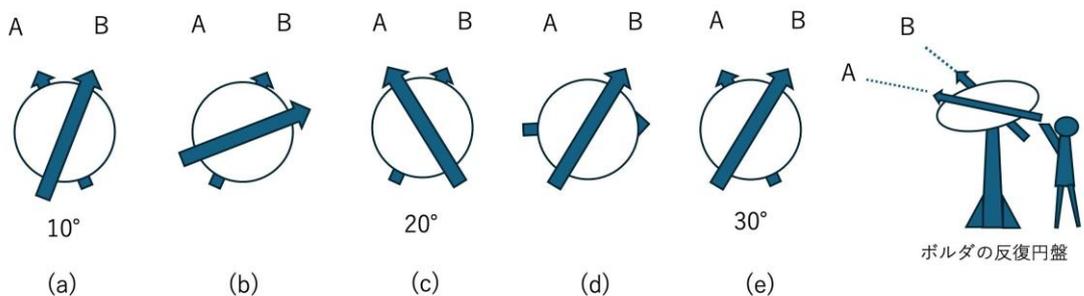


図5. ボルダの反復円盤の使い方: AB間の角度を測定するには、まず円盤の下の望遠鏡をAにあわせ、上の望遠鏡をBに合わせる(a)。次に、下の望遠鏡を円盤ごと時計回りに回転させてBに合わせる(b)。次に、下の望遠鏡はBに合わせたまま、上の望遠鏡のみを反時計回りに回転させてAに合わせる(c)。これでAB間の2倍の角度が記録される。次に上の望遠鏡を円盤ごと時計回りに回転させてBに合わせる(d)。次に上の望遠鏡はBに合わせたまま、下の望遠鏡のみを反時計回りに回転させAに合わせる(e)。これでAB間の3倍の角度が記録される。これを任意の回数反復し、合計の角度を反復回数で割れば、AB間の角度を秒単位まで正確に測定することができる(Alder 2002, 2005)。

2 フランス語版では、G(Gauche: 左) D(Droite: 右)間と書かれているが、本稿ではわかりやすくするため、AB間とした。

ポルダの反復円盤は、1930年代までフランス陸軍で用いられたと言われ、それだけ簡便で正確な観測器具だったということを示している。

ベースラインの測量には、プラチナと銅の2つの金属でできた定規が用いられ、定規には目盛を正確に読み取る顕微鏡と温度差による膨張・伸縮を回避するための温度計が備えられていた。そのため、2,800mのベースラインの計測に41日を要したと記録されている。測量器具に関しては、伊能忠敬の測量とは大きな違いがあった。

測量結果の比較

表2に、18～19世紀の子午線測量の測量年、測量の最北端・最南端と緯度差、子午線1度の距離、地球の四分の一周の距離を一覧にまとめた。

これを見ると、測量の最北端と最南端の緯度差は、ドゥランブル・メシヤン(10°)、伊能忠敬(13°)、シュトルーヴェ(25°)と年を追って大きくなっていく(ただし伊能忠敬の子午線1度の距離は、第2次測量の結果に基づいているので、第2次測量だけに限定すれば緯度差は5.2度となる)。測量に要した時間も、ドゥランブル7年、伊能忠敬17年、シュトルーヴェ40年と年を追って、長期間の測量を要する計画となっている。

最後の行に、ドゥランブル・メシヤン、伊能忠敬、シュトルーヴェの子午線1度の測定結果を、最新データと比較するため、19～20世紀に亘って長く使われたベッセル楕円体と1980年に採択され、現在最も広く用いられているGRS80地球楕円体における子午線1度の距離を示した。

ドゥランブル・メシヤンの測定値は、ベッセル

楕円体の値に最も近く、シュトルーヴェの測量値は、GRS80地球楕円体に最も近いという結果となった。シュトルーヴェは、40年かけて緯度差5.2°

表2. 18～19世紀の子午線測量にもとづく子午線1度ならびに地球の四分の一周長

著者・測量者	測量年	最北端	最南端	緯度差	子午線1度 (m)	地球 1/4 周 (m)
Delambre Méchain	1792～98 (7年間)	Dunkerque N51°	Barcelona N41°	10°	111,119	10,000,724
伊能忠敬	1800～16 (17年間)	ニシベツ N43°	屋久島 N30°	13°	28.198 里 110,946	9,985,120
		野辺地 N40.9°	江戸深川 N35.7°	5.2°		
Struve	1816～55 (40年間)	Hammerfest N70°	StaraNekr- asivka N45	25°	111,134	10,002,018
(参考) ベッセル楕円体					111,121	10,000,856
GRS80 地球楕円体					111,133	10,001,966

表3. 現代の測地系 (GRS80 地球楕円体) に基づく各緯度の子午線1度の距離 (羽田 2021)

北緯	子午線1度 の距離 (m)	北緯	子午線1度 の距離 (m)
0	110,574	40	111,035
10	110,608	45	111,132
20	110,704	50	111,229
30	110,852	60	111,412
35	110,941	70	111,562

を測量しただけあって、子午線1度の距離も、地球の四分の一周の距離も、現代の数値と非常に近いものになっている。

ただし子午線1度の距離は、測量がどの緯度で行われたかによって違ってくるため、それを考慮する必要がある。表3に、GRS80地球楕円体の各緯度における子午線1度の距離を示した。ドゥランブルとメシヤンの測量は、北緯40°、50°付近の測定である。GRS80地球楕円体では北緯40°で111,035m、北緯50°で111,1229mなので、子午線1度が111,119mというドゥランブルの推定値は範囲内に収まっている。しかし、GRS80地球楕円体の地球の四分の一周長と比較すると1,242mもの差があり、赤道から北極までの距離の1000万分の1を1メートルと定義するという測量の本来の趣旨からすると、0.012%の誤差が生じてしまった。

伊能忠敬の子午線測量結果の評価

伊能忠敬の子午線1度の距離は、第二次測量の結果に基づいている。大谷亮吉(1917)の「伊能忠敬」(p450)によれば伊能忠敬の子午線1度の距離は江戸深川と野辺地との距離(146,6275里)と緯度差(5.2度)に基づいて計算され、およそ28.2里(正確には28.198里)である。

伊能忠敬の子午線1度の推定値をヨーロッパの推定値と比較するには、メートル法に換算する必要がある。佐久間達夫(1994)は、一尺を0.30303m、1里を3927.27mとして計算し、28.2里を110,750mとしている。これは、1891年に度量衡法が採択された際の換算式に基づいている。しかし、伊能忠敬の時代には享保尺、又四郎尺などさまざまな尺が用いられていた。伊能忠敬は、これらとは異なる独自の尺を用いた。大谷亮吉(1917)の「伊能忠敬」(p256)には、「伊能忠敬の尺度を現行法に換算すると、忠敬尺はメートル法にて0.30359m」と書かれている。1町(360尺)は109.29m、1里(36町)は、3934.53mとなる。仮にこれをもとに、28.198里をメートル法に換算すると、子午線1度は110,946mとなる。表3に示したGRS80地球楕円体に基づく北緯35°における子午線1度の距離は110,941mであり、北緯35°付近に限れば、伊能忠敬の推定値はGRS80地球楕円体に近い値となる。

それでは、高橋至時はなぜ、伊能忠敬の推定した「子午線1度28.2里」を、ヨーロッパの研究成果と近いと判断したのだろうか。高橋至時は、メートルではなく、里に換算して比較したはずな

ので、その点に留意して検討してみた。

高橋至時が参照したのは、1771年にフランスで刊行され、1772年にオランダ語に翻訳された「ラランド暦書」である。オランダ語版の「ラランド暦書」は参照できなかったが、インターネット上でさがしたところ、1771年に出版されたフランス語の原書がデジタルアーカイブとして保存・公開されていることがわかった。

第3巻(p83~128)には、「第5章 地球の大きさと形状 (De la Grandeur et de la Figure de la Terre)」が記述されている。

P121には1770年代までに測定された10ヶ所の子午線1度の距離が当時の距離単位トワーズで示されており、1735年にブーゲとコンタミーヌが南米の赤道付近で測定した値が最短で56,753トワーズ(110,614m)、28.11里、北緯49°付近のパリ・アミアン間が57,069トワーズ(111,230m)、28.27里)、北極圏に近い北緯66°20'での測定値が最長で57,422トワーズ(111,918m)、28.45里)であった。また、第4巻(p777~778)には、北緯0°から90°の各緯度における子午線1度の距離が示されている(図6)。この数値は、ラランドが自ら測量したものではなく、1770年代までに世界中の科学者が測量した結果から導いた数値である(表4)。これを見ると、北緯35°における子午線1度の距離は56,950トワーズ(110,998m)、28.21里)と書かれており、伊能忠敬の測量結果2

8.198里(110,946m)に近い。おそらく高橋至時は、これらの数値を見て、伊能忠敬の測量結果が、世界で最も権威のある天文学書であるラランド暦書の数値とほとんど変わらないことを知り、伊能忠敬とその結果を喜び合ったのはなからうか。

Hauteur du Pôle.	Degrés de latitude.	Degrés de longitude.	Hauteur du Pôle.	Degrés de latitude.	Degrés de longitude.
0°	56700	57196	33°	56926	48031
1	56701	57188	34	56938	47482
2	56702	57162	35	56950	46920
3	56703	57119	36	56962	46342
4	56705	57058	37	56975	45751
5	56707	56991	38	56988	45146
6	56710	56886	39	57000	44527
7	56713	56774	40	57013	43894
8	56716	56644	41	57026	43248
9	56720	56498	42	57039	42588
10	56725	56335	43	57052	41916
11	56730	56154	44	57064	41230
12	56735	55957	45	57078	40532

図6. La Lande(1771) Astronomie 4巻の付表(p777): 北緯35°の子午線1度の距離が56,950トワーズ(110,998m)と書かれている。おそらく高橋至時は、本書のオランダ語版を見て、伊能忠敬が算出した子午線1度28.198里(110,946m)は、当時の天文学的知識からみて正しいと判断したのではなからうか。

表 4. “Astronomie par M. de La Lande”に記載された各緯度の子午線 1 度の距離

北緯	子午線 1 度の距離 (トワーズ)	子午線 1 度の距離 (m)	北緯	子午線 1 度の距離 (トワーズ)	子午線 1 度の距離 (m)
30	56,891	110,883	50	57,143	111,374
35	56,950	110,998 (28.21 里)	55	57,205	111,495
			60	57,265	111,612
40	57,013	111,120	65	57,317	111,713
45	57,078	111,247	70	57,362	111,801

* 1799 年にフランスでメートル法が採用された際、1 トワーズは 1.94903631 メートルと定義された。

1802 年に上呈された東日本図の序文には、1 トワーズ=6.42 尺と書かれており、56,950 トワーズは、365,619 尺、すなわち 28.21 里となる。

* 1891 年に日本で度量衡法が採択された際、1 里は 3,927.27m とされたが、本稿では伊能忠敬が用いた忠敬尺に基づき、1 里を 3,934.53m として計算している。

おわりに

これまでの伊能忠敬の研究は、ヨーロッパにおける地図測量や子午線測量の歴史とは関係なく、日本における最初の実測による地図測量という位置づけでなされたものがほとんどである。しかし、伊能忠敬の子午線 1 度の測定をヨーロッパにおける子午線測量の歴史と関連づけて見ると、メシヤンとドゥランブルによる子午線測量が完了し、ドゥランブルがその結果をまとめている期間に伊能忠敬の測量が開始され、また伊能忠敬の測量が江戸府内測量をもって完了した年にシュトルルーヴェの測量が開始された。フランスと日本と北欧・東欧の間で、まるでバトンをつないだリレーのように子午線測量が行われていたことがわかった(表 1)。

その測量の方法や測量器具などの技術は違えども、地球の大きさを知りたいという好奇心と情熱が、7 年と 40 年に及ぶ現地測量という困難な仕事を支えていたに違いない。子午線測量に従事した彼らが情報交換をするということは、残念ながら当時の状況ではありえなかったが、もし地球の大きさを知りたいと願った彼らが互いに意見を交わす機会があったとしたら、どんなに楽しかっただろうと想像がふくらむ。

引用文献

- 大谷亮吉 (1917) 伊能忠敬・長岡半太郎監修、大谷亮吉編著 岩波書店
 小島一仁 (1998) 伊能忠敬の人間像 伊能図に学ぶ 東京地学協会編 朝倉書店
 佐久間達夫 (1994) 新説・伊能忠敬 自費出版
 羽田康祐 (2021) 地図リテラシー入門―地図の正しい読み方・描きかたがわかる。ペレ出版

引用文献 (英文・仏文)

- Alder, Ken (2002) The Measure of All Things: The Seven Year Odyssey and Hidden Error that Transformed the World (英語版). Free Press, New York.
 Alder, Ken (2005) Mesurer le Monde: L'incroyable histoire de l'invention du mètre (フランス語版). Flammarion, Paris.
 Arc géodésique de Struve (フランス語) (https://fr.wikipedia.org/wiki/Arc_géodésique_de_Struve)
 Delambre (1806) Base du Système Métrique Décimal, ou Mesure de L'arc du Méridien entre Dunkerque et Barcelone (フランス語).
 La Lande (1771) Astronomie par M. de La Lande, Tome III (フランス語・ラランド天文学第 3 巻) (<https://ia800904.us.archive.org/19/items/astronomie03lala/astronomie03lala.pdf>)
 La Lande (1771) Astronomie par M. de La Lande, Tome IV (フランス語・ラランド天文学第 4 巻) (<https://dn790006.ca.archive.org/0/items/astronomie04lala/astronomie04lala.pdf>)
 Mesure de la longueur du méridien terrestre par Delambre et Méchain (フランス語) (https://fr.wikipedia.org/wiki/Mesure_de_la_longueur_du_méridien_terrestre_par_Delambre_et_Méchain)
 Nomination of the Struve Geodetic Arc for the inscription on the World Heritage List (英語) (<https://whc.unesco.org/uploads/nominations/1187.pdf>)

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第四十回
 伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版
 監修 渡辺一郎 編著 井上辰男
 【第九次測量】(伊豆七島) 関東近郊(八王子) 川越 熊谷 荒川沿い 江戸千住) 自文化13年3月26日 至文化13年4月12日

		文化13年3月		宿泊日・旧暦			宿泊地	現・市町村名		宿泊宅				特記・天体観測	大図番号	
27-1	昼休	大袋新田枝高橋	同	川越市	名主七郎右衛門											八八
26	昼休	箱根ヶ崎村	東京都瑞穂町	名主次郎左衛門												九〇
	(23)	扇町屋宿	埼玉県入間市	組頭太七												八八
<p>多摩郡右江戸道・左秩父道追分。左引込臨濟宗柴崎普濟寺末北山円福寺。狭山ヶ池、下流石橋、川下八里砂川村にて四谷上水に入り助水となる由、郡界。入間郡富士山村(惣名宮寺郷といふ)、右引込高根村。枝駒形、二本木村(駅場)、右側許坊村、中野村、小谷田村、扇町屋宿、左山玉の社。左青梅道追分、左引込曹洞宗大袋村東光寺末光福山長泉寺。右引込鎮守愛宕権現の社領、合殿竜田明神。三辻、右川越道・左日光街道追分打止め分印を残終る。</p> <p>入間郡扇町屋宿出立。同所追分、分印より始め、川越道測量。左側許黒須村、右江戸道・左秩父道追分埋抗を残す。左右共黒須村、入間川村、字鶴ノ木、右岡草生野、古戦場小手差原いふ名所也。古墳飛々にあり。字十三里といふ。此辺(新田、足利)合戦の衝也。島山道清の古城跡といふ。名所石無し坂、左引込清水大明神(木曾義仲の一族、清水冠者の霊を祭る)、左日光街道広瀬へ出る道。用心残制札角繫ぐ。</p>																

29-1	28	27-2		宿泊日・旧暦
昼休	(25)	(24)	昼休	(西暦)
黒須村	同	川越城下高澤町	大俣新田枝高橋	宿泊地
同 入間市	同	同 川越市	同 川越市	現・市町村名
名主武兵衛	同	水村与惣右衛門	名主七郎右衛門	宿泊宅
川越城下出立。無測量。三里半入間郡扇町屋宿追分、分印より始め、日光街道測量。右側許黒須村、左右黒須村、右江戸道追分、右引込字向新田に真言宗観倉寺。霞川渡、右引込字向新田に真言宗世音山蓮花院妙智寺。左秩父道追分、昼休。	同所滞留。午後測量。志多町の限り赤間川志多町橋左欄干(戊年五月十八日、市中打出残し)より初、松山道測量。(町郷分、東明寺村、小久保村、寺井三ヶ村)人会四ヶ村、左右人家続き、右鴻ノ巣道、右神明の社。すべて川越領、向小久保(イラクボ)村、宿粒(シユクリユウ)村、志垂(シタリ)村。左天台宗九品山安養院極楽寺。又宿粒村、網代村、福田村、入間川渡船場に打止、田印を残し終る。字伊草渡という。それより元の道に戻り帰宿。	左曹洞宗福昌寺。豊田本村、大塚村豊田新田、野田村、右府中道追分、字田島、左家中屋敷、松郷分、枝六軒町、木戸、高拾五万石松平大和守居城川越市中、右側志義町・左側妙養寺門前三辻旧測の當りに繋ぐ。左妙養寺本堂。是より重測。左右志義町、右横町大工町、(左へ曲る)、鍛冶町、右横町多賀町、南町、右引込一向宗法善寺。左引込行伝寺。左引込曹洞宗長喜院。左引込曹洞宗常会地青竜山養寿院。四辻、右本町、真直喜多町、(左へ曲る)、高澤町、止宿前打止終る。	右引込正八幡宮。別當真言宗入間郡石井村大智寺末天竜山成円寺。字本宿(駅場)、右引込曹洞宗妙智山慈眼寺。右四ツ谷・左日光街道追分、右引込牛頭天皇領。別當真言宗天竜山成円寺。左天神之社。左人家の後名所入間の里、右旧跡天堂山という岡あり。(俗説此所に日輪三ツ出し時、二ツ射殺したり。魔を射し故射摩と唱しをいつの頃よりか入間とは書来れりという。按に日輪とは狐狸の所為也)。字市場、字峯、右に愛宕の社、左曹洞宗円明山東西寺。字田中、右引込當村枝澤村内に曹洞宗滝山少林寺末天竜山天岑寺。上奥富村、下奥富村、大俣新田、枝猪ノ鼻、枝高橋、右制札あり、昼休。	特記・天体観測
八八	八八	八八	八八	大図番号

1-1	文化13年4月	29-2	宿泊日・旧暦
(4.27)	昼休	(26)	(西暦)
松山町	坂戸居村字上町 三丁目	高萩村	宿泊地
同 東松山市	同 坂戸市	同 川越市	現・市町村名
名主喜左衛門	名主源右衛門	問屋伝蔵	宿泊宅
<p>字下町、右引込曹洞宗越生(ヲユセ)竜穩寺末長溪山永源寺、左真言宗正蔵寺。右真言宗常福寺。右吉見(ヨシミ)観音道、右引込真言宗竜護山勝(スグレ)ノ大知寺、境内三町四方。吉田村、越辺(ヲツベイ)川歩行渡、川上二町許にして越辺川、高麗川落合(越辺川、川上入間郡瀧ヶ谷より流る。高麗川、川上秩父郡江賀野より流る)、川下赤尾村にて(土岐川、越辺川)落合、それより一筋になり福田村にて入間川と落合。越辺川中央界。比企郡田木村、毛塚村、宮鼻村、毛塚村入会、右川越道追分(戊午五月の残)に繋ぐ。是より重測。鈴留川、高坂村(駅場)、左浄土宗長松寺。左秩父道追分旧年の残に繋ぐ。</p>	<p>高麗郡高萩村出立。同所止宿前始め、鹿山川中三間、左秩父道追分、右川越道、左側四日市場村、右側許笠畑村、左側許入間郡森戸新田、四辻(右川越道、左秩父道)追分、右側許三木村、左側許高麗郡高倉新田、左側許脚折(スネオリ)村、右川越道追分、左右脚折村、左浅間の社、四辻(右川越道、左秩父道)追分、右に鎮守白髪大明神、高倉川、左右入間郡下浅羽(アサウ)村、左真言宗薬師寺、右川越道、栗生田村、坂戸村、左山王の社あり。右川越道追分、左越生道、坂戸居村(駅場)、字上町、同一丁目、同一町目、同一町目、同一町目、昼休。</p>	<p>入間川歩行渡、字黒須渡という。川中界。高麗郡根岸村、左引込篠井村内、観音堂領、別当京聖護院宮直末大先達滝音山白山寺。右引込真言宗新堀村聖天院末高竹山明光寺。左側計篠井村、左引込曹洞宗越生村竜隠寺末金井山宗源寺。右側許広瀬村、右引込式内広瀬神社。別当真言宗寿永山宝蔵寺。又根岸村、左富士浅間の社。田木村、大谷沢村、小流、左越生道、右川越道、高萩村、川崎川、字谷津、右に曹洞宗高萩山谷雲寺、小アゼ川、右川越道、高萩居村(駅場)、止宿前打止め終る。</p>	特記・天体観測
八八	八八	八八	大図番号

3 1	2			1 2	宿泊日・旧暦
昼休	(28)	昼休	小休	(4, 27)	(西暦)
甲山村	井草宿	戸守村	古凍村	松山町	宿泊地
同 熊谷市	同 東松山市	同 東松山市	同 東松山市	同 東松山市	現・市町村名
竹井新右衛門	名主次右衛門 組頭清次郎	組頭八郎左衛門	桧本仁左衛門	名主喜左衛門	宿泊宅
<p>甲山村、昼休、</p> <p>井草宿出立。無測量三里余松山町止宿前字上町、上印始め、日光街道測量。左制札、馬駅、左引込氷川大明神、熊野大権現社、左天皇の社、右曹洞宗曹源寺。左溜池(周り二町許)、其向に天台宗真福寺。字山王、左市川村道追分、市ノ川土橋(川上男衾郡赤野屋村より流る。是より川下荒川に入る)、滑(ナメ)川石橋(川上大里郡古里村より流る。川下十五町にて市野川に落合)、平村、左薬師堂、門ノ川橋右日光街道追分、是より中山道吹上へ出る迄二里。馬頭観音に繋ぐ。従是熊谷道測量。大里郡</p>	<p>田印に繋終る。それより比企郡井草宿へ帰宿。</p> <p>井草宿出立。無測量三里余松山町止宿前字上町、上印始め、日光街道測量。左制札、馬駅、左引込氷川大明神、熊野大権現社、左天皇の社、右曹洞宗曹源寺。左溜池(周り二町許)、其向に天台宗真福寺。字山王、左市川村道追分、市ノ川土橋(川上男衾郡赤野屋村より流る。是より川下荒川に入る)、滑(ナメ)川石橋(川上大里郡古里村より流る。川下十五町にて市野川に落合)、平村、左薬師堂、門ノ川橋右日光街道追分、是より中山道吹上へ出る迄二里。馬頭観音に繋ぐ。従是熊谷道測量。大里郡</p>	<p>右側許今泉村、右ワシノ宮、左川島領道追分、左に枝根岸、小流石橋、正直村、小流石橋、戸守村、昼休。</p> <p>左天台宗観音寺。中山村、左引込陣屋、吹塚村枝大宮、又中山村、上井草村、左真言宗紀州高野山末童光院末土俗山金乘院観音寺、境内一町四方。井草宿(駅)、右引込蘭草山大聖寺。下井草村、越辺川渡船。船賃定、老人拾式文、尙足拾六文。入間郡福田村内(三月二十八日残)田印に繋終る。それより比企郡井草宿へ帰宿。</p>	<p>小休。</p> <p>比企郡松山町出立。同村内追分(昨日の残し)川印始め、川越道測量。右側野本村、左側柏崎村、左右松生原広し、左引込曹洞宗野本村無量寿寺末祝融山万船(松)寺、境内二町四方。古凍(フルコヨリ)村、小休。</p>	<p>比企郡松山町出立。同村内追分(昨日の残し)川印始め、川越道測量。右側野本村、左側柏崎村、左右松生原広し、左引込曹洞宗野本村無量寿寺末祝融山万船(松)寺、境内二町四方。古凍(フルコヨリ)村、小休。</p> <p>右側許今泉村、右ワシノ宮、左川島領道追分、左に枝根岸、小流石橋、正直村、小流石橋、戸守村、昼休。</p> <p>比企郡松山町出立。同村内追分(昨日の残し)川印始め、川越道測量。右側野本村、左側柏崎村、左右松生原広し、左引込曹洞宗野本村無量寿寺末祝融山万船(松)寺、境内二町四方。古凍(フルコヨリ)村、小休。</p> <p>比企郡松山町出立。同村内追分(昨日の残し)川印始め、川越道測量。右側野本村、左側柏崎村、左右松生原広し、左引込曹洞宗野本村無量寿寺末祝融山万船(松)寺、境内二町四方。古凍(フルコヨリ)村、小休。</p>	<p>特記・天体観測</p> <p>是より日光街道新測。右引込曹洞宗野元村無量寿寺末太溪山高濟寺、境内一町四方。土岐川歩行渡川上平村より流る。下押垂(ヲシタリ)村、左見渡し引込比企郡比企村内岩殿観音、坂東十番の札所。野本村、右引込曹洞宗遠州石雲院末利仁山無量寿寺、境内四町四方。松山町、右川越道追分川印を残す。左箭弓稲荷道、是より引込字箭弓という処に箭弓稲荷の社、当時大流行諸国の人群集す、別当天台宗法音山福寿寺。左に経塚、右に二ツ尾稲荷の社、右見渡根子谷村内字松山の古城。左溜池、松山町人家入口、左引込箭弓別当福寿寺。右引込天台宗聖護院宮直末東照山観音寺、境内三町西方。松山町入口字下町、字上町、止宿前打上印に終る。</p>
八八	八八	八八	八八	八八	大図番号

4-1	3-2	宿泊日・旧暦
昼休	(西暦)	(西暦)
大芦村	熊谷宿字本町	宿泊地
同 鴻巣市	同 熊谷市	現・市町村名
名主源六	本陣竹井新右衛門	宿泊宅
<p>左八幡宮の社、右引込山王の社、右側許養輪村、甲山村・養輪村入会、左右比企郡岡郷村、左側許大谷村、字水穴、右引込岡郷村内曹洞宗鳩ヶ谷宿法性寺末四国山常福寺、境内一町四方。左右大谷村、右側許又岡郷村、字下原、字下岡、字上岡、右に宗(曹)洞宗妙安寺あり。左側許大里郡和田村、和田川石橋、川界。左右大里郡和田村、右側許中恩田村・下恩田村入会、左右中恩田村・下恩田村入会、小休、平塚新田、吉野川小流、上恩田村、村岡村、右に制札、荒川堤上百万遍供養塔に繋ぐ。左小川通り秩父道追分、分水川土橋、左渡し守小家、荒川渡船水巾六十九間。船賃定、一人十二文、一疋十六文、但水の増減による。(川上秩父郡三ツ峯より流る。是より川下曲り曲て江戸永代橋至る。船通行是より川下、江川村迄来る由也)。</p> <p>右に地藏、左引込太神宮、荒川界。中山道熊谷宿、字熊谷堤を越る、字横町、左真言宗星河山石上寺。星川石橋、右引込天台宗地方山円照寺。右に薬師堂、左引込本山修験水源山大善院、中山道へ出て木戸、江戸方へ向て右柱に繋ぎ谷印を残し終る。(即、文化十一戊年の残印なり)。熊谷宿着。</p> <p>中山道熊谷宿出立。同所木戸(昨日打止)谷印初め、江戸の方へ向て重測。字本町、左制札、右間屋場、左引込式内高城神社、当時高城大明神という、別当真言宗星河山石上寺、神社境内一町四方。左引込曹洞宗大慈山報恩寺、木戸、左右横町、字新宿、成田用水石橋、左忍街道追分(此道筋巳年測量す)、清水川石橋、右字八町という。左側計埼玉郡平戸村、左右とも大里郡佐谷田村、古川(琉球橋)、久下村、右引込曹洞宗法城弘見寺末梅竜山東竹院、境内三町四方。字猿新田、字八軒茶屋、是より荒川熊谷堤を行、即新測となる。字今原、足立郡大芦村、三辻(右八王子・左日光道)追分、左吹上道、昼休。</p>	<p>特記・天体観測</p>	<p>特記・天体観測</p>
八八	八八	大図番号

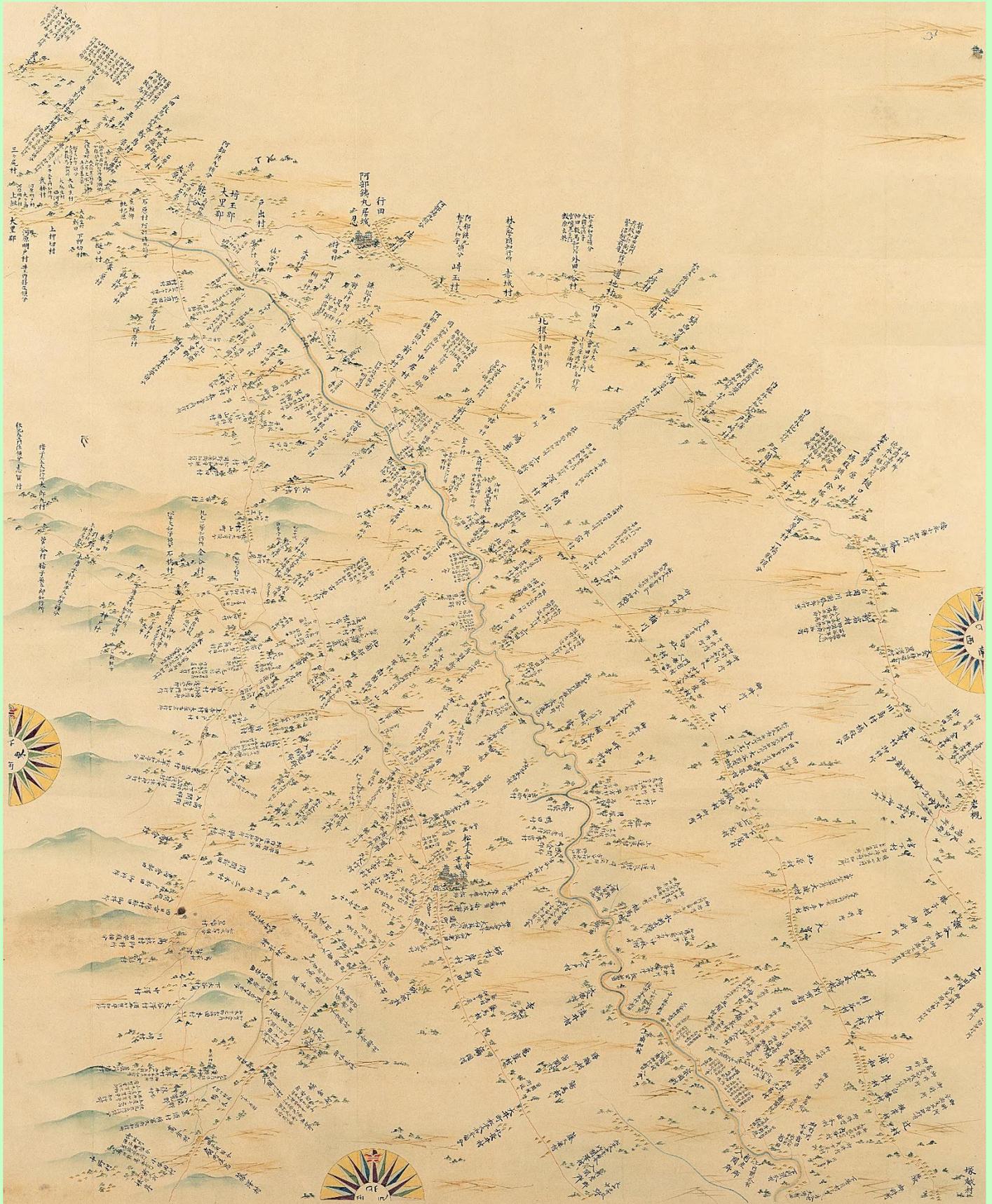
6 1	5	4 2	宿泊日・旧暦
昼休	(5. 1)	(30)	(西暦)
領家村	上川田谷村	鴻ノ巣宿	宿泊地
同 上尾市	同 桶川市	同 鴻巣市	現・市町村名
名主五郎右衛門	郷役高柳新十郎	本陣池三郎右衛門	宿泊宅
江戸護持院末大御山広徳寺、境内二町四方。	宿(大家也。忝は名主新三郎)	恒星測定	特記・天体観測
八八	八八	八八	大図番号

	7		6 1 2	宿泊日・旧暦	
(3)	昼休	(2)	昼休	(西暦)	
植田谷本村新田	遊馬村字中郷	平方村	領家村	宿泊地	
同 さいたま市西区	同 さいたま市西区	同 上尾市	同 上尾市	現・市町村名	
真言宗神明寺 組頭亀右衛門	百姓重兵衛	名主清兵衛	名主五郎右衛門	宿泊宅	
植田谷本村、字新田、飯田新田、植田谷本村新田、左の方蔵宿まで八貫野という広野也。止宿前打止め終る。植田谷本村新田着。恒星測定	字中郷、昼休、	平方村出立。差扇領秣場、木ノ下村、阿弥陀寺村、中釘村、上ノ本郷村、清河寺村、荒井村、原村、小貝戸村、内野本郷村、戸崎村、此下(法願寺村。大西村、五味貝戸村、台村、別所村、大木戸村、増永村、下郷村、赤羽根村)ノ十九ヶ村入会。差扇領という。字サンザイ原、昨日打止サ印始め、入間郡古谷上(ヤカミ)村、字野新田(本村は右荒川向にあり)、右川越道・左長野浦道追分、右に庚申塔、渡場字上志岱の渡という。此辺紀伊殿鷹場。渡場字精進場渡という。古釜本郷、字佐野新田、渡場字本郷渡し。字千地堂、百姓渡し。右荒川向(当村居村)引込正八幡宮、別当天台宗上州新田郡世良田長楽寺末宝聚山東漸院漢頂寺、坊中六ヶ寺、境内三町四方、森中に本社(鳥居南向にあり。悪水抜、江川、足立郡遊馬(アスマ)村、	渡場字畔吉河岸、右川越道・左桶川道、江川堀、平方村、渡船場字ガラ、左横物測所打上げ。字新田、左引込浄土宗川越蓮華寺末孤峯山宝地院馬蹄寺、境内七町四間。字河岸渡船場、字御朱印渡という。差扇(サンアフキ)領十九ヶ村人会原に打止めサ印を残終る。それより平方村へ帰宿。	此寺より西の方一町許隔り臨濟宗鎌倉円覚寺末常楽山養竹院、境内三町四方。比企郡表村(地先斗、居村は川向にあり)、古川渡、又足立郡(上下)川田谷村、字高畑、悪水抜、字三間半、堀巾六間、川界。領家村、畔(アセ)吉村、昼休。	特記・天体観測
八八	八八	八八	八八	大図番号	

9		8		宿泊日・旧暦
(5)	昼休	(4)	昼休	(西暦)
笹目村字早瀬	内谷村字大野新田	道場村新田	下大久保村	宿泊地
同 戸田市	同 戸田市	同 さいたま市桜区	同 さいたま市桜区	現・市町村名
真言宗日照山常光寺	名主奥太郎	百姓惣右衛門 百姓半右衛門	百姓茂八	宿泊宅
又美女木村、字夏瀬、又下笹目村、字早瀬渡船場、字早瀬の渡し。止宿前打止め終る。	谷村、字大野新田、昼休。	道場村新田、同所止宿前ト印始め、荒川筋測量。田島村新田、左引込同村鎮守氷川大明神、境内三十間四方。曲本(マカモト)村新田、曲本・内谷・沼影ノ三ヶ村入会新田、内谷村、字地藏木渡し。左引込美女(ビジヨ)木村、内八幡宮、境内一町四方、別当真言宗京都報恩院末鶴移山円通寺。左引込美女木村内曹洞宗下赤塚村松月院末天照山妙巖寺、境内三十間四方。左側計に下笹目村飛地、右側内谷村新田、字大野新田、美女木村、字高鳥、字中丸、又内谷村、字大野新田、昼休。	植田谷本村新田出立。同所止宿前初め、水判田村、字新田、飯田村、字新田、中野村、字新田、又植田ヶ谷本村字新田飛地、左の方引込植田谷本村内、真言宗京師御室御所御直末金剛山林光寺、境内一町四方。同村名主勘太夫屋敷内、式内足立神社。三条町村、字新田、島根村、字新田、左の方引込島根村鎮守氷川大明神、境内一町四方。円阿弥村新田、八王子村新田、白銀村、字新田、在家村新田、宿村新田、左引込居村内に浄土宗鴻ノ巣勝願寺末海潮山観音寺、境内一町四方。右荒川向五町許引込、下南畑村内本山修験大先達十玉院、境内古城跡。今は十玉院住居。神田村新田、渡場字神田河岸、五関(ゴセキ)村新田、加茂川舟渡し、上大久保村字新田、上大久保村・領家村・下大久保村・神田村ノ四ヶ村入会新田、字田倉寺、字青井、字羽根倉渡場、字羽根倉渡、昼休、	特記・天体観測
九〇	八八	八八	八八	大図番号

10		宿泊日・旧暦
(6)	昼休	(西暦)
川口宿	下戸田村枝渡船場	宿泊地
同 川口市	同 戸田市	現・市町村名
善光寺別当東明院	榎屋藤五郎	宿泊宅
<p>同所中印初め、左稻荷の社、中山道蕨宿(地先計)、又下戸田村、小流、浮間村、荒川渡船場、川向小豆沢村渡守一軒あり。船賃三文宛。飯塚村、悪水溝、日光御成街道川口宿、左引込平等山阿弥陀院善光寺如来領、本尊薬師如来、别当真言新儀京都御室御所仁和寺末平等山東明院。当郡横曾根村吉祥院末平等山西谷院。日光御成道に出て日印を残す。是より御成道江戸の方へ向て重測。字四面塔、右日光御成道江の節御船揚場、字川口の渡船場に至り川印を残す。(是は明日川筋測の町(幟カ)と成)。荒川渡船。船賃三文。豊島郡日光御成道岩淵宿、文化六巳年の止宿名主新蔵入口、天印に繋終る。又川口宿地内の日印に帰始め、御成道日光の方へ向て重測。悪水溝鎌倉橋、川口宿人家入口巳年の残し石地藏に繋終る。</p>	<p>下笹目村字早瀬出立。同所止宿前初め、右荒川渡場字早瀬の渡という。即練馬街道也。左引込下笹目居村内真言新儀京智積院末新竜山観音寺、境内一町四方。同村内法花宗甲州身延山久遠寺末長誓山妙顕寺。右川向徳丸ヶ原(鉄砲稽古場)、右川向十八町許引込豊島郡西台村内曹洞宗高麗郡越生竜穩寺末西山円福寺、境内一町四方。用水を渡、新曾村、上戸田村、字戸田原、周十町許の草野、御成御膳所あり。字羽黒、左引込羽黒大権現の社、别当真言宗大慈山光明寺、境内榎の股より清水出る。参詣の人眼の祈願して其水を付る。社前岩石の間より清水出る。是は竜頭を仕掛御手洗とす。側に茶屋四五軒。悪水抜の溝石橋を渡。下戸田村、中山道渡場に出て中印を残す。是より一支重測、荒川渡船水巾也。川中央界。豊島郡右側根葉村、左側蓮沼村地内川端に打止。又足立郡下戸田村枝渡船場へ帰り、昼休。</p>	特記・天体観測
九〇	九〇	大図番号

12	11	宿泊日・旧暦
(8)	(7)	(西暦)
江戸	本木村	宿泊地
同 江東区	東京都足立区	現・市町村名
	真言新儀 淵江山早谷寺吉祥院	宿泊宅
<p>日光御成道川口宿出立。同所渡船場川印始め、荒川筋測量。元郷村、広野、字椰(ナギ)原、芝川船渡、字新河岸、悪水溝、浮馬村飛地、豊島郡岩淵宿飛地、下村飛地、右二ヶ村とも川向の村也、故に豊島郡なり。悪水溝、飛地の限り。足立郡鹿浜新田、左稻荷の社、右川向豊島郡神谷村、鹿浜村、右川向豊島郡豊島村(家数百二十軒)、鹿浜新田、右荒川渡船場、字番場の渡。堀ノ内、悪水溝石橋、堀之内村、字御殿野、小台村飛地、字熊ノ本小流、昼休。</p> <p>左引込西荒井村内、真言宗五智山編照院惣持寺、境内一町四方。右渡場、字六阿弥陀渡。左引込下沼田村内、真言新儀京三宅院宮末宮城山円明院恵明寺、境内一町四方。左引込宮城村内浄土宗埼玉郡岩槻領加倉村浄国寺末竜頭山性心寺、境内一町四方。木余りの如来といふあり。空海作。宮城村、右川向豊島郡豊島村内字ツイシ一番の六阿弥陀真言新儀下沼田村恵明寺末三緑山西福寺。小台村、右作渡し。本木村、薄本落し悪水溝、字下尾久、止宿入口打止、元印を residual 終る。それより左引込居村に着。止宿真言新儀京御室御所仁和寺末淵江山早谷寺吉祥院、境内一町四方。</p> <p>足立郡本木村出立。同村元印始め、小流を渡、奥州街道千住宿、字四町目持、二町目持、一町目持、字掃部宿、字掃部堤、左引込氷川明神・稻荷明神合社、又右に稻荷社、昨亥年二月九日江戸市中測の残し千印に繋ぐ。即千住宿家並奥州街道なり。従是江戸の方へ向て荒川兼用の重測。字掃部宿、字河原町、小石橋を渡繩手、字橋戸町、荒川大橋渡長六十四間、川中央界。豊島郡千住宿小塚原町、右引込浄土宗豊徳山誓願寺。字天王門前・中村町入会、左引込法花宗円心山日慶寺。ヒ印を残す。是より天王前石垣角(亥二月九日江戸市中測の残し)天印に繋ぐ。又ヒ印に帰て始め、九ヶ村入会、小塚原人家出入木戸西柱(亥二月十日江戸市中測の残し)中印に繋終る。それより江戸内着。出迎、浅草御役所より足立重太郎、相沢文五郎、亀島地図御用所より下河辺政五郎、渡辺啓次郎、青木勝次郎、橋口郁三郎。</p>	<p>特記・天体観測</p>	<p>九〇</p>
九〇	九〇	大図番号



大日本沿海輿地全図 第88図 武蔵
出典：国立国会図書館デジタルコレクション

福山で伊能探訪

―神辺本陣と儒学者菅茶山の資料を中心に―

室山 孝

広島県東端に位置する福山市は、旧山陽道沿いに近い福山城下町を中心とする町である。長らく中世の史料と歴史を学んできた筆者にとって、初めて発掘された中世の町並み「草戸千軒」遺跡と、中世瀬戸内海交通の要衝で、室町幕府最後の將軍足利義昭も滞在した「鞆の浦」の存在から、一度は訪れたい場所であった。

訪問のきっかけは、職場に回覧されてきた広島県立歴史博物館の企画展「守屋壽コレクション」(初

公開記念)洛中洛外図屏風と古地図でたどる日本の歴史」の広報誌とその招待券であったが、山陽道における伊能忠敬の足跡に触れられるのではないか、との思いが筆者の背中を押した。

一、福山市域の伊能測量宿泊地

伊能測量隊の宿泊地を『伊能忠敬測量日記』(以下『測量日記』)で調べると、福山城下深津町に一度(中食でもう一度)、水呑村で一度、鞆津に一度、神辺駅に二度、神辺の北方万能倉村・箱田村・百谷村に各一度と、同じ市域に多数確認できる。

まず初めて幕府直轄事業となった第五次測量、紀伊半島から山陽・山陰の諸国沿岸とその島々の測量にかかっていた文化三年(一八〇六)正月二

十八日、福山城下深津町の鉄屋五郎右衛門方、翌日瀬戸内測量のため南下し、二十九日、水呑村の庄屋佐太郎方、二月一日から鞆津の土佐屋常治郎方に雨天のため三泊した。

次は第七次(九州第一次)測量の往路、備中から山陽道を進み、文化六年十一月二十七日、備後神辺駅の本陣菅波武十郎方(東本陣)に宿泊(『測量日記』には菅沼とあるが、菅波が正しい)、夜は晴天で天文測量を行った。この日、神辺で黄葉夕陽村舎(「廉塾」)を営む福山藩の儒臣菅太伸、号茶山)が宿所を訪れて会談したことが特筆されている。菅茶山はこの東本陣菅波家に隣接する分家の出身であった。

茶山の日記などをもとに、編年的に茶山の事績を詳しく辿った大著である富士川英郎『菅茶山』によれば、茶山の日記の記述として、「(十一月)二十七日、晴、伊能勘解由を本陣に見る。門人二人出て見ゆ。伊能、鄭註孝経一部・菓子・二字扇を恵む。留談夜に至る。此より先き、勘解由、屢ば語を寄せて、余を見んと欲す。而れども公程制有るを以て、往きて見ることを得ず。」とあり、忠敬は友人の儒学者久保木(窪木)清淵(竹窓)の出版されたばかりの著書『補訂鄭註孝経』を茶山に贈った。「留談夜に至る」とあるので、話が弾み意気投合したようだ。

翌朝神辺を発った測量隊は、前回宿泊した福山城下の鉄屋五郎右衛門方で中食をとり、山陽道經由、尾道へ向かった。

次は第七次測量の帰路、石見国(島根県)で大手分をした忠敬ら本隊は、備後国境赤名峠を越えて南下し、文化八年閏二月十一日、万能倉村の庄屋伴右衛門方に宿泊(「伴右衛門」の読みについて



図1 伊能中図 中国四国(福山部分) 日本学士院所蔵

は後述)、箱田村の庄屋(細川)園右衛門が挨拶に来た。翌十二日、箱田村の園右衛門方に宿泊。ここは内弟子の隊員箱田良助の親の家であった。なおこれに先立つ閏二月三日、測量隊が三次町五日市町(広島県三次市)の宿所に向かう途中、細川園右衛門は谷東平(備中国小田郡大江村の算術家・測量家)・松井弥治兵衛(坂部貞兵衛の侍松井沢次の父、箱田村近辺の西中条村の庄屋、会誌54号松井義典氏報告11頁参照)とともに、測量隊を出迎えている。測量隊はさらに同月十三日、東城街道を北上し中津藩領百谷村に宿泊した。

富士川英郎『菅茶山』では、「(文化八年)閏二月十一日に、伊能忠敬が測量のため神辺にきて、伴左衛門宅に宿った。茶山はこの日と十三日とに、鹿二なる者に忠敬の宿を訪わしめているが、鹿二は廉塾の塾生で、忠敬となか縁故のあった者なのだろうか。」と記すが、不審な点がある(赤字)。

まず『測量日記』によれば、閏二月十一日の忠敬の宿所は神辺ではなく、万能倉村の庄屋「伊右衛門」(解説活字版DVD)方とある。そこで後日、広島県立歴史博物館所蔵の「菅茶山関係資料」にある菅茶山の日記を確認したところ、(文化八年閏二月)「十一、晴、暖、鹿二之万能倉以伊能勘解由宿、伴右衛門宅也、」(十三、晴、(中略)遣鹿二伊能勘解由旅次、)とあり、十一日は鹿二を万能倉村に遣わしたと確認できる。また『測量日記』(解説活字版DVD)閏二月十日条では、府中市村上町の本陣に挨拶に来た万能倉村の庄屋は「伴右衛門」とある。念のため『測量日記』(原文DVD)を確認すると、十日条・十一日条とも「伊右衛門」でなく「伴右衛門」と読める。従って十一日条に関しては『測量日記』解説活字版の誤記であり、「伊右衛門」は

「伴右衛門」であること、神辺に宿泊したというのは富士川英郎氏の誤解(名前も)と判明した。最後は第八次(九州第二次)測量の往路、文化九年正月十二日、神辺本陣菅波武十郎方に再び宿泊。途中、箱田村の園右衛門が出迎え、翌日も園右衛門は神辺宿の外まで見送ったとある。菅茶山の日記によると、忠敬は茶山に今度は銅板の万国図を贈り、茶山は本陣に忠敬を訪ねたとある。

なお、第七次の備後北部の伊能測量隊の動きについては、西村直城氏(現、広島県立歴史博物館学芸員エルダースタッフ)による研究があり、参考にさせていただいた。

二、伊能忠敬と菅茶山の交流

このように、忠敬が備後国神辺本陣に宿泊した際、必ず菅茶山は忠敬を訪問していたことがわかる。そこで、今少し両者の交流について調べることにした。

茶山の日記は、現在広島県立歴史博物館の「菅茶山関係資料」(国重文)の中に多数残されているが、刊行されていないので、とりあえず富士川英郎『菅茶山』の記述から探してみた。

文化六年(一八〇九)十一月二十七日の両者会合の記述に、「此より先き、勘解由、屢しばしばば語を寄せて、余を見んと欲す」とあって、忠敬が以前からしばしば茶山に書状を寄せ、会合を望んでいたと記されている。しかし現在の「菅茶山関係資料」の中に忠敬の書状は確認されない。茶山が忠敬に贈った漢詩のことが、会誌54号松井義典氏報告12頁に紹介されている。

福山藩の儒臣であった茶山は、文化十一年五月から同十二年二月まで藩主阿部家の江戸屋敷で勤

務しており、この間、江戸でも忠敬や箱田良助と交流し、その後も関係は続いたことが、茶山の日記や忠敬の江戸日記の記事からうかがえる。

茶山の日記によると、文化十一年六月十九日、箱田良助が茶山を訪ねてきて忠敬の伝言を伝え、また九州測量での屋久島や種子島のこと、また対馬から朝鮮半島が見えること、さらに壱岐・五島のことを話していったとある。

箱田良助の茶山訪問は、同年八月十日、九月二十六日、十二月十七日、翌十二年正月四日・二十九日、また帰国直前の二月十二日と度々に及び、魚など手土産を持参している。

同十一年九月十四日の茶山日記に、茶山は忠敬を訪ねたとあるが、なぜか忠敬の江戸日記に記載がない。しかし、茶山の帰国が近づいた十二年二月一日、茶山日記に、忠敬が来訪し、紙を贈られたとある。このことは忠敬の江戸日記(同日条)にも記載があり、「福山藩中菅太仲へ立寄、小菊紙五束持参、七ツ半時過帰宅」とある。

文化十三年五月十九日、神辺の茶山のもとに、忠敬と箱田左太夫(良助)の書状が届いたとあり(後述)、茶山の日記ではこれが忠敬との交流を記した最後の記述のようだ。

忠敬は文政元年(一八一八)四月十三日に亡くなったが、茶山が忠敬の死を知ったのは、同年九月二十三日のこと、富士川英郎『菅茶山』は記しており、忠敬の喪は秘されていたもの、おそらく箱田左太夫から秘かに訃報がもたらされたものと思われる。

三、福山市神辺町を訪ねる

筆者は五月連休明けの十四・十五日に一泊二日



図2 『山陽道神辺本陣』表紙（かつての神辺宿西本陣）

で福山市を訪れた。初日福山駅からJR福塩線^{ふくえん}で市街地の北にある神辺駅に着き、かつての旧山陽道の、細いが古民家がぼつぼつ残り雰囲気ある通りを歩いて、神辺宿のほぼ中央に残る「山陽道神辺本陣」（広島県指定史跡、同重要文化財）を訪問した。現在のご当主菅波眞吾さんには本陣建物内部の各部屋、また広い敷地内にある米倉やかつての酒造業の跡の建物や庭など隅々まで案内していただいた。

本陣の部屋の掛け物や大名の宿泊札は原物保存のためレプリカであったが、往時の様子をよく伝

えていた。菅波さんは、本陣建物の経年による傷みとその修復の厳しさを語り、文化財、特に建物の保存・維持にかけられた長年のご苦労が、お話からにじみ出ていた。本陣敷地の北側に菅波さんが建てられた剣道場は、今は本陣と菅波家ご先祖関係の資料の展示場になっており、様々なお話を聞くことができた。

また菅波家出版の小冊子『山陽道神辺本陣』（図2）によれば、かつて神辺宿には本陣が二か所あり、現存の神辺本陣は三日市通りの「尾道屋」と呼ばれた西本陣であり、寛文年間（一六六〇〜七三）に福岡黒田藩の本陣役を務めたことにはじまる以後、黒田家専用の本陣としての性格が強まり、現存する御成門・内堀・玄関等の軒先瓦や大屋根の鬼瓦には黒田家の家紋「藤巴紋」がある。

もう一つの本陣が、かつて山陽道沿い北側（東側）七日市通りの端にあった「本莊屋」（東本陣）で、一般の本陣を務めていたが、ここに差し支えあるときは「尾道屋」に依頼することもあったという。『山陽道神辺本陣』に掲載される近世末期の「神辺宿町並み絵図」（菅波眞吾氏所蔵、図3）を見ると、西本陣（菅波嘉平）、東本陣（菅波久四郎）の位置関係がわかる。東本陣と山陽道の通りを挟んだ向かい側右手に「学問所」とあるのが菅茶山の「廉塾」である。

「廉塾ならびに菅茶山旧宅」（国指定特別史跡）は、令和三年（二〇二二）から12年かけて全体の保存整備工事中であり、見学は叶わなかったが、菅波さんの案内で敷地までは入ることができた。

東本陣（測量隊の宿所）の建物は明治期にほとんど解体され、今は民家が建つその場所も確認できた。跡地の案内板（図4）に掲載された東本陣

神辺宿町並み絵図（江戸時代末）

高屋川

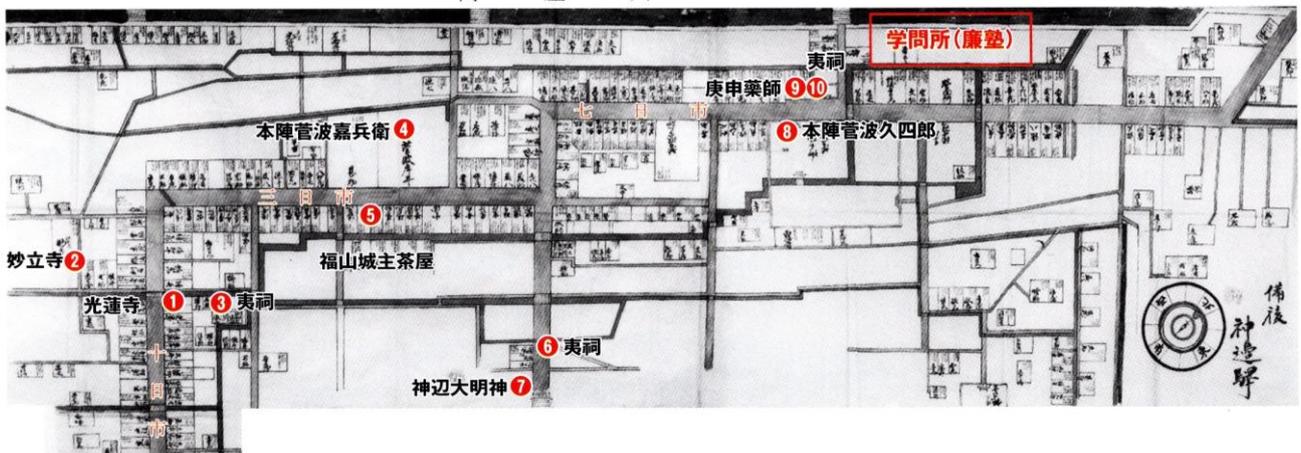
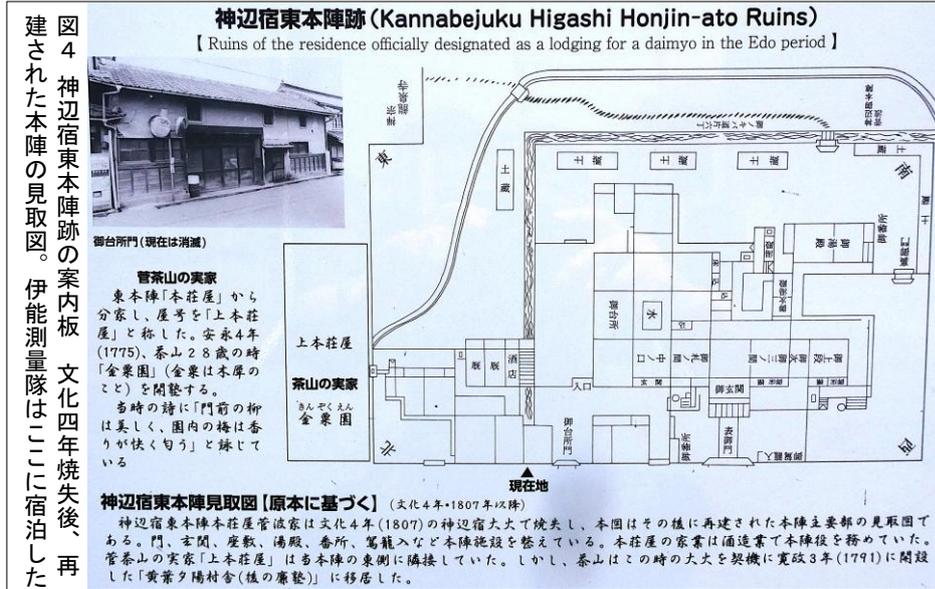


図3 神辺宿町並み絵図（菅波家所蔵、『山陽道神辺本陣』より）

④が西本陣（現存の本陣）、⑧が測量隊の宿所となった東本陣。

の平面図と、台所門（昭和の終わり頃まで残っていた）のモノクロ写真に往時の姿が忍ばれるのである。



四、箱田良助の生誕地と旧庄屋敷（測量隊宿所）
 次に菅波さんの車で、神辺の中心から北方に離れた所にある菅茶山記念館を訪ねた。ここは（公益財団法人）福山芸術文化財団が運営する施設で、茶山とそのゆかりの文人たちに関する様々な資料



図5 「箱田良助誕生之地」石碑

の展示や古文書入門講座などを行い、図録等を行行している。記念館で教材用に作成された小冊子『神辺の文化人』をみると、紹介された六人の最後に「箱田良助」の名があり、伊能忠敬測量隊員であり、榎本武揚の父としての経歴等が説明されている。職員の方に箱田良助の生家の場所を教えてください、引き続き菅波さんの車で向かうことになった。

神辺から北へ向かうと、瀬戸内地域らしく農業用の溜め池が点在しており、小高い山を迂回した辺りに箱田町があった。かつての庄屋屋敷（旧細川家）敷地の隣接地に、榎本武揚の曾孫榎本隆充



図6 箱田町の旧細川家の門

氏（本会会員）の揮毫で「箱田良助生誕之地」と刻まれた石碑と、「箱田良助略歴」説明碑が建っていた（図5）。その説明の中に箱田姓について、細川家が一時箱田氏を称したことによるとあった。また生誕地碑の右横には、良助のおそらく最初の学問の師であった菅茶山が箱田村への往来を七言絶句に詠んだ「箱田道中」詩碑も建つ。これらの石碑については、すでに星埜由尚さんが会誌64号で「箱田良助生誕の地」として紹介している。

石碑の向かい側に旧細川家屋敷の門（図6）が見えた。屋敷は小屋根付きの高い土塀に全体を囲まれた広い敷地で、丸く剪定された高い庭木が土塀



図7 明王院の本堂と五重塔（かつて草戸千軒町からも見えていた）

の上からのぞく特徴的な邸宅であるが、中の建物は見えず、伊能測量隊が宿泊した当時の建物が残るかどうかもわからなかった。かなり以前、細川家から別人の所有になったとの話である。
福山駅北口の福山城付近まで送っていただき、菅波さんとお別れした。

五、明王院と草戸千軒遺跡

午後遅い中食の後、草戸千軒遺跡の発見地、市内を流れ瀬戸内海に注ぐ芦田川の現場を見に行くことにした。福山駅前から車の浦行きバスに乗り、明王院前で下車。明王院は真言宗大覚寺派の古刹

で、空海の開山と伝え、中世は「常福寺」と称していた。寺の入口付近に、境内図や草戸千軒遺跡を含む周囲の案内板が設置されていた。長い石段を登り山門をくぐると、正面に本堂（国宝、鎌倉末期）、その左手に五重塔（国宝、南北朝期）が、いずれも鮮やかな朱色の装いで並んで建っていた（図7）。五重塔は相輪の伏鉢に刻まれた銘文から、貞和四年（一一三四年）当時の住職頼秀が多の民衆の一文勧進を結集して造営されたことが知られ、当時の門前町であった草戸千軒に暮らした多くの人々も造営に深く関わったようだ。

この日は朝から晴天で、午後の気温は28℃程にも上り、寺近くの店で買ったアイスを食べながら、芦田川にかかる法音寺橋を渡った。橋の中ほど欄干に「草戸千軒町遺跡」と大書された看板があり（図8）、かつての芦田川の広い中州や発掘風景・出土遺物の写真付きの説明台（経年でかなり傷む）が、半円形に張り出した歩道に設置されていた。河川改修で遺跡発掘が行われた中州は失われたが、



図8 芦田川法音寺橋の遺跡看板

かつて常福寺の門前町、また湊町として栄えた草戸千軒を想像しながら長い橋を渡った。

六、広島県立歴史博物館の「菅茶山関係資料」

翌日、福山城敷地南西端に位置する広島県立歴史博物館を訪れた。ここは「ふくやま草戸千軒ミュージアム」とも称するように、発掘された草戸千軒遺跡の一部復元展示を中核に、多くの遺跡出土品（国重文）を展示する施設であり、また「菅茶山関係資料」及び、国内最大級の古地図コレクションである「守屋壽コレクション」という、合わせて三件の国重要文化財群を擁する博物館である。

主任学芸員渡部史之さんには、連休明け直後に電話で「菅茶山関係資料」に含まれる『補訂鄭註孝経』「忠敬が茶山に贈ったもの」の閲覧をお願いしたところ、茶山宛ての「箱田左太夫（良助）書状」もあることを教えていただき、しかも伊豆諸島測量の様子が書かれているとのこと、伊能測量に関わるものと判断され、その閲覧も追加し、メールで手続きをとっていた。

大きなテーブルのある部屋で、まず『補訂鄭註孝経』（図9）を拝覧した。表紙には「伊能勘解由所贈」と茶山の手による墨書があり、また巻末の窪木清淵の跋文と文化元年（一八〇四）刊記の間の広めの余白に、忠敬からこの書物を受け取った翌

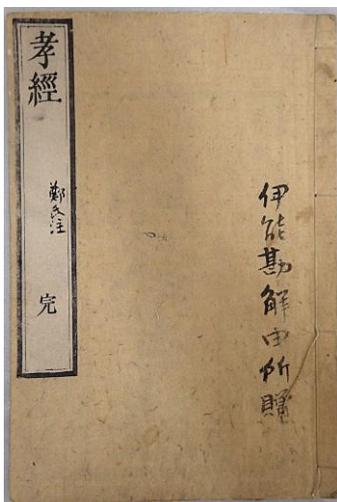


図9 忠敬が茶山に贈った『補訂鄭註孝経』（広島県立歴史博物館所蔵）

日、茶山自ら手書きした文章も記載されている。

この茶山の文章については、『森銚三著作集 第五巻 人物編五』「伊能忠敬」の中に、全文を書き下して紹介されており、茶山が六年前に江戸から常陸・下総を旅したとき、偶然知らずに香取社近くの清淵の瀟洒な屋敷の側を通ったこと（忠敬の話でこれを知ったとある）、また忠敬の諸国測量のこと等が書かれている。これについても、会誌35号に菅波寛氏が「伊能忠敬と菅茶山の会談について」として紹介されている。

次に「箱田左太夫（良助）書状」を拝見し撮影させていただいた。遠路の渡海があるため、高齢の忠敬は不参加であった第九次測量の最中、文化十二年五月二十三日、良助ら測量隊が伊豆諸島の八丈島到着の二日目に菅太仲に充て書いたもので、八丈島村々の織物（「黄八丈」であろう）を上納する船便を利用すると冒頭にある。

この左太夫書状は、茶山の日記（文化十三年五月十九日条）の記述にある、忠敬の書状とともに届いたものと判断できるが、一方の忠敬の書状については「菅茶山関係資料」に残っており、富士川英郎『菅茶山』（下）に紹介された、大正九年（一九二〇）四月発行『史林』（第五巻四号）掲載の西田直二郎「茶山片影」にこの時の忠敬書状とされる本文の一節が掲載されているのみである。これを含めて本誌別稿で紹介した。

「菅茶山関係資料」には、のち箱田良助が榎本家を継いで榎本内兵衛を名乗っていた時の書状もあったが、これは渡部さんより翻刻文のみ頂いた。

さらに、渡部さんとの話の中で、広島県立歴史博物館の分館にあたる広島市の「頼山陽史跡資料館」所蔵の「広島頼家関係資料」に、頼春水（頼

山陽の父）あての近藤重蔵書簡（二月十四日付、享和元年）と伊能忠敬書簡（四月二日付、文化三年）が合わせて軸装された状態で所蔵されていることを教えていただいた。この頼春水宛て忠敬書状は未知の史料である可能性が高いので、調査後、次号に紹介したい。

七、草戸千軒展示室と守屋壽コレクシオン展

一連の史料閲覧が終わったあと、博物館の目玉である「草戸千軒遺跡」展示室と、守屋壽コレクシオンの企画展「洛中洛外図屏風と古地図でたどる日本の歴史」、また常設展示「瀬戸内の歴史をたどる」を見た。

「草戸千軒遺跡」展示室の入口には、明王院五重塔の相輪伏鉢（レプリカ）が展示され、貞和四年の銘文もわかりやすく解説されていた。広い展示室の真ん中に、小さな船着き場と小舟、小橋を渡ると左右に復元建物、町並みの突き当たりには堂と五輪塔など、集落の生活の在り方を実物大で復元するという、開館当時としては画期的なものであった。復元建物内部や周囲に出土遺物を分類的に展示紹介し、遺跡全体の復元模型もあって、中世の草戸千軒を理解する工夫が凝らされていた。

守屋壽コレクシオン企画展は、まず初公開の「洛中洛外図」（寛永年間、本多家旧蔵本）が庄巻であり、色彩豊かな「祇園祭図」も存在感があった。

日本初の刊行世界図である「万国惣図」・「世界人物図」は、長崎での正保二年（一六四五）版を含め3種類も展示されるなど、コレクシオンの奥深さを示していた。文化元年（一八〇四）に長崎へ来航したロシア使節レザノフに関わる渡来図の絵巻、その関連資料の貼交屏風、ペリーの亜米利加船来

航図など、十九世紀外国勢の日本への進出を如実に示す資料群も興味深いものがあった。

次に、「地図づくりの発展と日本の姿」というテーマで、大型の古地図が多数展示されていた。まず行基図として現存する最古級の「日本扶桑国図」（室町期）、江戸幕府が国毎に提出させた国絵図をもとに製作した「正保日本図」、松浦静山旧蔵の「享保日本図」、享和二年（一八〇二）に薩摩藩で製作された「円球万国地海全図」、また高橋景保が中心となって文化七年に完成され、幕府に献上された「新訂万国全図」を、同十三年頃に銅版で刊行した図もあった。さらに、伊能忠敬が文化元年に幕府へ提出した「日本東半分沿海地図」（伊能小図）が壁面いっぱいに表示されていた。この伊能図は、越後高田藩の元中老鈴木甘井が文化四年に模写したものである。その隣には、松浦武四郎が忠敬の「大日本沿海輿地全図」をもとに、六度に及ぶ蝦夷地調査の成果を盛り込み、蝦夷地内部の詳細を記した「東西蝦夷山川地理取調図」（安政六年、一八五九）が展示されていた。一部拡大写真で説明もあったが、これらはガラス越しで1対近く間隔があったため、残念ながら、記入された地名など細部は国名を除いて読み取ることは困難であった。

八、福山城下町の伊能測量隊宿所を探る

福山駅ビルで昼食後、福山城を駆け足で見学した。この城は当初、初代水野勝成が元和八年（一六二二）に築城したもので、昭和二十年（一九四五）の福山空襲により天守を含め多くを焼失したが、五層の天守閣は同四十一年に市政五〇周年事業として再建され、戦災を免れた伏見櫓と筋鉄御門は



図10 「備後福山城下古地図」(元禄頃)の「フカツマチ」部分拡大
(福山市水呑町妙蓮寺所蔵) ○を加筆

国重要文化財に指定された。また月見櫓・御湯殿なども再建され、天守閣内部は福山城博物館となつている。水野家は元禄十一年(一六九八)五代で断絶し、松平家一代を挟み、その後、宝永七年(一七一〇)阿部家に替わっており、伊能測量隊が訪れた当時は五代阿部正精(ただよみ)であり、幕閣として活躍していた。

最後に、あまり時間はなかったが、伊能測量隊の福山城下における宿所(「深津町鉄屋五郎右衛門」の手掛かりを求めて、福山市中央図書館(「まなびの館ローズコム」)に併設された福山市歴史資料室を訪れた。福山城関係の絵図を集成した『福山城資料集』は豊富な城絵図や城下町図を集成し

たもので、城下町の町名を記したのもあった。

その中で、元禄初年(一六八八)頃の「備後福山城下古地図」(福山市水呑町妙蓮寺所蔵)は、「フカツマチ」通りの「町屋」の区画に「クロ金ヤ与市郎」の名が記されていた(図10)。伊能測量隊の時期とは一世紀以上も前であるが、「クロ金ヤ」の屋号は一致している。戦災で城下町も変貌し、町名も変わっていると想像され、現地を訪れて聞き込みするしかないと思つたものの、時間切れとなり、やむなく福山駅に戻り、帰途についた。

福山駅の新幹線上りホームの窓から、福山城の伏見櫓・筋鉄御門・天守・月見櫓等が見えていた。

【参考文献】

- 『日本歴史地名大系第三十五巻 広島県の地名』平凡社、一九八二年
- 森銃三「伊能忠敬」、『森銃三著作集 第五巻 人物編五』中央公論社、一九八九年(初出一九三五年)
- 富士川英郎「菅茶山(上・下)、福武書店、一九九〇年
- 武田威「忠敬と茶山」、『伊能忠敬研究』10号、一九九七年
- 「伊能忠敬の江戸日記」、『江戸の伊能忠敬—伊能忠敬銅像建立報告書—』伊能忠敬研究会、二〇〇二年
- 菅波寛「伊能忠敬と菅茶山の会談について」、『伊能忠敬研究』35号、二〇〇四年
- 図録第34冊『黄葉夕陽村舎に憩う 菅茶山とその世界Ⅲ』広島県立歴史博物館、二〇〇五年
- 松井義典「神石高原町に設立された四基の伊能測量碑」、『伊能忠敬研究』54号、二〇〇八年
- 『広島県の歴史散歩』山川出版社、二〇〇九年
- DVD版『国宝伊能忠敬測量日記 原文』伊能忠敬と伊能図の大事典をつくる会、二〇一一年
- 星埜由尚「箱田良助生誕の地」、『伊能忠敬研究』64号、二〇一二年
- DVD版『伊能忠敬測量日記解説』イノペディアをつくる会、二〇一五年
- 『伊能忠敬日本列島を測る—忠敬没後二〇〇年—』(前編・後編)伊能忠敬研究会、二〇一八年
- 『山陽道神辺本陣』菅波家編刊、二〇一八年
- 西村直城「伊能忠敬測量隊第七次測量における安芸・備後北部の行程」『広島県立歴史民俗資料館 研究紀要』第九集、広島県立歴史民俗資料館、二〇一〇年
- 『築城四百年記念 福山城資料集』福山城博物館友の会、二〇一二年

大阪市立中央図書館所蔵

「間重富関係資料」について

玉造功

間重富について

間重富(一七五六〜一八一六)は字を大業、号して長涯という。重富は諱である。蔵が十一あつたことから十一屋を屋号とし五郎兵衛を通称とする大阪の富裕な質商であつた。間重富は高橋至時とともに麻田剛立のもとで当時としては最新の西洋天文暦学を学び、寛政七(一七九五)年には幕命により高橋至時とともに出府し寛政の改暦をおこない成功させた。寛政の改暦のさなか、高橋至時が改暦御用のため京都に出張すると、間重富が十一歳年長の伊能忠敬の教育係をとめていた。

享和年間に伊能忠敬の東日本測量が進行する中で、間重富は享和二(一八〇二)年に長崎に出張した。八月の日食と月食を観測して長崎の経緯度を測定することが目的であつたが、さらに大阪から長崎までの測量を行った。これは西日本の測量を間重富に担当させようとする高橋至時の構想のもとで行われたが、高橋至時の死により頓挫した。文化元(一八〇四)年、幕府は間重富に江戸出府と天文方御用を命じた。天文方を嗣いだ高橋景保を教育・補佐しつつ、実質的に天文方高橋家の運営を任せられ、足掛け六年に及ぶ出府となつた。

文化六年の帰阪後には病気で中断しながらも、畿内の古寺社の遺物から古今の度量衡を調査する古尺取調を行った。間重富は文化十三(一八一六)年に六十一歳で亡くなったが、その後も間家では重新、重遠、重明と幕末まで天文方の御用観測が続けられた。

重要文化財「間重富関係資料」

文化庁の文化遺産オンラインによると、二〇一六年に、間家四代にわたる資料群七四一点が国の重要文化財に指定された。内容としては測量記録類、著述稿本類、文書・記録類、典籍類、器物類、地図・絵図類から構成され、大阪歴史博物館と大阪市立中央図書館の二館が所蔵している。

大阪市立中央図書館では早い段階から所蔵資料のデジタル画像をオープンデータ化してきたとのことで、間重富関係資料のうちで大阪市立中央図書館の八十四点については、大阪市立図書館デジタルアーカイブで精細画像が公開され、商業利用を含めて手続き不要で自由に利用できる。

伊能忠敬の月食観測記録

測量記録類の大半は間家四代にわたる天体観測記録である。その外、幕府天文方や各地の門人等と情報交換された観測記録もあり、その中には「当十六日月食 伊能勘解由(忠敬の隠居名)之測」と記された(図1)伊能忠敬による月食観測記録も残されている。

これは寛政十(一七九八)年十月十六日の月食の観測記録で、忠敬の垂揺球儀の振り子のカウンtr数が記録されている。最初に、正午のカウンタの数値は六十五万〇三百一十〇で、一日に五万九千七百三十八回振れるという基準数値を記している。次に「初虧しよか 下偏左」(欠け始め)、「食最深」

「復円右偏下」の観測結果が記されている。

最後に高橋至時の追記がある。書状を認めて封をしたところ、勘解由が自分の観測データを持ってきたので、直ぐに写して同封したとある。至時の書状は暦局の観測データを間重富に速報するものである。この書状に該当すると思われるもの

が十月十八日付けで高橋至時が間重富に送った書状で、『星学手簡』所収、『日本洋学史研究V』二五九頁に翻刻がある。

この忠敬の観測記録については、同年十一月二日付けで高橋至時が間重富に送った書状『星学手簡』所収、『日本洋学史研究V』二六二頁に翻刻、『会報』23号26頁に大意で、忠敬の観測は未熟なので当てには出来ないと厳しいコメントが付けられている。さらに書状には、忠敬も日月食観測の難しさが分かったようで、少しでも大きく見えるように、大阪のガラス職人の難波屋勘兵衛の三間の星鏡をいくらか売ってくれるか聞いて欲しいとの忠敬からの要望も伝えている。

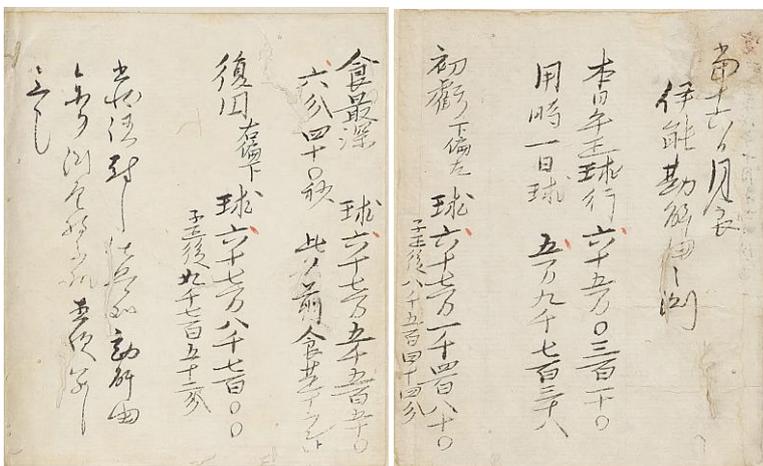


図1 「寛政十年戊午十月十六日月食：東都伊能勘解由測量」

大阪市立図書館デジタルアーカイブ

間重富の西国街道測量図

文化庁の文化遺産オンラインの解説によると、享和二年（一八〇二）に実施された西国街道測量図は十一鋪が残っている。播磨国赤穂郡宿村から備前国邑久郡藤井村に至る道筋の測量図で、野帳から地図化する際の第一段階の下の図に該当するとみられる。間重富の測量の内容、地図化の方法を知る上で唯一の資料として注目されること。

実測図は図2のように折りたたまれており、図名が記されている部分は、実測図を広げた図4の朱点で囲った部分の裏面にあたる。図の番号と図の端点を示す○で囲まれた二十八星宿の名称は朱書きである。十一鋪の表題部分は次の通りである。

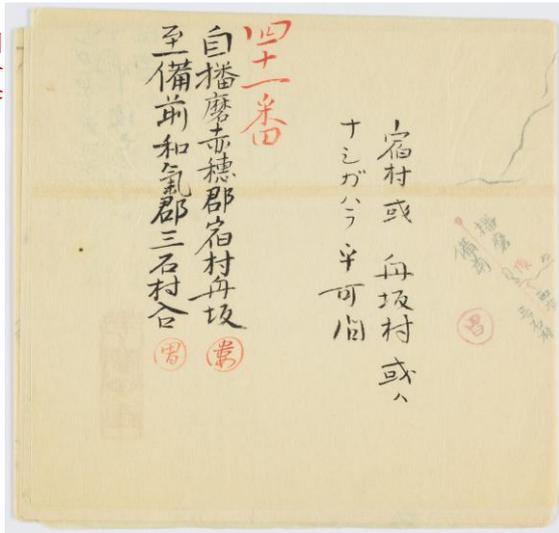


図2 「西国街道測量図」四十一番
折りたたまれた状態
大阪市立図書館デジタルアーカイブ

- ・四十番
備前邑久郡北方村入口ヨリ(張) 藤井村ノ内私印(龔) 止宿ニ至ル
- 同
- ・四十一番
自播磨赤穂郡宿村舟坂(龔)

至備前和氣郡三石村入口(青)

・四十二番

自備前和氣郡三石村入口(青)

至同 同村三谷川(龔)

・四十三番之上

自備前和氣郡三石村之内三谷川(龔)

至同 八木山村入口

・四十三番之下

自備前和氣郡八木村入口(龔)

至同 同村之内私印(龔)

・四十四

自備前和氣郡八木村之内私印(龔)

至同 東片上村之内私印(参)

・四十五

自備前和氣郡東片上村之内私印(参)

至同 伊部村之内私印(井)

・四十六

自備前和氣郡伊部村之内私印(井)

至同 香上村之内私印(鬼)

・四十七

自備前和氣郡香上村之内私印(鬼)

至同 邑久郡八日市村之内私印(柳)

・四十八

自備前邑久郡八日市村之内私印(柳)

至同 奈良原村之内私印(星)

・四十九

自備前奈良原村之内私印(星)

至同 北方村ノ入口ニ至ル(張)

四十番は四十九番の「北方村ノ入口」に続く西側の範囲を描いており、四十番は五十番の誤りであろう。



図3 日本学士院中図（中国四国）から表題に記載された地名を朱枠で囲んだ

図4は図2の四十一番を広げたもので、西国街道（山陽道）の播磨国と備前国の国境（図6に拡大）までを描いている。地図作成上の疑問点を図5のように付箋に記載して貼り付けているのも特徴的である。「方位齟齬」と記した付箋もあれば、絵入りの付箋には「此ノ図如何ニ」「此一紙ノ測方位不合」と記されている。



図4 「西国街道測量図」四十一番 大阪市立図書館デジタルアーカイブ

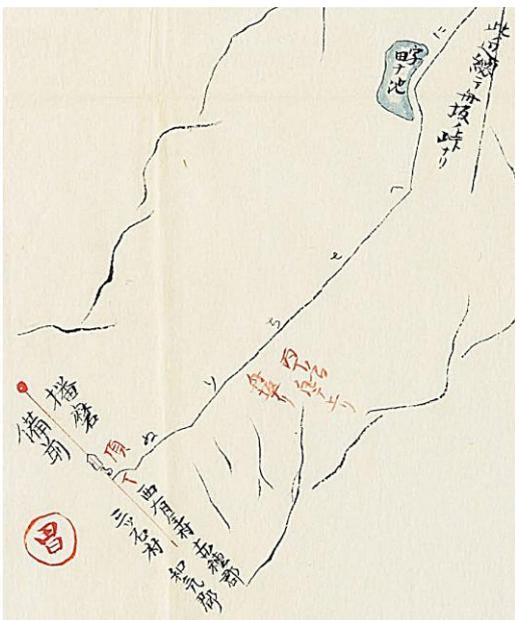


図6 地図の西端を拡大

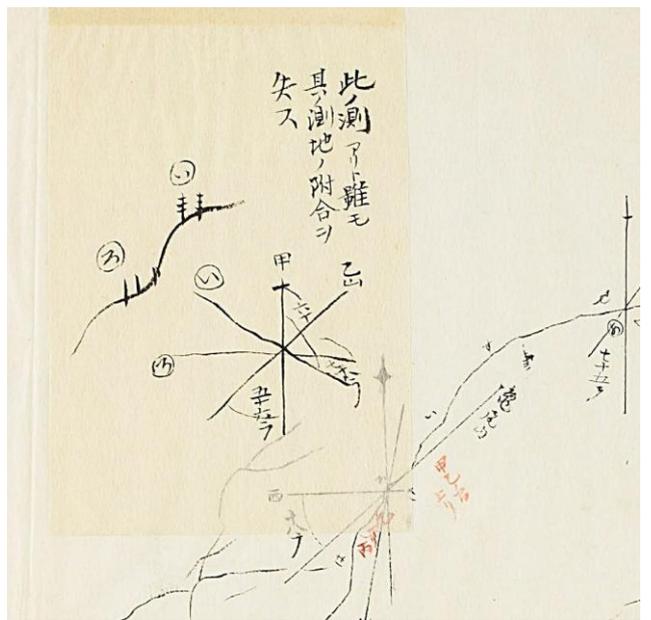


図5 付箋を拡大

戸村茂昭さんを偲んで

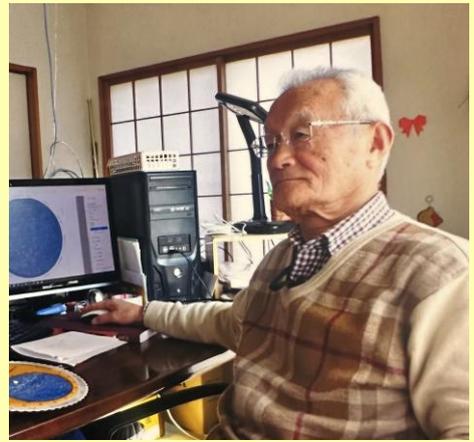
田野圭子

戸村茂昭さんを伊能測量協力者顕彰大会の窓口になったので知っている方は多いと思う。

渡辺一郎さんとの出会いが伊能忠敬研究をする契機となった。戸村さんは成東高校を卒業し電電公社のデータ通信事業本部(現・NTTデータ)に入りながら都立大学工学部電気工学科の夜間部を卒業した。NTT時代は、どの企業も戻込みした当時としては大規模な全国ネットワークの郵便貯金システムの中核メンバーとして開発に従事した。郵便貯金全国オンラインシステムの制御系ソフトを設計、NTTデータのシステム開発マニュアル作成。また全国それぞれの郵便局に何台のATMを置かせる算出し配置した。渡辺一郎さんはこのNTT時代の上司であった。

また成東高校時代三年間同じクラスであった高宮勲さんが忠敬の長女・稲の子孫であることを知り運命的な出会いを感じ、後に伊能忠敬研究に邁進していった。

渡辺さんは伊能忠敬研究会代表理事事であったが、研究会の他に伊能忠敬と伊能図に関してあらゆることがわかる百科事典を作りたいと思った。



戸村さんを誘い、二〇一〇年WEBサイトにイノペディアをつくる会を立ち上げた。会長・渡辺一郎、編集幹事・戸村茂昭の二人で始めたのである。新聞でイノペディアの協力者を募りSEの横溝高一さん、竹村基さん、NTTの後輩の稲葉末明さんが合流した。渡辺さんはNTTの大規模プロジェクトの仲間ではないかと喜んだ。

イノペディアが中心になり実現させたのは平成三〇年(2018)の忠敬没後二〇〇年記念、「伊能測量協力者顕彰大会」だった。イノペディアでは二〇一六年、江戸時代に伊能忠敬の測量に協力した子孫を探して、協力者一万二千人の名前をデータベース化して発表した。支援者の子孫が保存・伝承している未公開史料発掘とともに、顕彰を進め交流の場とする

るのが狙いであった。伊能忠敬は一八〇〇年から一八一六年に北海道から九州を歩き測量している。その際、全国各地で測量に協力したと思われる宿の提供者や案内人など、測量日記二八巻に記載されていた人名を都道府県、市町村別に日にちを追ってデータベースに表示した。システムは横溝さんが作り、戸村さんが窓口になり約二年かけて伊能測量隊の協力者を探した。伊能測量協力者顕彰大会は新聞にも載り大成功に終わった。協力者の子孫の方から戸村さん宛に多くのお礼の手紙が届いた。

残念ながら渡辺さんは二〇二〇年に亡くなったが、戸村さん達に伊能忠敬の語り部として動いてくれ、そのために積極的に研究し講演などの活動をするようにと言いつ残した。その意思を継ぎ、二〇二三年十一月二四日、伊能忠敬測量隊、天体観測データベースと戸村茂昭さんが記者発表をした。戸村さん独自の伊能忠敬研究は「天体観測データベース」。一次から三次の全天体観測データを解析し、特に一次、二次の解析は戸村さんが初めてである。この解析で、伊能測量隊の新事実が判明した。

一、伊能測量隊の天体観測、北向きと思われていたが72%は南向きだった。二、伊能測量での緯度の決定方法、観

測地での観測値と隠居宅での高度差から緯度を決定した。
三、隠居宅の緯度の決定方法、記録はないが天頂近辺で南中する恒星で決定したと推測。

四、北極星はほとんど観測していない。当時天頂から1.5度程度ずれていたため、半年強は昼間に南中するた観測できなかった。

五、月食観測データの解析。

つまり今回の天体観測データのデータベース化は日本国内では初めての試みである。伊能忠敬は頭の中に星座盤があり、星を見て時刻がわかった。戸村さんの活動は古巣である「NTTデータ同友会会長表彰」にノミネートされ「伊能忠敬研究会における星の観測・プレス発表・シルバール人材センター編集長」等の活動が社会貢献活動として会員の模範となる優れた活動と認められるためとの理由であった。戸村さんは大変喜んで発表結果を楽しみにしていた。七月二十三日に受賞が決定されたが、その日にお亡くなりになり受賞の連絡は翌日のメールで届いた。

悲しくも不思議な巡りあわせにNTTデータ同友会は十月の表彰式において特別に戸村さんに授与することになった。

伊能 洋さん安らかに

佐賀県武雄市 馬場良平

伊能洋先生の訃報を知り、しばらくは茫然としておりました。

私の街道歩きの師匠・河島悦子様は、「もう伊能忠敬研究会は終わりだ

ね！」と電話をして来られました。発足当時から一緒に活動してこられたから本当に悲しんでおられました。私も東京・富岡八幡宮での総会でお知り合いになり、いろいろのお世話になりました。その思いを佐賀新聞に投稿したものです。

「佐賀新聞二〇二五・七・十五付

伊能洋先生安らかに

武雄市 馬場良平 74

江戸時代の測量家・伊能忠敬のご子孫である洋画家・伊能洋

の地元、佐賀にあるべき文書と

伊能先生は昨年、体調を崩され、年末のあいさつ状に「90歳の折りは想像以上に厳しく、一度失った筋肉や体力は、なかなか元には戻らず、上手く歳を取ることの難しさを痛感しています」と記されていました。

先生は、3月中旬に送られて来た伊能忠敬研究会会報のお知らせ欄でした。突然の訃報にびっくりしました。伊能先生との思い出は尽きません。

また、私が本紙読者文芸欄・俳句部門において、「伊能図を重ぬる旅や鳥帰る」という句で一席を頂いた時には、お祝いにと千葉県・佐原の銘酒「忠敬」を送ってくださいました。

もう一度お会いしたかった。富岡八幡宮や佐原で一緒に過ごしていた、その優しいまなざしを思い浮かべながら、ご冥福をお祈りいたします。

（伊能忠敬研究会会員）



令和元年六月二日伊能忠敬研究会総会懇親会での乾杯の音頭を取られる伊能洋氏

伊能先生と初めてお会いしたのは、平成19年6月、東京・富岡八幡宮で行われた研究会総会に参加した時でした。その後、総会では何度もお会いしました。平成24年6月には、「佐賀の八賢人」の一人である佐野常民が、伊能忠敬の功績を紹介して講演した内容を記した小冊子「故伊能先生事蹟」を、佐賀県立図書館佐賀市立図書館、そして佐野常民記念館（当時）に寄贈されています。ご自宅に保存されていたもので、ページをめくればインクのおいが残っていました。伊能先生は「佐野常民先生

豊田市博物館の企画展

「伊能忠敬新しい地図の世界へ」

期間

2026年1月31日～3月29日

愛知県の豊田市博物館では豊田市合併20周年記念として伊能忠敬をテーマとする企画展が開催されます。以下、豊田市博物館HPから引用します。

測量調査で日本中を踏破し、「大日本沿岸輿地全図」（伊能図）の作製に尽力した伊能忠敬。測量のため、彼は市域にも滞在していました。

本展では、伊能図や、使用した測量道具の数々、自筆の記録類などの国宝をとおして、彼の偉業と活動を紹介します。また、伊能自筆の「測量日記」などから、市域での活動も紹介します。

加えて、安土桃山期の「日本地図屏風」や、江戸時代の日本を描いた古地図から、当時の人々の世界観・空間認識の様子を紹介するとともに、合併から20年となる市域を描いた古絵図の数々を展示します。

なお、会報8号・9号で紹介された「挙母城下の大庄屋鈴村家の記録」は豊田市ゆかりの資料です。

ゼンリンミュージアム企画展

「知っていますか？ 国が認めた地図製作者たち」

期間

2025年9月20日～12月26日

福岡県北九州市のゼンリンミュージアムHPの予告は次の通りです。江戸時代の地図製作者といえは、伊能忠敬が有名ですが、地図製作には他にも多くの人々が携わっており、貴重な資料を後世に残しています。その中から本展では、遺された資料が重要文化財に指定されている石黒信由、間宮林蔵、近藤重蔵、久米通賢、長久保赤水の地図製作者5名について紹介します。

伊能忠敬記念館の特別展

友トシテ善シ― 忠敬と清淵 ―

期間

2025年11月18日

～2026年1月18日

香取市立伊能忠敬記念館のHPの予告は次の通りです。

久保木清淵は津宮村（現香取市）出身の学者です。伊能忠敬とは生涯を通じた親交があり、その学識の高さから伊能図の作製にも携わっていました。本展示では久保木清淵にまつわる資料から、彼の功績と忠敬との関係を紹介します。

再入会員自己紹介

鳥取県

田中精夫よしお

この度、再入会します田中精夫です。前回は2000年の伊能ウオーク最盛期の時に伊能忠敬研究会に入会し、5年間『伊能忠敬研究』を愛読させていただきました。当時初めて佐原の町を訪れ、資料館や旧宅を見た時のことは忘れられません。一番の思い出は佐原駅構内です。忠敬を讃える幾つもの施設に感動しました。

その後、研究会から伊能隊の旗をいただき小学生を連れて鳥取県内の伊能忠敬の足跡を調査し鳥取県社会科の賞を幾つもいただきました。研究をやりつくしたと考え昨年度退会しましたが、今年の6月に私の知り合いの中学生がぜひ伊能隊のことを調べたいと言ってきました。そこで、まだまだ伊能忠敬の業績を多くの子どもたちに伝えなければならぬと考え、再入会することとしました。

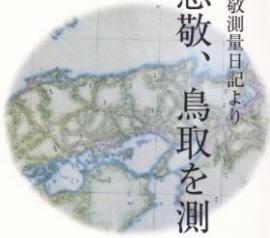
私も今年74歳になり、伊能忠敬の没年を過ぎる年になりました。腰痛のため歩く速度も遅

くなりました。忠敬も晩年は足も衰え歩くことが困難だったと思うと同情します。忠敬の晩年は、決して意欲は衰えることなく自分にも弟子にも厳しく律して偉業をなし終えました。忠敬に見習う点はまだまだあります。伊能を知りたいと考える子どもたちのためにも、もう一旗揚げたいと考えます。どうぞよろしくお願ひします。



韓国江原道江陵市鏡浦台にて

伊能忠敬測量日記より 忠敬、鳥取を測る



田中精夫

新入会員自己紹介

東京都

秋葉栄一

稲女子孫。全国農業会議所職員。
琴古流尺八開軒師範。

新入会員

千葉県 酒井右二さん

新入会員 東京都

エチエンヌ・バラールさん

お知らせ

伊能忠敬銅像清掃デーについて

伊能忠敬研究会が主催する富岡八幡宮の伊能忠敬の銅像清掃は2026年1月25日午前中に予定しています。ご協力頂ける会員の皆さんは事務局までご連絡ください。

ホームページについて

伊能忠敬研究会のホームページを8月から新サーバーに移してリニューアルしました。是非ホームページを覗いていただいて、ご意見を頂けると幸いです。また、何か不具合などお気づきの点がありましたら、事務局までご連絡ください。

会報でも伊能図の展示や関係イベントの情報を掲載しておりますが、4ヶ月ごとの発行のため、タイムラグが生じてしまいます。会報では紹介が間に合わないような情報については研究会ホームページでお知らせしています。各地の情報の提供をお願いいたします。

会報バックナンバーあります！

会報バックナンバーの在庫があります。新入会員や執筆者、一般会員の皆さまからの注文に応じます。

ただし、在庫切れの号もありますので、あらかじめ事務局にメール等で在庫の有無をご確認ください。

- ・ 会員価格一冊五百円(送料込みです)
- ・ 入手方法希望する号と冊数、氏名・〒住所を記し、事務局に申し込んでください。会報と代金振込書をお送りします。
- ・ 事務局メール mail@inoh-ken.org
- ・ 郵便振替口座

001501610728610

訃報

千葉県山武市の戸村茂昭さんが令和7年7月に逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

『伊能忠敬研究』 投稿要領

①原稿の長さ

論文・報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字(704字×三段または480字×四段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmと350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラやスマートフォンによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありません。

デジタルカメラのデータ仕様がわからない場合は、L判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル(JPEG形式またはTIFF形式)にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくはホームページ <http://www.inoh-ken.org/> を参照)

送り先

・電子メール添付の場合 kahno@inoh-ken.org

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って会誌及びホームページ掲載の許可を取ってください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいってください。本誌に掲載された記事の著作権は、伊能忠敬研究会に帰属することとします。他誌等へ転載する場合は、事務局に連絡して許可をとってください。

伊能忠敬研究会入会の御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等

入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

(留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

事務局メール mail@inoh-ken.org

郵便振替口座 00150607286100

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

編集後記

◇「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」が最終回を迎えた。◇連載第1回は64号、2012年のことである。◇「足跡をたどる」を完成させるということは、「測量日記」の全巻から日々の特記事項を抽出するという、気の遠くなるような行為に裏付けられている。◇長い間有り難うございました。

◇丁度1年前の8月末日の原稿締切日には1本の原稿も無く、会報の発行を危ぶんでいた。◇今号は8月に入った頃から原稿が順調に集まり、お年玉ならぬお盆玉を頂いて、酷暑を乗り切ることが出来た。◇内容的にも多方面から忠敬に迫るもので、会報の最初の読者になれるという編集子の特権を享受できた。◇原稿以外でも忠敬さんにかかわる写真・スケッチなどをお寄せください。(T生)

次号(第108号)は2026年2月発行、原稿締切は12月31日です。
皆さんの投稿を喜びつつお待ちしております。